
ロウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

覚醒未遂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウキユーぶー〜脆弱な6人目シックスメン

【Nコード】

N2130W

【作者名】

覚醒未遂

【あらすじ】

男バスVS女バスの試合も終わり、本格的にコーチに就任した昴朝のロードワーク中に会った、喘息で苦しむ少年（実は少女）との出会いが、また新たな風を彼に吹き込むのであった。

これは、（一応）バス経験者の作者が蒼山サグ先生の作品ロウキユーぶを読んで衝動的に書きたくなった物語です。

1日1回更新を目指してがんばりますっ！！
ので、月・木・日の週3更新を予定しています。

は無理らしい

プロローグ（前書き）

初めまして。覚醒未遂です。

衝動的に書きたくなったものですが、暖かい目で見守って欲しいと思っ
ています。

それではお楽しみください。

プロローグ

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……！……！」

……情けない。まだたったの5分位しか走ってないのにもう息をす
るのも辛い。でも、ここで立ち止まったらいつまでたってもこの苦
しみは克服できないよ。
そうやって、悲鳴を上げる僕の肺を叱咤して更にペースを上げよう
とする。が……

「はあっ……はあっ……ひゅっ……！？」

苦しい……息が……。

「かつ……ふっ……！」

そして、僕の意識はブラックアウトした。最後に覚えているのは、
アスファルトに体が叩きつけられた痛みと1人分の足音だった。

「づうっ……！？」

あれっ？ここは？僕は……一体……。
目が覚めたら、視界一杯に広がるのはアスファルトの黒ではなく、

晴れた青空だった。肺の苦しみがなくなっているのに気付き、ほっと息をついた。

「ねえキミ……大丈夫？」

「うわああっ!？」

びびり、びつくりした! 驚かさないでよ!! こう見えて僕は結構小心者なんだ!!

恐る恐る声が聞こえた方に視線をやると、1人の男の人が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

ちなみに言っておくと、今僕はベンチの上で精一杯身を縮ませているところだ。もちろん、その声の主から身をかばう形で、だ。

その当人はと言うと、僕の反応を見て気まずそうに苦笑いしていた。僕も、過剰過ぎる反応をってしまったかな。少し反省。

「す、すみません……驚いてしまって」

「いや、こっちこそごめん。ランニングをしていたら目の前でキミが倒れたから、ここまで運ばせてもらったよ」

なるほど。この人が面倒をみてくれたみたいだね。辺りを見回してみると、先程僕が倒れた場所から少し戻った場所にある公園の片隅にいたことがわかった。

「本当に、すみません。ご迷惑をおかけしてしまい……」

「いいんだよ。気にしないで。もう体は大丈夫かな？」

「あ、はい」

「そうか、よかった。……あ、よかったらこれどうぞ」

そう言っ、彼はスポーツドリンクを手渡してくれた。……ここ

こは好意を素直に受け取ろう。

「ありがとうございます。あ、僕は掛樋かけひ〓〓クロード慧けいと言います。先程は本当にありがとうございます」

「いや、当たり前のことをしたままでだよ。俺は長谷川昴」

僕が名乗ると、彼 昴さんも名乗り返してくれた。うん。いい人でよかった。

「にしても、一人でランニングして倒れるなんて危ないな。今までこういうことはあったのか？」

「いえ、意識を失うなんてことはなかったのですが、今日はちょっと無理が祟ったみたいで……強い発作が出てしまったみたいですね」「発作って……何か病気？」

しまった、ついべらべらと話しすぎてしまったかな？昴さんが心配そうな顔で僕を見ているよ。
なるべく暗くならないよう、努めて明るく話した。

「持病でちょっと喘息を。肺を鍛えるという意味で毎日走ってるんです」

「そっか。大変だな」

「ふふ、ありがとうございます。……それでは僕はこの辺で。」

あ、スポーツドリンクありがとうございます」

「ああ、じゃあ気を付けてな」

微笑みかけた後、僕は走り出した。

まさかこの出会いが、僕をあの場所へ連れ出すことになるとは思いませんでした。

scene・1 出会いと友達

プロフィール

【名前】 掛樋〓C〓慧（かけひ〓クロード〓けい）

【生年月日】 3 / 10

【血液型】 A

【身長】 158cm

【クラス】 6年C組

【所属係】 掲示係

【学業】 極めて良（ただし、体育で見学することが多い）

【特技】 （ストリート）バスケ。家事全般

【好物】 好き嫌いはない。あえていうならじゃがいもを使った料理が好き。（例：ジャーマンポテト、フライドポテト）

【人物】

母親が居らず、父親と兄3人と暮らしているためかなりのしつかりもの。だが、男系家族で育った為口調が男っぽく、容姿も中性的。胸は寂しすぎるほどまっ平ら。父や兄、周囲の人間の影響でバスケットを幼少期からやっているが、部活などの“競技”^{スポーツ}のバスケットよりも“遊び”^{パフォーマンズ}に近いストリートバスケスタイル。普段は礼儀正しく謙虚な性格だが、バスケットになると途端に相手をおちよくなるような、一見相手で遊んでいるかのようなプレイスタイルになる。自身では男っぽいのを少し気にしているが、スカートなど女の子の服を着るのにかなりの抵抗や恥じらいを感じる上、自分を溺愛する父、兄たちが『可愛い格好をすると変な虫が寄る』と言ってあえて男の子っぽい服を着せるのでなかなか女の子らしくなれずにいる。喘息のため、長時間激しい動きをし続けることが出来ない。

「あ、そうだ。今回の仕事が終わったら暫く日本に腰を落ち着かせることに決まったから」

僕の父さんは、有名な建築デザイナーだ。しかも専門は家屋ではなく、オフィスビルやスポーツ施設といった規模が大きいものなので、1回の仕事が長く続く。なので新しい仕事が決まる度に家を引っ越していた。それも国内ではなく国外だ。

だから、今まで沢山の国で沢山の人と出会ってきた。父さんの仕事がそろそろ終わると知っていたし、引っ越しもそろそろだと思っていた。

次はどんな町に行くんだろう。どんな人達がいるのだろう。お世話になった人達にお別れしなくては。近所のリチャード君、寂しがるだろうな。

期待半分、寂しさ半分で次の引っ越し先と仲良くなった皆のことを考えていた僕は、だからこそ父さんの言葉に驚き、料理を乗せたお皿をテーブルに置く形で手が止まってしまった。

「え？……どうしたの？」

「いやな、そろそろ日本食が恋しくなったのと、御爺様が慧に会いたいところなるからな」

と、話す僕の父。掛樋^{シヨツユア}「J」ミツシエル。45歳日本国籍のアメリカ人。いつでも心は日本人なんだそうだ。

確かに、ここ3ヶ月ほどお米を食べてない。味噌や醤油も近くでは売っていないので現地の料理になってしまう。お爺様とも半年くらい会っていないだろう。必要以上に僕を可愛がるお爺様。抱きつい

てきて蓄えられたひげをこすり付けられるのはちょっと痛いけど、僕もお爺様には会いたい。

「それにな、そろそろ慧にも……一箇所で友達を作らせてあげたいとおもつてね」

「父さん……」

「さ、慧が作ってくれた美味しい料理が冷めないうちに早く食べよう。兄さん達も起こして、食べ終わったら引越しの準備しておいてくれ」

「はい。じゃあ起こしてくるから先に食べててね」

全ての料理を並べ終え、父さんがそれに箸を突いているのを背中で感じながら、僕はリビングから出た。顔は、期待と父さんの気遣いから満面の笑みになっていたに違いなかった。

それが、つい3週間前のこと。

父さんの仕事も無事終わり、僕たちは日本に帰ってきた。新しい学校にも入学手続きは済ませたし、準備はぬかりない。今度から新しく通う学校は、私立慧心学園。制服を見た時はあまりの可愛らしさに赤面してしまい、着たくないと言っのが正直なところだけど……流石に無理だよな。ま、まあその辺は慣れていくしかないんだろうね。学校には次の月曜日……詳しく言えば明日から通うことになっている。今日はこれからお世話になる町を詳しく知ると、ついでに日に当たりたいのと散歩をしている。ついでに言えば、今朝危ないところを助けてくれた人に偶然でも出会えたら……とか思っていたけど、流石にそこまで都合よくいかないので、断念。

そして今、たまたま通りかかった公園でバスケットボールを見つけ

た。こんなところにあるんだと驚きつつ、僕も今までバスケットで友達を作ってきたので大好きだ。自然と頬が緩み、近くに落ちていたボールを拾ってシュートを打ってみる。

……ドンツ、パスツ

バックボードに当たり、リングを通過した。 うん。爽快だ。調子がよくなりそのまま大技をやってみようかなとか思い始めた時、大声で怒鳴られた。

「あ！！何人のボール使ってるんだよ！！」

声に驚き振り返ると、僕の後ろ5mくらいのところにツンツン頭の僕と同じ年くらいの男の子がいた。眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに僕を……いや、僕が持っているボールを指差している。どうやら、このボールは彼が使っていたものらしかった。

「返せよ！！俺のボール！！」

「え、あ……」

僕が固まって動けないでいると。彼は不機嫌そうにズンズンと足音を鳴らしながら近づき、奪い返した。

「い、ごめんね。悪気はなかったんだ。ただ誰かの忘れ物になって

……」

「……………」

思わず肩をすぼめて謝ると、彼を包んでいた怒気のオーラが徐々に陰を潜めていった。

「こつちこそ……わかるかったよ。いきなり怒鳴ったりして」

気まずそうに、目を逸らしながらそう言ってくれた。ふふ、本当は優しい人みたいだね。

「うん。ありがとう」

「何お礼言っただ？」

「え、ああ。ボール、使わせてくれてありがとうってね。……ねえキミはこの近くに住んでるの？」

「ああ、まあ……」

「僕は掛樋〃〃慧。ついこの前引越してきたばかりなんだ」

「俺は竹中夏陽。お前、バスケやってるのか？」

その後、軽く僕は今までのことを夏陽くんに話した。今まで色々な国を転々としていたこと、しばらくぶりに日本に帰ってきたこと、これからは日本で住むこと。そして、僕が今までバスケをやっていたことと、慧心学園に転入することを話したら、彼は凄く嬉しそうにしていた。彼も、自分はバスケが大好きだと言うことを話してくれ、すぐに意気投合した。そして、慧心学園にはちゃんとバスケボール部があり、彼がそこに所属していることもわかった。

「なあ慧！お前も当然バスケ部に入るんだろ！？」

「うーんどうかなあ。僕はしっかりとした団体でやったことないから不安なんだ」

「そうなのか……じゃあ、せめて1対1で勝負しようぜ！！」

当然、こうなることも予想は出来ただろう。無論、僕はすぐに承諾した。

勝負が終わり、僕たちは地面に座っていた。今回は運良く発作が出なかったから、最後までやりきることができた。結果は……僕の勝ちだった。

「お前……強すぎだろ……」

「ふふ、ありがとう。でも、夏陽くんも、上手いじゃない」
「……まだまだだろ」

時計を見ると、そろそろ帰って洗濯物を取り込んだり、夕食を作ったりしなければならぬ時間帯だった。

「あ、そろそろ帰らないと……」

「え！？もう帰るのか！？もうちょっとやろっぜ！！」

「ごめんね。でも帰らなきゃいけないから……また明日。学校で会おう」

「そっか……わかった。じゃあ明日な」

渋々と言った感じで、彼はわかってくれた。ほっと一息つき、僕はそのまま彼に背を向ける。

「おい慧！！」

公園から出たところで、夏陽くんが声をかける。

「何？」

「同じクラスに、なれるといいな！！」

「……ふふ、そうだね！！それじゃあまた！！」

この町での初めての友達は、とても気のいい男の子だった。

でも、僕は1つ彼に大きな誤解を与えたままだった。

scene・2 転校生はハーフ

side・N

今朝の俺は、そうとう浮かれていたんだと思う。もちろん原因は昨日のアイツ。

掛樋かけひ Cロード 慧けい。金髪の、ちょっと頼りなさそうな顔をしたアメリカ人とのハーフの少年。ストリートでバスケットをやっていたといい、見たことも無いような技術で俺を圧倒した。そのくせ気取ったところは一切なく、負けても悔しいけど不思議と嫌な気分にはならなかった。

そんなやつが入れば、間違いなく男子バスケット部にいい影響を与えてくれる。そう思って、俺は慧を心待ちにしていた。

朝、席に座っていると真帆のヤツがうるさく騒いでいた。

「ねえねえ!! 今日テンコーサーが来るんだって!!」

「転校生?」

それを紗季がめんどくさそうに対応している。

「そう!! しかもアメリカから!! やっぱこう…… 『ニホンスバラスィーデスネツ!! ハツハ!!』とか言うのかな!？」

「そんなアメリカから来るイコールアメリカ人なわけじゃないんだから。もしかしたら帰国子女とかかもしれないでしょ? さっさと席につきなさい」

「でさでさあ〜」

「

まったくうるさいヤツだ。でも、真帆の言う転校生ってやっぱり慧のこと……だよな？そうか、同じクラスか……これは楽しくなりそうだ。

日本にはあまり滞在したことはないって言ってたし、しばらくは俺が面倒見てやるうとか、D組のみんなを紹介してみんなでバスケットしようとか考えていると、チャイムと同時に美星先生が入ってきた。

「知っている人もいると思うけど、今日は新しい友達がやってきました！！」

やっぱりそうだ！！

俺の心臓が鐘を鳴らし、期待が頂点に達した。

「それじゃあ入ってきてー！！」

先生の声から数拍置いた後、控えめに静かにゆっくりとドアを開けてソイツが入ってきた瞬間。

ソレは、一気に落とされた。

side . K

うう、やっぱり恥ずかしい。僕にはこんなの絶対に似合わないって……。ほら、みんなも僕をじっと見てるし、ああ絶対顔真っ赤だ！！
そう言えば今日の夕飯何にしよう？父さんは仕事で遅くなるって言うってたし兄さんたちも部活や仕事で遅くなるかもって言うってたから

少し手間をかけた料理でも作ろうかな。それにえつと……ええつと……。

「慧くん？あの……もしも聞いてる？大丈夫？」

「はい？ あ、す、すみません！緊張してしまって……」

「にははは。大丈夫大丈夫。ほら、自己紹介して」

「あ、はい」

現実逃避していた頭を何とか戻して、みんなと向き合う。これから仲良くする人たちだから、しっかりと挨拶しないといけないね。

「……掛樋〃C〃慧です。父の仕事の都合で、L・A・から引越してきました。好きなことはストリートバスケットです。日本にはあまり来ることがないので、常識が所々抜けているかもしれないませんが、どうぞよろしく」

そう言い終わった途端、1人の男の子が立ち上がり僕を指差す。つて

「な、夏陽くん!？」

「け、慧おまつ はあ!?!はあ!?!?はああ!?!?!?」

「何朝つばらから3わけわからんポイントも獲得してんだ？」

「先生は黙っててよ!!慧お前女子だったのか!？」

「あ、あれ?言っってなかつた……け……?」

確かに、言っってなかつたような気がしなくもないような……。

「あれ?2人とももしかして知り合い？」

先生が意外そうな顔で尋ねてくる。夏陽くんは目を見開いて口をパ

クパクさせているし、僕が答えた。

「はい。昨日散歩中に偶然出会って。……ジャージだったから勘違いさせてしまったみたいですよ。ごめんね夏陽くん。その……隠してたつもりはなかったんだ。ほら僕って……男の子っぽいから、さ」

僕が謝ると、気を取り直したかのようにハツとなり、気まずそうに視線を泳がせる。

「い、いいよ別に……ちょっと驚いただけだし」

「うん。ごめんね。……ありがとう」

「まあなんだかよくわかんないけど、丸く収まったところだし、ええっと空いてる席は……」

「みーたんみーたん！……ここ！……ここ空いてるよー！……」

見ると、栗色の髪を2つに縛っている女の子が自分の隣りの席を指している。

「つてかみーたんて……」

「おーじゃあそこでいつか。慧くん。あそこに座ってね」

「はい。わかりました」

導かれるままに席に座ると、先程の女の子が話しかけてきた。

「あたし三沢真帆！……よろしくねけっちゃん！……」

「けっちゃんて……うん。よろしく。真帆くん」

あだ名はちょっと恥ずかしいけど、賑やかで話しやすい子だ。

「ねえねえ！……さっき言ってた“えるえー”ってどこ？」

「ロサンゼルスのことだよ。“Los Angeles”の頭文字をとってL・A。」

「ストリートバスケット何？フツのとは違うの？」

「主に室外でやるバスケットだけど、部活でやるスポーツって言うよりも、遊びでやるパフォーマンスって感じかな？あっちではけっこうメジャーなんだ」

「日本語上手だね！！英語も話せるの？」

「父が親日家だから日本語はスラスラ言えるよ。英語とフランス語なら、日常会話程度に」

「あとね！！あとね！！」

……ちよつと賑やか過ぎるのが玉にキズ、かな？

「こら真帆。掛樋さん困ってるでしょーが。つてか授業中なんだから静かにしろ」

「うう、わかったよ」

真帆くんの後ろにいる子が、彼女の頭に拳骨を落とした。はは、痛そうだ。

「ごめんなさい掛樋さん。私は永塚紗季。紗季で構わないわ。クラス委員だから、困ったことがあったら言ってね」

「うん。わかったよ、紗季くん。僕も慧でかまわないよ。よろしくね」

そして、前を向いてマジメに授業に取り組むことにする。少しシステムがあつちと違ったけど、内容はわかったからよかった。

そして、休み時間になると5人の女の子に囲まれた。内2人はさつき話した真帆くんと紗季くん。

「初めまして。湊智花です」

「香椎愛莉……です」

「おー。ひなた。袴田ひなた」

「掛樋〓〓慧です。よろしく」

「あたしたちバスケット部に入ってるんだ。ねえねえ、けっちは部活入るの？」

「どうしようか迷ってる場所なんだ。今まできちんとした団体に入ってプレイをしたことがないからね。少し不安で……」

情けなく苦笑いをするけど、真帆くんは笑って受け流していた。

「そんな厳しいところじゃないよ。すばるん優しいし」

「すばるん？」

「長谷川昂さん。私たち女子バスケットボール部のコーチをしてくれているの」

「長谷川、昂さん……」

僕が聞き返すと、智花くんが説明してくれた。
もしかして……

「ん？どうしたけっちゃん」

「いや………うん。そうだね。次に活動する時に参加させてもらってもいいかな？」

「おお！？本当か!？」

「ご迷惑じゃなければ、ただどね」

「迷惑なんかじゃないよ!!ね」

真帆くんが促すと、みんな頷いてくれた。

「ええ。駆け出したから、かなり人数が少ないしね」
「それに、やっぱり人数が多いほうが楽しいと思う」
「おー。けいもいつしょ」

順に紗季くん、愛莉くん、ひなたくん。

「それに、アメリカでバスケをしてたんだよね？」

「うん。あくまでストリートだけだね」

「どんなプレイをするのか、とっても楽しみ」

と、笑顔で智花くんが言ってくれた。

はは、本当に気のいい人ばかりだな。

s c e n e . 3 恥らう慧(前書き)

な、何とか間に合いました……。PV数がいつの間にか1,000を越えていたので凄く驚きです。さすが口ウキゅーぶ。お気に入りも10件を越えていたので非常に嬉しいです。これからもよろしく願います。

あと、感想等あれば非常に喜びますー!!

s c e n e . 3 恥づけ慧

〔Secret talk〕

慧

『ね、ねえ……ホントにこの恰好じゃないとだめなのかい？』

真帆

『ダメダメ。シンニューサーなんだから』

慧

『だ、第一僕にはこんな格好似合わないし……恥づかしいよ……』

……』

ひなた

『おー。けい恥づかしがり』

真帆

『おっ。その目線いいぞ……潤んだ瞳でアタックだ……』

慧

『ねえ話を聞いてよ……！』

s i d e o t h e r

放課後、体育館では智花たち女子バスケット部が練習をしていた。昴が来るまでストレッチをしたり、軽く走ったりして身体を暖める。そして今、昴が体育館に入ってきた所だ。いつもならここから彼の指示にしたがって練習を始めるのだが、今日は少しちがった。

「え？新入部員？」

「そうなんです。今日転入してきた子が前の場所でもバスケットをやっていたらしくて、話をしたら是非参加させて欲しいって」「へえいいじゃないか！！それで、その子は？」

智花の話聞いた昴は、嬉しそうに顔を綻ばせる。だが肝心の慧が見当たらない。

すると、真帆が何か企んでいそうな笑みで手を上げる。

「ハイハイ！！すばるん！！けっちゃんならこっちだよ！！」

「おー。おにーちゃんこっち」

それに同調したひなたと一緒に、昴を体育館倉庫前まで引きずる。紗季たちも、またかとあきれ顔でその後ろについていった。

「じゃあちよっつと待っててねー」

そして、单身倉庫の中へと入っていく。

「ああ！！けっちゃん！！逃げんな！！」

「無駄無駄！！お前の服は全て預かっているう！！」

「つつかまえたああ！！ほら無駄な抵抗はよせえ！！」

等々、かなり不安にさせる言葉が聞こえてきた。

「む、無理無理無理無理絶対無理だよ！！こんな格好じゃあ出れないよ！！」

「諦めろ！！ここは完全に包囲されている！！さっさと出たほうが楽だぞ！！」

「お願いだよ真帆くん！！普通の服を着させて！！」

なんでこんなに細い腕なのに振り切れないんだ！？

僕は別室でこのメイド服に着替えさせられた後、倉庫へと連れられて中で待機するように言われていた。暗くて最初は自分の姿を意識せずにいられたのだけれども、着ている服の重みで徐々に自分がどれだけ恥ずかしい格好をしているかが嫌になるほど理解できた。いや、させられた。

そして、倉庫の外が騒がしくなったかと思ったらいきなり倉庫のドアを開け放って真帆くんが現れ、現状にいたる。

それはともかく、この状況をどうにかしなくちゃ……そうだ！！

「やっ！！」

「うあっ！！なに！！」

僕が思いついた案。それは、顔を伏せながら僕が出せる最高速度で駆けて、僕と認識させないように教室にある予備のジャージを取りに行くというものだ。

早速、今まで後ろに踏ん張っていた力を逆向きにして一気に駆け出すと、真帆くんは尻餅をついてこけた。
よし……このまま扉を開けて駆け抜ければ

！！

「あまあい！！ひな！！」

「おー。」

と思ったが、いつの間にかいたひなたくんが僕の前に両手を広げ、扉を背にして立ち塞がる。小さい体を一生懸命広げて見上げてくるその姿を見ると……。

「う……」

うう、切り込めない……。この子に荒い手を使うとなんだか人として何かを失うような気がしてならない！！

「隙ありい！！」

「しまった！！」

怯んでいる隙に、立ち上がった真帆くんが僕を羽交い絞めにしていく。くっ、振りほどけない。

「ひな！！コアラアタックだ！！」

「おー。こあらあたーっく」

「うあ……これは卑怯だー！！」

ひなたくんが、僕の体に張り付いてくる。これで僕が抵抗したらひなたくんが落っこちて、運が悪ければ怪我をしてしまうかも……。

「ひっひっひ。さあ年貢の納め時だー！！」

「あ……あ……ううう……」

終わった何もかも……。

「それはあんたよ」

「ぎゃっ!」

と思った時、救世主が現れた。紗季くんだ。

「なにケイ使って遊んでるのよ。ひなも、前から真帆の言うことな
んでも聞いちゃダメって言うてるでしょ？ケイ泣きそうになってる
じゃない」

「けっちんごめん」

「けいごめんささい」

「あ、う、うん。大丈夫だよ。……できれば、早く服を返して欲し
いけど」

2人は謝ってくれたが、僕はまだメイド服のままだ。はやく……開
放、されたい。

「改めまして、初めまして……ではないですよ？覚えてますか？」

コートである昴さんを前にそう言うと、みんな（特に智花くん辺り
が）驚いたように僕を見てきた。まあ、確かにそうなるよね。つい
この前まで外国にいた人間が初対面だと思った人を前にこんなこと
を言うのだから。

「うん。覚えているよ。昨日あったよね？もう体は大丈夫？」

「はい。調子がいい時は出ないので……それにしても、驚かないんですね」

「えっと……正直最初見たときは驚いたけどね。女の子だったとは……」

「あ、あのー！ちょっといいですか！？」

急に、慌てたように智花くんが入ってきた。

「お、お2人はお知り合い……なんですか？」

縋るような目で、昴さんに問いかける。

「うん。ほら、昨日智花にも話したよね？ランニング中に倒れてた男の子を介抱してたから遅くなったって……それが慧だったみたい」

「あ、そ、そうなんですか……」

「うん。僕も驚いたよ。助けてくれた人がまさかこの学校でコーチをしているとは思わなかったからね。面白い運命のめぐり合わせだ」

あらかじめ、僕が酷い喘息持ちで酷いときは5分も走っていられないことは話してある。だから、昴さんとの邂逅もすんなり理解してくれた。

「それじゃあ改めて自己紹介しなくてもいいよね？早速練習始めようか……と思ったけど」

昴さんの言葉に、みんなが注目した。

「慧も経験者らしいし、ここは3on3のミニゲームで慧の力とみんなの成長を見てみようかと思う」

なるほど。確かに、僕と言う新しいものが入ってきたら、いきなり練習よりも試合でどの程度の実力があるかわかったほうがいいと判断するのは賢明だね。でも、

「あ、あの。ちょっといいですか？」

「ん？どうした？」

「非常に厚かましいお願いだとは思っていますが、出来れば1on1がいいです」

「え？でもなあ……」

さすがに難色を示すか。紗季くん曰く、智花くん以外は初心者であり多くのプレーが出来ず、唯一の経験者である智花くんは小学生とは思えない技術の持ち主だと聞く。技術に極端な差があるから、1on1では正しい能力がわからないと思っているのかも。

「紗季くんから、経験者である智花くんはかなり上手くて、他のみんなは限られたプレーしかできないと聞きました。それって、試合はチームワークでなんとか回しているってことですよ？そんな中で、誰がどんなプレーを出来るのか理解できていない僕が割り込んだら、逆に足手まといになると思っています」

「う、そういわれれば確かに……」

「それに」

「それに？」

僕は智花くんの方に顔を向け、挑戦的な笑みを浮かべてから再び鼻さんと向き合う。

「強い人間と戦いたくなるのは、スポーツをしている人間では当たり前ですよね？」

この言葉が、決定打だった。

s c e n e . 3 恥らう慧（後書き）

次回、やっとバスケットに入れます……。

s c e n e ・ 4 王道VS邪道(前書き)

あまり上手くかけていないかも……ごめんなさい。

あ、言い忘れていましたが、この作品は2巻の初め。昴がコーチに正式に就任した直後あたりからはじまっています!!

scene . 4 王道VS邪道

「じゃあ試合は10分間。ゴール1回1点で5先取で勝利……で大丈夫だよな?」

「はいっ」

「大丈夫です」

別に断られてもよかつたのだが、僕が放った挑戦的な言い方で智花くんが火がついたみたいで凄くいい目で見えてきた。さらに、真帆くんたちは反対するどころか僕と智花くんが対決するのを見たいといった。しかも……。

「やれけつちん!!もつかんは強いぞー!!」

「ケイ!!しつかり!!トモも負けるな!!」

「おー。ともかもけいもがんばれー」

「け、怪我はしないように」

声援は五分五分だった。

じゃんけんの結果、僕がまずディフェンスをすることになった。

まず、ここでこの試合のルールをおさらいしておこう。

試合は1対1。ルールはバスケットボールの公式ルールにのっとり、昴さんが審判。

例外としてシュートは1本1点で、もちろん3ポイントはなし。ファウルによるフリースローはなし。

ハーフコートゲームで、オフェンスがシュートを決める、もしくはディフェンスがボールを奪うとコートの真ん中を横断するハーフラインの中央からスタート。

……こんな感じかな。

「それじゃ、スタートッ!!」

(注：試合は基本的に昴の一人称で進めます。あと、バスケの用語がでてきたら簡単な説明を【】内に入れますので、ご安心ください)

side . S

まさか、慧が自分から智花との1on1をのぞむとは思わなかった。まあ、みんなはかなり乗り気みたいだけど。彼……いや、彼女はアメリカのほうではストリートでバスケをやっていたからちよつとおかしなところがあるけど目を瞑って欲しいといっていた。さて、智花相手にどんな試合をするのか楽しみだ。

智花は慧の様子を見るようにドリブルはせず、腰の右側に両手にボールを持ったまま隙を窺っていた。一方慧は、ディフェンスの基本である両手を上げると言うことはせず、腰を落とした状態で同じように智花の隙を窺っている。そのディフェンスは隙が多いが、微妙な距離感を保っていて、シュートを打とうと構えればブロックを、抜こうとドリブルをすればコースを防げるような位置取りは完璧だった。

「さあ、おいで……」

挑発するように呟く。すると、智花はあの鋭いドライブで慧を右側から抜こうとする。慧はそれにバッチリと反応するが、そこからが智花の本領発揮だ。

智花はすぐに反転すると、逆側に切り込み、慧を振り切ってレイアウトプを決める。相変わらず軽い身のこなしだ。

「おお!!さすがもっかん!!」

「へえ……ほんとに上手いなだね」

慧は、悔しがる素振りを見せずにそう言って笑った。だけど、その笑みは今までのさわやかな感じは残っているが、どこか遊んでいるような感じだった。

智1 - 慧0

今度は、慧のオフエンス。智花にボールを渡し、それを返してもらう。いわゆるワンタッチだ。すると智花とは正反対に、すぐにドリブルを突き出した。腰を落とさず。ゆっくりとボールをついている。もしかしたら、チェンジオブペース【ゆっくりとドリブルをした後、急に素早いドライブをして、相手のタイミングをずらす戦法】なのだろうか？

智花もそれをわかっているのだろう。ドライブを警戒して少し下がりが気味で構えている。

「そんなに離れて、大丈夫かい？」

慧が再びそう尋ねる。どうやら、慧は試合になると口数が多くなる性質なのかもしれない。

次の瞬間、ボールはゴールに向かって放たれていた。

「えっ？ あっ！！！」

智1 - 慧1

智花も、そんなシュートとも思えないような行動に呆気にとられていた。

慧は、ドリブルをしていたボールが自分の手についた瞬間、それを片手の下投げで放ってシュートを打ったのだ。そしてそれに全員が釣られているうちに自分はゴール下まで走りこみ、リングには当たらなかったがバックボードに当たって跳ね返ってきたボールを空中で受け取ったままひょいとゴールを決めた。そして、地面に降り立つと振り向いて右手を上げた。

振り向いた彼女は、ニコツと笑う。

「これで同点だね」

「うおおおお！？ けっちゃんすげー！！！」

「あ、あんなやり方があったの？」

「おー。けいじょうず」

「か、かつこいい……」

コートの外で見学の4人はそれぞれ歓声を上げ、慧を褒める。俺も、かなり驚いた。ストリートの技を見るのは初めてだが、これだけはわかる。慧は、かなりやり慣れている。

智花は、キラキラと更に目を輝かせてさらに闘志を高めていた。

「それが、ストリートバスケット？」

「うん。言ったよね？ パフォーマンスのバスケットだっ」

再び両手を下げた形のディフェンスの構えを取ると、ニヒルな笑みを浮かべた。

「カツコよくそれでいて狡猾に。それがストリートだよ」

「それじゃあ、私はスポーツのバスケットで勝ってみせる！！」

こんどは、その場所からあの綺麗なフォームでシュートを放つ。完全に反応が遅れた慧は、飛び上がってブロックをしようとするが、ボールには届かず。綺麗な放物線を描いてボールはリングへと吸い込まれる。

再び歓声上がるが、慧は呆然と、ボールではなく智花を見ていた。

「凄い……綺麗な」

その唇はそう、呟いているように見えた。

智2 - 慧1

慧のオフエンス。

また、ゆっくりとしたドリブルから始める。だが、これがチェンジオプペースなのか、それともシュートなのかはわからなくなった。だから、智花も距離を詰めてプレッシャーを与えることにしてみた。いだ。

智花が近づくと慧は左手を前に出して、右手でついているボールを守るようにドリブルをしている。

慧の手からボールが離れたタイミングを狙ってボールに触れようと智花が身をかがめた瞬間、再びシュートが放たれていた。

智2 - 慧2

俺は自分の目を疑った。慧は、信じられないような方法でシュートを打ったのだ。

智花が前に出ようと身をかがめた瞬間、慧はビハインドパス【ボールを持つているほうの手を背中に回し、逆側にパスを出す高等技術】の要領で、そのままシュートを打っていた。しかも、それはバックボードに当たってリングを一周した後、中へと吸い込まれていた。そしてまた、右手を上げて振り返っていた。

「ビハインドシュート。こんな技もあるんだよ」

「うおおおお！？ かつけー！ ねーねーすばるん！！ すばるんもあーゆーの出来る！？」

「いや……普通無理だろ」

一体どんな体の構造をしているのだろう。いやまず、あんなシュートを実現させていることに驚きを隠せない。

そして、智花のオフセンス。

「慧くん……どこでそんなシュート身に着けたの？」

「ああ。あつちでは僕は1番背が低かったからね。勝つために考えたのが、そういう手だっただけだよ」

そうニッコリ笑う。

今度は、智花はドライブで抜いてきた。慧もそれに食らいつき、なんとか着いて行くが如何せん智花のほうがスピードは上だ。初動が遅れた、慧を抜き去りまたレイアップを決めた。

智3 - 慧2

慧のオフセンス。

先の2回で、普通の考え方では慧の攻撃は止められないと判断した

智花は、なるべく近づいた位置で構え、決して自分からは行動しないようにする。

今度は慧はさっきのようなゆっくりとしたドリブルではなく、ボールハンドリング【ボールを持ち、体の周りを周回させる初心者がまず最初にやる基礎中の基礎】を始めた。腹回り、そして足を開いた間を前、後ろから通す8の字。

……行動がわからなすぎる！！

そして、右手から背中の後ろを通して左手に渡した瞬間急に動き出す。急に左足から踏み込んで智花の顔の右側に手を伸ばすと、そのまま手のスナップを利かせて更に逆側に伸ばしていた右手で受け取った後、そのまま後ろに跳んでフェイダウェイシュートを打つ。だが、それは惜しくもリングに弾かれた。

智3 - 慧2

ここで初めて、点数に差がついた。

scene . 5 決着（前書き）

この作品で慧がやっている技は、作者覚醒未遂が持っているストーリートバスケのゲームを参考にしています。

現実には実現不可で、挑戦しようとするフォームを崩してしまう上に体に思わぬ怪我を負ってしまう可能性もあります。よい子の皆さんは真似しないように。

あとすみません。すっごく短くなってしまいました！！

scene . 5 決着

side . S

「あっちゃあ〜。外したあ」

跳ね返ったボールは智花のもとへと跳んだので、そのまま慧のオフエンスは終了。智花はほっと一息つき、慧は少し大げさに頭を抱えて天を仰いだ。

そして、智花のオフエンス。

余裕のできた智花だが、ここでペースを崩さずに一気に攻めて差を広げにかかるところだ。

また、智花の鋭いドライブ。だけど今度は慧もそれにバッチリ反応してついていく。だが、それでは甘い。

「っ……………!!」

智花は鋭いドライブの勢いを一気になくし、ストップ&シュート。

慧は勢いに逆らえず、智花を置き去りにして自分だけ前に進む形で追い抜いてしまう。

これでまた、智花がシュートを決めると思った瞬間。

「なっ……………!?!」

慧が、また俺達の度肝をぬいた。

シュート体制に入った智花を置き去りにした慧は、すぐに両手を地面につき、足を逆立ちをするように振り上げる。智花の手からボー

ルが離れた瞬間、足で蹴ってソレをブロックした。

「うそっ!?!」

「おおっ!?!」

智花や、周りのみんなから驚きの声上がる。

でもな慧……

『ピッ』

「キックボール【足でボールを蹴ること。相手ボールからスタートする】」

それ、ヴァイオレーションだから。

なんとか智花のシュートを防いだ慧だけど、やっぱり一つ一つのプレイの動きが大きすぎるせいか息切れが早い。智花よりも荒い息をしている。

智花も、変則的過ぎる慧の動きに翻弄させられていつもより息が上がるのが早い。

再び、智花のオフエンスからスタート。

智花は今度は様子見をせずに最初からドライブで切り込んできた。

今まで最初は少しでもお互いに隙を窺っていただけあって、慧は驚いたような顔をして反応が遅れてしまった。

「……………なんてね」

かと思つたが、慧は脇を抜かれた瞬間後ろに飛んで仰向けに倒れこむと、その状態で智花のボールを弾いた。

おいおい、なんて危なっかしいプレイを……。あと一步でファウルだ。場合によってはインテンショナル【故意のファウル。フリースロー2本に加え、ファウルを受けた側からのスタート】をとられるプレイだろう。でも、慧は上手くボールだけに触り、すぐに体制を整えた後ボールを拾った。

智3 - 慧2

「いやホント、智花くんは強いね」

「慧くんこそ」

「これからもキミみたいな人といつでも戦えると思ったたらわくわくするよ」

慧のオフセンス。智花が警戒して様子見をしているのをいいことに、慧は話し出す。

「じゃあそろそろ……」

ボールを腰溜めに構え、一気に加速した。

今まで、慧は驚かせるような技ばかりで真っ向からの勝負をして来なかった。それを俺は、慧が身体能力では智花に勝てないと思っ
ているからだと思っていた。けどそうじゃなかった。慧の身体能力は決して低いものじゃなかった。

その証拠に、そのドライブに智花は反応するのに精一杯だ。

線のスピードは智花の方が上だが、点のスピード 要するに

瞬発力は慧も負けてはいなかった。

そして慧は、智花について来られながらもゴール下までボールを持っていった。そしてフリースローラインとゴールの中間辺りまで行ったところでローターン。その勢いのまま、飛び上がり智花のブロックをすり抜けてシュートを決めた。

そしてまた、右手を上げて振り返る。

智3 - 慧3

それからは、一進一退を繰り返して、5点を上回ってしまい10分を過ぎたので引き分けとなった。

s c e n e . 5 決着（後書き）

感想お待ちしております！。

s c e n e ・ 6 邪道その弱点(前書き)

お待たせしました!!

今回は視点がコロコロ変わっています。申し訳ございません!!

それではお楽しみください。

scene・6 邪道その弱点

side・k

「はあ……はあ………智花くん。やっぱり、強いや」

「そんなこと、ないよ。私なんてまだまだ」

昴さんの試合終了の合図の後、僕と智花くんはお互いの健闘を褒め称える意味で握手を交わした。

息も絶え絶えな僕と比べて智花くんは、まだまだ余裕がありそうだった。僕が喘息のハンデを抱えているとしても、それを差し引いてもここにはやはりかなりの差があるみたいだ。

「2人ともお疲れ。……慧。大丈夫か？」

「はあ……はあ………？はい。大丈夫、ですけど」

「でも、息が苦しそう」

「おまけに呼吸の音も変だぞ？やっぱりアレか？」

ああ、そう言えば昴さんは知っていても他のみんなにはまだ言っていなかったっけ？

智花くんの言葉と、僕の異変に気付いたのかコートの外で見学していたみんなも心配そうに駆け寄ってくる。

「そうですね。……みんなには言ってなかったね。実は僕は酷い喘息持ちだね。酷い時は5分も走っていられなくなるんだ」

そう言うと、みんなは驚き大きな声を上げた。

「ええっ！？本当かけっちん！！大丈夫か！？」

「あ、あんたそんな病気抱えてトモと1対1しようなんて何考えてんの!？」

「ぶー。けい。むりしちゃだめ」

「そ、そうだよ。体のこと大事にしなきゃ……」

「ほ、本当に大丈夫!？苦しくない!？」

あ、あれ？みんなの反応が予想していたのと違うよ。もっとこう単純に驚かれたり、(ろくに練習が出来ないから)ガツカリされたりとかそう言う反応してくるかと思ったのに。まさか心配されるどころか怒られるとは思ってなかった。

「そつだよ慧」

「え？す、昴さん？」

後ろを向くと、少し怒ったような顔をした昴さんが腰に手を当てて立っている。

「そついうことは初めから言ってもらわないと。俺もそんなに酷いものとは知らなかったぞ。しかも酷い時は5分でダウンだろ？試合10分もやつちまったんだから。心配もするし、怒るのも当たり前だ。前もって言うてくれれば時間だって減らしたのに……」

「いやでも……今日は調子も良かったですし、引き際もわかりますし」

「そついう問題じゃない」

ビシッと軽く頭にチョップを落とされうぐつと呻く。でも、昴さんは構わず続ける。

「自分で調子がいいと思っても、急に悪くなったりすることだってあるだろっ？もしそれで試合中に倒れたらどうする？何も知らない

みんなはどう思う？それに、もし智花との接触の後に倒れたら智花は自分のせいだと責めるだろう」

ああ……そうか……。

「Oh sit……すみません。みんなも、ごめんなさい。そこまで頭が回らなかったよ」

思わず自分の至らなさに頭を抱えてしまう。僕は、もう一度みんなと向き合った。

「ごめん。そして心配してくれてありがとう。……こんな僕だけ、部活に入ってもいい……かな？」

少し自信がなくなってしまったので、だんだんと小さくなってしまったが。

「あつっつたりまえだつてのー！」

「そうね。ま、素直に謝ったから喘息黙ってたことは許したげるわ」

「おー。これから、けいも仲間」

「うん。これからよろしくね」

「もちろんだよ。仲間が増えて嬉しい」

……ただの杞憂だったようだ。

智花くんとの1on1が終わった後、やはりと言っかなんと言っか……質問攻めにあつた。主に真帆くんから。

内容はもちろん、僕のプレイを自分も出来るかどうかといったものだ。

「多分無理、かな」

「ええ〜！？いいじゃん教えてよ〜！！」

「ぶー。けちけちするなー」

「あはは、別にそういう意味で渋っているんじゃないからね……」

この2人はなかなかしぶとい。愛莉くんや紗季くん、智花くんは興味はあるがやってみたいとは思っていないようで、すぐに退いてくれたが、真帆くんとひなたくんはまだ食らい付いてくる。
う〜んこまったな……。

「そうだね。理由はちゃんとあるんだ」

「理由？」

「うん。まず、体がとんでもなく軟らかいのと体のバネがよくないと僕の使っている技は出来ないってこと。そうだね……ほら」

「うわっなんだ気持ちわるっ!？」

「おおー!？」

そう言っ僕が見せたのは、差し出した右手。それをもう片方の手を使わないで右手だけで指先を手首につけるといったものだ。確かに、90°以上曲がる手首は気持ち悪いね……。

「背中に回した手でシュート撃つたよね？あれは、ほとんど手首のスナップだけなんだ。このくらい曲がる軟らかさと、あと大人がやっているように片手で上からボールを持てるように出来ないが無理なんだ。だからごめんね」

「う〜んでもな〜……」

まだ諦めきれないのか、自分の手首をぐにぐに曲げている。
……さて、本当に困ったぞ。

「真帆。ひなたちゃん。慧の言うとおりこればかりは諦めた方がいい」

そこに昴さんが現れた。

「え〜！どうしてさすばるん〜！」

「そうだそうだ〜」

「ああいうプレイは、確かにカッコイイかも知れないけど犠牲も多いんだ。無理な体勢が多いから怪我につながることも多いし、シュートフォームも崩れる恐れがある」

昴さんが説得してくれるのはいいけど、これ絶対僕にも言っているよね？むしろ標的僕な気がしてならないよ。

「そうだね……悪いけど慧に実演してもらおうかな」

そんな感じに胸を痛めていたら、急に昴さんがボールを渡してきた。

「実演、ですか？」

「そう。試しに慧。その位置からジャンプシュートを撃ってみてくれないか？」

「えっと……ワンハンドですか？」

「そこはお任せするよ」

今いる位置はフリースローラインから少し下がった場所。そこから撃てというのだ。ジャンプシュートを。

ああ……あまりやりたくなかったんだけどなあ。説得のため。仕方

がない。

「はっ！！」

膝を曲げて撃ってみるが、久しぶりのジャンプシュートは違和感の塊でしかなかった。

s i d e . S

やっぱり。思ったとおりだった。

フォームはバラバラ。慧の放ったシュートはへろっとした、智花とは比べ物にならないような頼りない軌道を描いて

バックボードの2mほど上を通過した。

「あ、あれ？想像以上だ……」

慧さん。それはこっちの台詞です。

はっきり言って想像以上の酷さだった。その後も何球か打ってもら

ったがリングはおるかバックボードに1回も当たらないと言う、まさかワザとやっているのではと疑いたくなるような（ある意味）見事な結果を残してくれた。
真帆もひなたちゃんも、だんだんと羨望から諦め、最後には憐れみの視線へと変わっていた。

「けっちん元気出せ」

「おー。大丈夫。ひな、まだシュート届かない」

「うん。うん。……ありがとう」

経験者なのに初心者よりも酷い結果を残した恥ずかしさのあまりか、コートに突っ伏する慧を、2人は慰めていた。

ちよっとやりすぎたか。二人を諦めさせるためにやったことなのだが、逆に慧を傷つけてしまったらしい。でも、流石にこの酷さは放っておけないだろう。なんとか立ち直らせようと考えるが、いい案は思いつかない。相変わらず、自分の口下手さに嫌気がさす。

side . K

「けっちん元気だせ」

「おー。大丈夫。ひな、まだシュート届かない」

「うん。うん。……ありがとう」

みんな笑ったりはしなかったが、思いつきり慰められてしまった。今は逆に、その優しさが痛いよ。

恥ずかしくて、顔も上げられないくらいだ。

……やっぱり昴さんは気付いていたみたいだ。僕はあまりにああいったトリッキーな技にかまけすぎて、基礎のセットシュートが出来なくなってしまうのだ。ストリートで困ったことはないけど、公式の試合となると弊害は多いだろう。なにしろ、技の中には足を使ったりするのもあるし、それにモーションが大きい。

「そ、そう言えば……慧はシュートを決める度に振り返って片手を上げてたけどそれはどうしてなんだ!？」

コートに突っ伏していたら、昴さんが質問をしてきた。僕はなんとか顔を上げて答える。

「ええっと……ストリートの大会でダンクコンテストっていうのがあって、そのキメポーズ?みたいなものです。それ以来クセになっちゃって……」

「だ、ダンク!?もしかして出来るのか!？」

「はい。一応」

「ほんと!?ねえねえちょっとやってみせてよ!!!」

「え?ええ?」

わけのわからない間に、真帆くんは無理矢理起こされてしまった。周りのみんなも、期待の視線を送ってくる。

「……はあ。わかりました」

しょうがない。ここはいいところを見せて汚名返上といこう!!!

「ダנקコンテストでは、目的がダנקシュートを決めることだけなのでヴァイオレーション等はないんですよ。だからボールを持って歩いてても平気なんです」

ボールを持ったまま、ハーフラインに立った慧が説明を始める。

「評価はそのダנקと、そこに至るまでの過程の難易度、迫力、出来映えで決めます。……それではやってみましょう」

そして、慧は右手でドリブルをしだし。そして4、5回目くらいで3ポイントラインにたどり着くとビハインドパスの要領でシュートを打った。だが、今度はさつき智花と試合した時と違ってリングから軌道は逸れて、ふんわりとした弾道を描いている。それと同時に既に慧は走り出し、その勢いそのまま一気に飛び上がる。何故か、反時計回りに横回転しながら。バックボードに当たったボールは跳ね返り、それを右手でキャッチ。あいた左手でリングをガツチリ掴むと、回転していた体に力が加わったことで、リングを掴んだ左手を中心にぐるりと回る。そして1回転しそうになったあたりで体を持ち上げ、リングに背を向ける形でダנקシュートを決めた。

その姿は本当に……かっこよかった。

『……………』

しばし、俺を含めて全員がその姿に見とれていた。いつの間にか慧はすでにリングから手を放しており、ボールを持ってこっち側に近づいていた。惚けていた頭を何とかたたき起こし、言葉を出す。

「なんて言うか……その………すごくよかった」

「え？ほ、本当ですか！？」

「ああ！！な、なあみんな！？」

「やっぱけっこうちゃんすげー！！ありやあたしには無理だなー」

「おー。さっきとは別人」

「うんうん。思わず見惚れちゃったわ」

「本当に、かつこよかったよ」

「凄いね！！私にはあんなこと出来ないよ！！」

正直、さっきまでこれからストリートの技は禁止させようかと思っ
ていたが……決めた。慧も、慧なりに努力をしてこの力を身につけ
たのだと、今のダンクを見てわかったから。

だから俺は、慧が慧なりにバスケットを楽しむことができるようにする
為、あえてそのプレイスタイルはそのままにすることにした。

s c e n e ・ 6 邪道その弱点（後書き）

感想お待ちしております！。

s c e n e . 1 球技大会（前書き）

すみません！！ 風邪引いてました！！

これからもがんばって更新しますので、よろしくお願いします！！

scene . 1 球技大会

プロフィール

【名前】掛樋〓C〓慧（かけひ〓クロード〓けい）

【生年月日】3 / 10

【血液型】A

【身長】158cm

【クラス】6年C組

【所属係】掲示係

【趣味】料理、裁縫、バスケ

【弱点】喘息。タバコの煙でアウト。

【座右の銘】大丈夫だ。問題ない。

「へえ、球技大会か。面白そうだね」

僕が入部した次の日。真帆くんたちから2週間後に球技大会があるという話を聞かせてもらった。先日昴さんにもそのことを伝え、作戦を考えてほしいと頼んだらしい。

……………水着エプロン姿で。

危なかった！！ 本当に！！
もう少し早く入部したら、危うく心にもものすごいトラウマを抱えるところだった。

「もちろんけっちゃんはバスケに出るんだろ！？」

「そうだね。可能なら出たいな。まだ」

「大丈夫だよ。美星先生から、慧くんに出たい競技を聞いてって頼まれたから」

そうか。そういうことなら大丈夫なのだろう。

「うん。じゃあバスケットボールにエントリーしようかな。僕が美星先生に直接言えばいいのかな？」

「別に私が言いに行ってもいいよ？」

「いや、こういうのは本人が直接言ったほうがいいと思ってね。ありがとう智花くん」

「ううん。気にしないで」

「それじゃあけっちゃん！！ 今度の週末から合宿だから、ちゃんと用意しとけよ！！」

「うん。わかったよ」

合宿かあ。きつとずっとバスケットをやってられるんだろうな。

.....ん？ 合宿？

「合宿！？」

「ぎゃっ……」

「ど、どうしたのよ急に!?!」
「ちよちよちよちよと待って!! 合宿というアレかい!?
何日か泊まるってことかい!?!」
「あつたりまえじゃん!! あ、トランプは持っていくから安心して
とけよ!?!」

そこじゃない。そこじゃないんだ……最大の懸念は。

「ど、どうしたの慧くん!? 顔色がよくないよ!?!」

「まずい。もしかしたら参加はできないかもしれないんだ」

「え? どういうこと?」

「僕の家族は兄さんが2人と父さんなんだけど、3人とも、その…
…僕のことになるとすぐ口うるさくなるんだ。外泊なんて言っ
たら……許可もらえるかどうか」

それ以外にも、僕が家を空けたらみんなのご飯がとても貧相な
もの、もしくは3食すべて外食になってしまう可能性が非常に高
いや、ほぼ間違いないだろう。

「そ、そんなに慧の家族って厳しいの?」

「いや、厳しいと言うよりも心配性なだけなんだ。……時には、そ
ちのほうはややこしいこともあるよ」

「ま、まあとりあえず説得だけしてみたらどう……かな?」

「うん。がんばってみるよ」

「おー。けいがんばれー」

「　　っっていうことなんだけど………参加していいかな？」

今は夕食中。僕の家族は、どんなに遅くなろうともみんなそろってまで食えることができない。したがって遅くなる人にはかなりの重圧がかかり、必然的にみんな早く帰るようになるのだ。

夕食時を説得に選んだのは、みんなの機嫌が一番よくなる時間帯だからだ。

まあ説得は難しいだろうけど、僕は決してあきらめない。みんなと一緒に時間を過ごしたいんだ！！　何時間かかっても説得してみせる！！

「うん。かまわないよ？」

「まあそういうとは思ってたんだけど、でもやっぱりみんなとってえ？」

え？　今なんて言った？

「仲間と過ごす時間は大事だ。いっぱい練習してくるといい」「Really!？」

「ああ。ちよつと父さんは今週末に仕事の都合で遠くに出張する」となったからね」

「俺も仕事の研修が入ってな。泊りがけだ」

「俺は友達の家泊まるから大丈夫だ」

「え？　え？　そつなの？」

「ああ。だから何の心配せずに、楽しんで来い」

「嬉しい！！　I love you!　My father, and brother!!」

「はっはっは。父さんたちも愛してるよ」

早速、みんなに報告しないと！！

夕食を食べ終えた後、携帯電話を開いて教えてもらったURLに接続する。真帆くんたちに教えてもらった、交換日記だ。早速文章を入力する。

- 交換日記 (SNS) 03 - Log Date 5/18

ケイ

『やったよみんな!! 父さんも兄さんたちもすぐに許可くれた!!
! これで見んなと参加できる!!』

まほまほ

『やったなけつちん!! よしさっそくかくにんだ!! サキ、トランプちゃんといれたかつ!?!』

紗季

『え。ちょっと、合宿は金曜からだってば。準備なんて明日で良いじゃない。あ、でもトランプは用意してあるわよ。……もちろんまだ荷造りなんてこれっぽっちもしてないけれど! それより真帆! あんた荷物は自分で持てる分だけにしなさいよ。メイドさん同伴禁止。』

まほまほ

『たりめーだ！ せっかくのおたのしみなのにつるせーおごごといわれちゃたまらん！』

あいら

『ね、ねえ。やっぱり持っていてっっちゃダメ、かなあ？……水槽』

紗季

『……だからそれは諦めなさいって。魚の方も迷惑でしょ。餌なら大丈夫だってば。家族を信頼してあげな。どうしても心配なら電話すれば良いから』

あいら

『う、うん……。ごめんね。あの子たちデリケートだから、不安になっっちゃうの……』

ケイ

『確かに熱帯魚は水温とかに敏感だけど、きっと大丈夫だよ。っというよりも、ボク的にはどうやって持っていていこうとしたのか非常に気になるところだったけど……』

ひなた

『おー、大変だ。かばんが閉まらない。少しお洋服へらさないとかめかな。』

ばんつ、六枚で足りる？へらしすぎ？』

あいら

『まだまだ多すぎだよ……』。

上下二枚ずつ持てばきつと足りると思うけど……でも、汗かくだろうから少しは多めに詰めた方が良いかなあ？ みんなはどれくらい持って行くの？』

紗季

『……………ねー愛利、自慢?』

あいり

『えっ? どうして…………?』

まほまほ

『なーもっかん、けっちん。あたしらはなんまいもってく? とくに上のほう』

湊 智花

『0枚で良いんじゃない…………? どうせ……………必要ないもの…………』

ケイ

『そうだね。……………まず、持ってないし……………ね』

あいり

『あああっ! ち、ちがうの! わたし、そんなつもりじゃあ
っ!』

s c e n e . 1 球技大会（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 2 決闘と犠牲者（前書き）

今回は結構長くなってしまいました。

それではお楽しみください。

scene・2 決闘と犠牲者

- 交換日記 (SNS) 04 - Log Date 5/19

まほまほ

『ざけんなよっ！ もーサイアクだ！ なっとくできねーっ！』

紗季

『……はー。いい加減諦めなさいって。間違っちゃったものはしょうがないでしょ。いくらなんでも球技大会出場種目無し、ってわけにもいかないんだから』

まほまほ

『なしでいーだろ！ しまったこっちゃんー！』

湊 智花

『真帆、それはダメだよ……。クラスで仲間はずれって、良くない……』

ケイ

『そうだね。クラスの仲間なんだから仲良くしないと。でも……』

紗季

『あぁー……。そう言えばアンタもだったわね。ケイ』

あいら

『え？ ケイくんも竹中くんと……？』

ケイ

『いがみ合っているってわけじゃないんだ。ボクとしては仲良くしたいと思ってるんだけど……。どうやらボクが女の子だってことを黙ってたせいで気まづくなっちゃったみたいだね。あれ以来眼もあわせてもらえないんだ……。』

紗季

『確かにそうね。ケイは真帆とは違った意味でやかいそう。でも、これは時間が解決してくれるんじゃないかしら？ 気楽に考えたほうがいいわよ』

ケイ

『うん。ありがとう』

まほまほ

『あああああああもー！ せつかくたのしみになっていたのにだいなしだっ！』

ひなた

『まほ、どうしてごきげんななめ？ もう、合宿楽しみじゃない？』

まほまほ

『そーはいわねーけどさっ！ でもほんとはもっとたのしかったはずなのにっ！』

……。きめた。やっぱりとりかえす。たのしみヒヤクパーながっしゆくをちからずくでとりかえしてやるっ！』

あいら

『ま、真帆ちゃん……。あんまり危ないことしたら嫌だよ』

ケイ

『そ、そうだよ？ けがでもしたら本末転倒じゃないか』

紗季

『……無駄よ愛利、ケイ。こうなったら私たちじゃ止められないわ、このバカは』

湊 智花

『昂さん……ごめんなさい。勝手なお願いだけれど、どうか助けて下さい……』

金曜日。昨日までは、今までで一番楽しい週末になると思ってウキウキしていたのだが一転。昨日の美星先生の連絡から気まずい週末へと変わってしまった。

原因はツンツンヘアの男の子。竹中夏陽くん。

何故か彼は、真帆くんがバスケットをやり始めた辺りから、彼女への当たりが激しくなり、それに伴い真帆くんの反論も激しくなる。この悪循環が繰り返され、教室でも激しいケンカが幾度となく繰り返されていたのだ。

そして、そんな2人がこれから今日をあわせ3日間も一緒にいるというのだから一触即発どころか、もうすでに臨戦態勢となっている。

「……死ね」

「……てめえが死ね」

……………死ねなんて言葉は、気軽に使わないようにしましょう。
いや、気軽じゃなくても使わないように。

あつちでも見たことのないようなこの状況。2人は西部劇のガンマンの決闘如く、手に銃器を持って背中合わせに直立している。

「え、てか、なに、これ？」

声に振り向くと、ちょうど体育館に入ったところで昴さんが固まっ
っているのが見えた。僕、智花くん、愛利くんが、近づく。

「お、お疲れ様です。昴さん」

智花くんがぎこちない笑顔、というか苦笑で出迎える。こればかりはしかたないと思うけどね。

「……………智花、愛利、慧。……………ええと」

言葉が詰まるのも無理がないだろう。この状況。理由もわからず
に見るには刺激が強すぎる。

昴さんはそばにいる僕、智花くん、愛利くんを見た後、決闘の当
事者の真帆くん、いかにも『やりたくないけど強く頼まれて仕方な
く』といった表情で背中合わせの2人から数メートル距離を置いて
審判役となっている紗季くん、隅のほうに座りこの場にそぐわぬほ
んわかな声で『まほ、がんばれー』とちよつと場違いな歓声を上げ
ているひなたくんと視線を移す。そして、ものすごく困惑した眼で
再び僕たちに視線を戻す。

「……………ねえ、なんであの子が？……………なんで竹中が、ここに？」

さんざん溜めた末に、そう尋ねてきた。
智花くんと愛利くんが上手く説明できずに困惑し、目線を泳がせている。

「では、僕が説明しましょう」

「ぜひ頼む」

「実は昨日美星先生から連絡がありました」

だがそこで、第三者。真帆くんの声によってさえぎられた。つい
にあの修羅場が動き出す模様。

「待ったなしだ。サキが十を数えたところが合図。あとは先に振り返って、先にぶつ放して、先に一発でもぶち込んだ方が勝ち。文句ねーなっ？」

「くどい。いちいちルールなんか確認しなくて良い。さっさと始める。……で、負けた方が出て行く。それで終わりだ」

ついに始まってしまふみたいだ。できれば、どちらかが出て行くなんてことにはなつてほしくない。なにか方法はないだろうか……。

「……はあ。じゃ、行くわよ。」

1。

2。

3。

嫌々なのを隠そうともしない、眉間にしわを寄せたままの紗季くんがカウントを始める。

最早止める手立てはなく、ちらりと横にいる昴さんに視線を移してみるが、あごに手を当ててぶつぶつと言った後に、はっとなって頭を左右に振っているの僕と同じように、傍観に徹することになったのだろう。

「4。

5。

6。

」

すでに紗季くんのカウントは中盤を越え、そろそろ終わりそうなところ。彼女のカウントに合わせて徐々に徐々に近づいてくる真帆くんの顔は……………絶対に何かを企んでいるであろう。したり顔だった。

「　　ところで。なーサキ、今何時なんどきでい？」

突然、真帆くんが決闘の途中にもかかわらずに、審判である紗季くんに時間を確かめる。

「フ……………は？　何時つて、壁に時計あるじゃない。見ての通り……………」

尋ねられた紗季くんは、訝しみながらもカウントを止めて時計を見る。

「えーと、今は四時十七分　　」

その瞬間。キラリと八重歯を覗かせた真帆くんが、

「ひひ、やっぱあたし天才っ！！」

本来のカウントを待たずに、紗季くんの口にした十という言葉に振り返る。

……………とんち、なのだろうか？　これは。とりあえず、ズッコイ手だということだけは伝えておこう。

「　　え。ちょ、ちょっと！！」

「うわはははっ！！　死ね、ナツヒツ！！」

紗季くんの抗議も聞かずに真帆くんがフルオートで放ったBB弾の嵐が、夏陽くんに向かつて放たれる。それは白い白線となり、彼の体に襲い掛かると思われたが……。

「…………あれ？」

どうしたことが、白いプラスチック弾は夏陽くんを捕らえることなくコートに散らばることとなった。夏陽くんの姿は完全に真帆くんの視界からは消えてしまっていた。

「……………思ってたぜ、どーせてめえはまた下らねーこと企んでるだろうってな」

「……………っ！！」

その声の主、夏陽くんは僕たちが真帆くんのイカサマ戦法に呆然としていた間に、1人危機を察知して、スライディングかなにかで一気に距離を詰めたようだった。

「んにやるっ！！」

危機に顔を強張らせながらも、真帆くんは冷静に得物を下に向け
る。

少しタイミングが遅れてしまったが、ここで2人の武器の特徴を述べておこう。真帆くんはゴテゴテに装飾の施された、重くて小回りが利かないが連射能力と弾数に長じるアサルトライフル……のエアガン。対する夏陽くんはシンプルな、小回りの利くハンドガン……のエアガン一丁。

そんな、重量武器を持っている真帆くんが先に行動していた夏陽くん之間に合うはずもなく、彼の持つその銃口がしっかりと真帆くんを捕らえ、

「もうおせーっての。じゃーな、真帆っ!!」
「くくっ、そりゃどーだか」

すべてが終わると思われたが、それよりも一瞬早く、真帆くんのもつアサルトライフルのもう一つの銃口から、何かが吐き出された。

「グレネードっ!?!」

吐き出されたピンポン玉くらいのサイズのそれは、夏陽くんの顔面付近で炸裂する。

「ちよ、ちよつと真帆くんっ!!」

「って、そりゃいくら何でもっ!! ……え?」

いよいよ放っておけなくなり、少し走り出したところで、それが普通の戦略的殲滅武器ではない何かだと気づいた。2人を起点に四方へ飛び散ったのはBB弾や実弾ではなく………何故か黄土色の粉塵だった。

ちよつと香ばしく良いにおいを発する大量の何かの粉。

「ぐえほっ!! な、なんだこりゃっ!?!」

徐々にその範囲を広げつつある煙の中、粉まみれな憐れな格好に変貌した夏陽くんが叫ぶ。

「ぎゃははは!! もだえやがれっ!! 肺いっぱいにあたし特製の炸裂きなこ弾を吸い込んでもだえ苦しめえっ!! ……んで、消え失せろっ」

そうか、この黄色い煙の正体は黄な粉だったんだね。
……さて、みんなは2人の決闘に注目していて忘れていないか
もしれないけど、ここで1つかなり重大な事態が発生し始めている。
密閉された体育館。もちろん風なんかは吹いていない。したがっ
て、黄な粉は長々と空中を飛び回り続けて範囲を広げる。

「いーかげんにしろっ！！ この大バカっ！！」
「あだっ！！！」

紗季くんが真帆くんにむかってノート数冊を束ねて打ち下ろして
も、なお範囲を広げる。

したがって、真帆くん特製黄な粉弾を吸い込んでもだえ苦しんだ
のは……………、

「ぐっ、ごほっ！！ ごほっ！！」

肺が弱く、重度の喘息持ちな僕だった。

「ぐっ、が…………… かひゅっ、ごほっ！！ ごほっ！！」
「け、慧！？ おい大丈夫か！？」

はつきり言っつて緊急事態。

黄な粉たちは僕の気道から容赦なく肺にまで入り込み、呼吸器は
狭まり息ができなくなる。ひゅー、ひゅーと不快な音を立てた後、
自由に呼吸ができなくなるまで時間はそうは経たない。

ああ……………あれが炸裂した時点で早く体育館から避難すべきだっ
たな。

そんなことを思い、みんなの心配する声を聞きながら、僕の意識
は暗闇へと沈んでいった。

s c e n e . 2 決闘と犠牲者（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 3 喧騒の看病（前書き）

お待たせしました！！

それではお楽しみください。

scene 3 喧騒の看病

「慧っ!! しっかりしろ!!」

「大丈夫!? けっこうん!!」

「ああもう!! 波多野先生はいないし、どうすれば……」

また、迷惑をかけちゃったかな?

今、昴さんに負ぶってもらって女子部屋に運び込まれたところだ。

「み……みんな……」

「慧!? 無理してしゃべるな」

「だい、じょうぶ……だから……かばんの、中に……ポーチがある、はず。……とって、くれないかい?」

ひゅーひゅーと音を鳴らしながらも、何とか呼吸をしてそう伝える。

「ひょっとして……これ?」

愛利くんが、渡してくれた。

「あり、がとう。……えつと」

「まって慧くん。私が出すから。どれを探しているの?」

お礼を言ってそれを受け取ると、目的のものを探そうとする。けれど、智花くんが変わりに開けて探してくれた。

「白の……プラスチック製の吸引機……ごほっごほっ……あと、……半透明の、シールと……赤い錠剤……」

「えっと……これだね？」

それらは全部、喘息の発作を抑えたり出にくくするためのものだ。まず最初に、吸引機を渡してもらい、中に入っている薬を吸い込む。

「けほっ……けほけほっ……」

「だ、大丈夫!？」

「うん……少し楽に、なったよ」

次はシールだ。ちょうど気管支の上あたりになるようにそれを張る。張ったところが少しスースーして気持ち良い。

そして最後は錠剤。夏陽くんが持つてきてくれたコップを受け取り、一錠飲む。もうずいぶん発作も楽になってきていたので、ちゃんと飲むことができた。

飲んだ後、上手く体に力が入らないので布団に横たわる。昴さんが優しく毛布をかけてくれた。

「すみ、ません。……ご迷惑を、おかけして」

「何言ってるんだよ。迷惑なんかじゃない」

「は、い。……疲れたので、少し、寝……ます」

「……
だろ!?!」

「だと！？　そもそも　が　」

「う……………ん」

「あ、けっちゃん起きたか……………？」

喧騒に、目を覚ました僕の視界に入ってきたのは、険悪そうな雰
囲気はそのままだけど心配そうにこつちを伺う真帆くんと夏陽くん
の顔だった。

「2人とも……………」

「おい、まだ起きるな！！」

「そうだよけっちゃん」

上体だけでも起こそうと思ったけど、2人に押さえつけられてし
まった。

なんだか、申し訳ないと言う気持ちしかわいてこない。

「2人とも……………どうして？　練習は？」

「紗季が、あたしたちがけっちゃんに迷惑をかけたんだから……………」

「2人でしっかり看病してろって」

「そっか、ありがとう。……………その割にはずいぶん盛り上がっていた
みたいけどね」

「「うっ……………」」

笑って言った僕の皮肉に、2人は気まずそうに視線をそらした。

……………ふふ。仲が良いのか悪いのか。

「……………ごめんね。迷惑かけたね。僕のせいだ」

「ち、ちげーよ！！　そもそもコイツが黄な粉なんて使ったから……………」

……………！！！！

「テメーがケンカぶっかけてくるからいけねーんだろ！！！！」

「なに!?!」

「やるか!?!」

「ちょ、ちょっと2人ともおちつ

ごほっ!?!ごほっ!?!」

「だ、大丈夫!?!」

「しっかりしろ!?!」

「はあ、はあ……もう、大丈夫だよ」

薬を飲んだし、十分に休んだのでもう全然苦しくない。

「2人が気にすることじゃないよ。そもそも僕が避難するのが遅すぎたのが原因なんだから………ね? 僕は大丈夫だから、練習に参加して」

「いや、でも……」

そう促してみたけど、2人とも動く気配がない。

「本当に大丈夫だから」

「だって……」

「……そうだね。じゃあ、夏陽くんに残ってもらおうかな? 真帆くんは、練習に参加して」

「でも……!?!」

「大丈夫。ちょうど、夏陽くんと2人で話したいこともあったから……お願いするよ」

「………わかった」

ものすごく不満げに、渋々といった様子で真帆くんは立ち上がり扉を開ける。

と、出ていく寸前に夏陽くんを振り返った。

「ナツヒ!?! けっちゃんに変なことするなよな!?!」

「なっ！！……す、するかバカ真帆！！」

夏陽くんの返事も聞かず、真帆くんはさっさと出て行ってしまった。部屋には、僕と夏陽くんが残される。

……ごめんね、真帆くん。仲間外れみたいにしてしまった。

でも、今じゃないと……夏陽くんとじっくり話せる機会が無さそうだから。

s c e n e ・ 3 喧騒の看病（後書き）

感想お待ちしておりますー！！

s c e n e . 4 凝りの消滅（前書き）

更新ですー！！

ちょっと急展開すぎかも知れませんが、これが覚醒未遂の力です。
ごめんなさい。

そして、前回以上に短いです。

scene・4 凝りの消滅

「……………」
「……………」

き、気まずい…………。

さつきは真帆くんにああ言ったけど、いざ2人きりになってしまつと何から話せばいいのかわからなくなつてしまつ。それに、真帆くんがいなくなつたら、夏陽くんがまたそっぽを向いてしまった。まあ、すぐに俯いてしまった僕が言えたことじゃないかも知れないけどね。

でもせつかく真帆くんが気を使つてくれたんだから、がんばらないと。何時までもこうしてはいられない。

意を決して息を吸う。

「「ごめん!!…………え?」

あ、あれ?

「ど、どうして夏陽くんが謝るんだい?」

「それはこっちのセリフだ!! 慧が謝るようなことなんかねーだろ!?!」

「いや僕は、女の子だと言つたことを黙つていたことを謝ろうと…………だって、そのせいで夏陽くんにイヤな思いをさせてしまったでしょ?」

「ん、んなこと…………ねーよ」

「でも、それで気まづくなつちやつたでしょ? そのせいで話しかけてくれないのになつて…………だからごめんね」

「あゝも〜!! だから〜!!」

わしわしと頭を掻きながら、夏陽くんは立ち上がる。

「そんなのカンケーねーんだって!! 話しかけられなかったのは単に俺が悪かったんだよ!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が悪い!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が!!」

「……ぷっ」

「アツハハハハハ!!」

「ハハハハ!!」

思わず、2人で同時に笑ってしまった。

「ふふ……何か変だね。僕たち」

「そうだな。もう、どっちが悪いとかなしでいいよな」

「うん。……ふふふ」

「あっ……」

どうしたのだろう?

夏陽くんが赤くなって黙り込んでしまった。

「夏陽、くん? どうかした?」

「いいいいや!! 何でもない!! 何でもないぞ!!」 (言えね

え……笑った顔がすげえ可愛かっただなんて……)

「?……そう。ならいいけど」

……あれ？ なんだかまた気まずい雰囲気になってきた。

お、おかしいな……………もう解決したはずなのに。な、なんで夏陽くんは赤くなって俯いているの？

ひょっとして……………。

「んっ……………」

「うおわっ！！ きゅ、急に何するんだよ！！！」

「ご、ごめん……………顔が赤いから熱でもあるのかなって」

「だからっておでこをくつつけるなよ！！ ビックリするだろ！！！」

「ご、ごめん……………」

「それに……………そ、そもそも熱なんてねーし……………ああ赤くなくてもねー

……………」

「え、で、でも……………」

「……………」

「ご、ごめんなさい」

夏陽くんに半目で凄まれてしまった。

s c e n e ・ 4 凝りの消滅（後書き）

やっぱり短すぎですかね？

短いを頻繁にするか、長いの間を開けて投稿するか悩んでおります……。

s c e n e ・ 5 修羅ふたり（前書き）

おひさしぶりですー！！

ここのところ立て込んでおりまして……やっと更新できました。
今回はいつもよりもちょっとだけ長めですので、楽しんでいただければ幸いです。

それでは、お楽しみください。

s c e n e . 5 修羅ふたり

その後、練習が終わった昴さんたちが訪ねてきてくれた。
みんな僕のことを心配してくれていたみたいで、もう大丈夫だと
伝えるとほっと一息ついていた。

- G i r l s t a l k -

慧

「みんなごめんね。ご心配おかけしました。発作も治まったし、も
う大丈夫だよ」

愛莉

「そう？ よかった。倒れた時は本当にびっくりしたから」

紗季

「……うん。顔色もいいし、無理はしてないみたいね」

慧

「ははは。信用ないな……」

ひなた

「ぶー。けい、すぐむりする」

智花

「でもよかった。明日から、部活参加できる？」

慧

「うん。できるよ。回復は早いほうだから」

紗季

「そう。それならいいわ。………で？ 真帆を追い出した、ナツ
ヒとの逢瀬はどうだった？」

愛莉

「えっ!？」

智花

「まさか2人って……」

慧

「ななな何言ってるんだよ!! 夏陽くんが僕を……そ、そんなわけないじゃないか!!」

紗季

「ほほう。夏陽くん“が”、ね……」

慧

「……………」

紗季

「良かったわねトモ。強力なライバル（容疑だけだったけど）が減つて」

智花

「ふええ！？ な、なんで私なの……………」

「あー！ こら真帆っ、私のトマトっー！！」

「へへん、やらねーよっ！！」

「あ、あれ？ ここ、登れないよ？」

「おー。あいりのとかけ、変な動き。かわいい」

……………なんでこうなった？

僕たちは今、宿泊小屋にあるテレビに向かいゲームを興じていた。突然昴さんがそれらを抱え込み、夕食前にみんなでやるうと言ってきたのだ。まあところどころ、使い古された感のあるそれは、恐らく美星先生の私物なのだろうけど。

元来ゲーム好きらしい真帆くんを中心にしだいとみんな熱中し始め、最初は乗り気じゃなかった夏陽くんも、なんだかんだで真帆くんと一緒に楽しんでいる。……あれ？ この2人ってケンカの真っ最中じゃなかったかな？

それに、ゲームも2対2の対戦アクションゲーム（と、真帆くんが言っていた）。もしかしたら、これが昴さんの狙いなのかもしれない。現に、真帆くんと夏陽くんはタッグを組んで紗季くん・愛莉くんを絶妙なコンビネーションで完膚なきまでに叩きのめしているし、それを見た昴さんもちよっぴりしたり顔だ。

ちなみに僕は、みんなの遊んでいるところを見学中。理由は、ゲームをやったことがないからだ。

「いよっしやあ3連勝！！ よーし次こいやあ！！」

紗季くんと、愛莉くんが使っていたキャラクターの体力ゲージ（と言うらしい赤いバー）がゼロになり、勝利を収めた真帆くんが大きくガッツポーズ。

「わーい。あいり、交代。よし、ひなもとかげ使おうっていう」

「こーらひな。ちよっと待ちなさい。……ねートモ、ケイ。そろそろ大体のルール分かったでしょ？ やってみない？」

「えっ？」

「僕もかい？」

コントローラーに飛びつこうとしたひなたくんを制した紗季くんが、昴さんの横でにこにこことみんなを見守っていた智花くんと、すぐ近くにいた僕に言ってきた。

智花くんも僕と同じくゲームをやったことがなく、見学に回っていたのだ。

「……で、でも私、本当にやったことないしつ。きつと、足引つ張つちやうよ」

「僕も、こういうのは経験ないから……。それに見てるだけでもけっこう楽しいし」

「そんなことないよ智花ちゃん。私もへたつぴだもん」

「ケイも、見てるよりやったほうが楽しいわよ。バスケットと同じ」

「こいよもつかん！ けっちん！ きひひ、手加減はしねーけどなつ……」

「ともか、けい。とかげ使って。とかげがおすすめっていう。かわいすぎっていう」

「……早くしろよ、湊。それに、慧。バスケット以外の勝負は自信がなくて逃げるのか？」

夏陽さんにそう言われ、ついむっとしてしまふ。でも、紗季さんの言うとおりなのかもしれない。こういう時には、やってみるのも悪くないかも。

「……それに、彼に挑発されて引き下がれるような僕じゃないしね。」

智花くんも、参加する決心がついたみたいだ。

まあ見よう見まねだけど、精一杯楽しむとしようかな。できれば勝ちたいけど。

「えっ？ あ、こつち！ きゃあ！ えいつ！！」

「智花くんこつちだ！ そう！ よし挟み撃ち！！」

10分後、そこには修羅が居た。しかも2人。

目の前で繰り広げられているのは、ついさっきまでコントローラに触れたことすらないような少女2人が、戦場を掌握しきっている悪夢の如き景色。

そう。この状況を語るに一番ふさわしい言葉は悪夢としかいいようがなかった。特に、多少なりともゲームに心得のある人間にとつては。

何せその片割れは、一切のテクニクや応用的な操作知識を知らないまま、純粋な反射神経と動体視力だけで経験者の腕前をはるかに凌駕。もう片方は、見よう見まねから始まったテクニクを、持ち前の学習能力の高さで独自に応用し、経験者が何時間もかかって身に着けるような高等技術を使いつつ、相棒のサポートにまわり裏でゲームを操っていた。

小学生としては規格外のバスケットボール選手、湊智花と掛樋

Ｃ 慧は……その実ゲームの世界でも規格外だったらしいのだ。

「あれ、終わり？ やった、よくわからないけどまた勝っちゃったみたい……！！ あははっ、面白いねこれっ。次やるう次っ！！」

「そうだね。いろんな戦略立てられたりするからすごく楽しいよ！
さあ、もう一回！！」

「……………どうしてこうなった。」

今回の目的である、ゲームで真帆と竹中を仲良くしようというプランを一緒に考えたはずの智花はそれを忘れ興奮。恐らく俺の目的を察していたであろう慧も、ゲームの楽しさに目覚めたらしく、智花と手を取り合っていた。

「……………」

これで真帆・竹中ペアは8連敗。本来負けた方はメンバー交代をする約束だったが、プライドをズタズタにされて意固地になった2人はコントローラーを離そうとしなかった。むしろ、紗季や愛莉、ひなたちゃんまでもが2人の恐ろしさに戦慄しつつ、鮮やかな勝ちっぷりに見惚れていた。

これはまだいい。問題は……………。

「……………おい。なんで作戦通り挟み撃ちができねーんだ、この下手糞」

「あ？今のぜってー追い立て役のミスだろド下手糞」

敗北を重ねるにつれて2人の仲がどんどん険悪に戻ってしまっていることだ。

臨界点まで、残り数秒。

「……………」
「……………」

長い沈黙、にらみ合い。

俺はたとえ1人でも何とか状況を打開したかったが………あ、もうダメだ。

「　　こんんんのっ」

「　　野郎ッ！！」

瞬間、開幕する取っ組み合い！　いち早く危機を察した紗季と愛莉と俺が間に入って、比較的すぐに2人を引き剥がすことには成功するが、それでももう修復しかけた関係はすっかり水の泡だった。

「　　………あ、あれ？」

「　　………これは、一体？」

画面に熱中しすぎて周りが見えていなかった2人が部屋を駆け回る怒声によって我に返り、ぎゃあぎゃああと喚く2人と部屋の惨状を見て呆けた声を出した。

夜の終わりは、まだまだずっと先になりそうだった。

s c e n e ・ 5 修羅ふたり（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 6 再び……（前書き）

昨日（日曜）は更新できなくてすみません！！

書いた話を保存する前にインターネット回線を閉じるといつドジを犯してしまいました……。

それではみなさん、お楽しみください。

scene・6 再び……

「ねえよ、んなもん!！」

「嘘つけっ!! ナツヒがあたしに嫌がらせして止めてるんだろっ、ハートの5っ!！」

次に、昴さんが取り出したのはトランプだった。これならむやみにヒートアップせずに、みんなで和気藹々とできると思ってたの選択だろう。

トランプという選択肢は非常によかったのだが……やる種目を大きく間違えてしまったようだ。何気なく始めた七並べは、疑心暗鬼を生む魔性のゲームと化していた。

「くそっ、最悪だこいつ……。あたしに勝たせたくないからってアガリよりも邪魔ばっか狙ってさ!！」

「……てめえ、いい加減にしろよ。言いがかりもっ」

ああ、最初はあんなに和気藹々とした雰囲気だったのに……。現状では仲直りどころか、一触即発の冷戦状態がずっと続いている。しかし誰なのだろうか？ ハートの5が止まっているせいで、誰も出せない状態がずっと続いている。まあ確かにこの冷戦状態のなか、今更出せないというのも無理ないけど。それにしても、せめてジョーカーを持っていてる人も出せば状況も動くはず……。って、こっちも同じ理由で出し辛いのか。それでも、この空気は非常に居た堪れない。いつの間にか、僕はみんなの一挙手一動を観察し、犯人探しみたいなことをしていた。

「……え、えつと。パスです、ごめんなさい」

蚊の鳴くような声で、愛莉くんが自分の番を飛ばした。

彼女も違うみたいだ。だれだろうな、ハートの5、もしくはジョーカーを持っている人は……。

「んしょつと……ん？」

「おー。けい、どうかした？」

隣に座っていたひなたくんが声をかけてきた。

「あ、いや……なんでもないよ」

そう、別にたいしたことはない。

みんなも、こういう経験はないだろうか？ 今、僕たちは車座になって足元に座布団を引いて座っている。最初、真帆くんがトランプを一枚一枚飛ばしてに華麗(?)に配ったんだ。そしたら……ね？ 大体わかるだろう？

何気なく体制を変えようとして座布団に手をかけたときに……ね？ 触れてしまったのだよ……畳との間にあるプラスチック製の薄いカードに。

ははっ。はははははははははははは。

どうしよう。

僕に勇気が足りなくて、座布団をめくることができないので確認はできないが十中八九ハートの5、もしくはジョーカーだろう。

犯人は僕だったみたいだ。これがもしハートの5とかだったら洒落にならない……。みんな、ごめんね。疑ったりして。そして今ハートの5、もしくはジョーカーを持っている人………気持ちが悪くわかりました。

「あ、あの。昴さん、やっぱりどうかされましたか……？ 少し、顔色が……。もし体調が優れないようでしたら、お願いですから無理しないで下さいね？」

智花くんの声に顔を上げると、自分の持ち札を凝視しながら顔を真っ青にして固まっている昴さん。汗の量も普通じゃない。……いや、あれは冷や汗か。どうやら昴さん。あなたは僕と同じ道をたどっているようですね……。

「慧くん？ なんだか慧くんも顔色悪いけど大丈夫？」

「はっはははは。だいようびだ。もんでいねい」

「おー。けい、かみかみ」

やはりここは、素直に謝罪すべきだろうなあ……。そ、それに日本には罪を憎んで人を憎まずというすばらしいことわざもあるじゃないか！！ うん、わけを話せば、みんなきつと許してくれるだろう。正直に謝ろう。……次の順番がまわって来たら。

自分の優柔不断さが憎いッ！！

いやいや、そこは普通に今謝るべきだ。後に伸ばしていいわけがない。むしろ悪化するに決まっている。昴さんもカードを握り締め、覚悟を決めた男の顔になっているし……。謝るなら、ここだ。

「あーっ！ やっぱナツヒ持ってるっ！！ 今見えたハートの5っ！！」

その時、真帆くんが立ち上がって、夏陽くんを指差した。

「はあっ!?! 持ってねーよ!!! ってかなんで人の手札覗いてんだよ!?!」

濡れ衣を着せられた夏陽くんも立ち上がり、声を荒げて真帆くんを睨んだ。

「嘘だ嘘だっ! 赤いの見えた! 違っってんなら持つてるカード全部見せてみる!?!」

「馬鹿か!?! まだ途中なのになんで見せなきゃいけないんだよ!?!」

「ほらそーやってごまかすっ! やっぱり持つてるんだ!?!」

「このっ!?!」

「っ! 止める、さわんなっ!?!」

「うがー!?!」

「ぐがー!?!」

……そして、再び取っ組み合い。

みんなで必死に引き剥がした後、僕と昴さんは深い深い溜息をついた。

トランプも徒労に終わり、ますます2人の関係は悪化しているけど、お腹が空いては何もできない。とりあえずみんなで夕食を作ることになった。

「……それで、どうしてカレー？」

「多分、お泊りの定番メニューだから、じゃないかな？」

僕が何気なくつぶやいた疑問に、愛莉くんが答えてくれた。

「そういうものなんだね……ありがとう愛莉くん。教えてくれて」

「ううん。いいよ。アメリカでは、こういうことなかったの？」

「転校も多かった僕は、学校の友人だけでお泊りなんてほとんどしたことがなかったから、そういう定番メニューとかはわからないんだ。家族同士とかなら何回かしたことはあるけど、そういう時は大抵バーベキューだったからね」

「バーベキューかあ……それも楽しそうだねっ」

「ふふ、そうだね」

ひとしきり笑った後、智花くんの指揮下へと入る。何故だかはわからないが、昴さんに一任された智花くんはすごく張り切っているし、僕としても初めてみんなと作る料理……。楽しく、そしておいしく作れたらいいなと思っていた。

「そ、それじゃあ真帆と竹中君はルーを作ってもらおうかなー！」

真帆、はいカレー粉っ！ これをフライパンで煎って香りを出してね。竹中君は、この小麦粉とバターを

「……粉？」

「……粉」

材料を手渡された2人が、その手元と隣に立つ憎き宿敵を交互に見やる。

「……えっ？」

そして。

『粉！！』

その後、僕の記憶はない。夜中に目覚めた僕は、土下座する真帆くんと夏陽くん。そして2人の頭を拳骨で何度も叩く紗季くんに状況を説明してもらった。

あの瞬間、2人の手の内にあつた小麦粉とカレー粉はぶつかり合い部屋の中を隙間なく覆い、僕は再び激しく咳き込んで倒れたそう
だ。

ちなみにその後、僕以外のみんなは粉まみれになつた小屋の掃除に追われ、夕食は肉入り野菜炒めとなつたらしい。

紗季くんが作ったという野菜炒めは、すごくおいしかった。

た。

s c e n e ・ 6 再び……（後書き）

原作読んでいて思ったのですが、ジョーカーは誰が持っていたのでしょうね？

もしかして、七並べにジョーカー入れるのって地域ローカルってやつですか！？

s c e n e . 7 慧の朝餉（前書き）

はいっ。更新です。

短いですがご勘弁くださいませ……。

scene 7 慧の朝餉

「フーンフーンフーンフーンフーン……フーンフーンフーン
フーンフーン」

「何でアメリカ国歌」

振り返ると、夏陽くんが腰に手を当てて呆れるように立っていた。

「ああ、夏陽くん。おはよう」

「お、おう……」

「随分早いお目覚めだね。よく眠れた？」

「まあな……」

照れたように頬を掻く夏陽くんから目を離し、再び視線を前に向ける。

「っていつか、お前こそちゃんと寝たのかよ？ こんな朝早くから………今5時半だぞ？」

「いや、昨日はお陰様ですっと寝たままだったからね。いつもより早く目が覚めたんだ」

「ぐっ………そうかよ」

彼の気まずそうな声に思わず小さな笑いがもれる。作業を手を動かしながら、続けた。

「それもあるけど、本当はいつも起床時間はこのくらいだから気にしないで。……あ、もうそろそろ出来上がるから、食べる？」

朝食

「えっ？ ……いい、いいのか？」

いつもはハキハキとした、遠慮という言葉を知らないかのように話すのに、戸惑ったような声なんだかおかしくてまた笑ってしまった。

「ふふふ……遠慮しないで。むしろ、みんなのために作ったんだから。コンビニの菓子パンやおにぎりだけじゃお昼までもたないですよ？ ……まあ、大したものじゃないけどね」

「そ、そうか。……………んじゃあお言葉に甘えて」
「うん。じゃあ座って。すぐに用意するから」

背中を向けているから見えないけど、床を椅子が擦る音が聞こえたので座ってくれたことがわかった。その事がちよっぴり嬉しくて思わず頬が緩んでいることに、僕は気づいてなかった。

10分後、夏陽くんの目の前に今日の朝食が並んだ。白米、ジャガイモの味噌汁、ニンジンの浅漬け。あと、肉と玉ねぎの味噌炒めだ。所詮昨日の夜の余り物から作ったものだから大したものはない。まあ、なぜか味噌とか塩とかその他諸々、基本的な調味料があったのがラッキーだったかな？

「ごめんね。有り合わせだから大したもの作れなかった」

「い、いや……十分、旨いぞ」

「そう？ それならよかった。遠慮しないで食べてね」

ありがたいことに、夏陽くんは文句も言わずに黙々食べてくれた。

夏陽くんが使った食器を片付けた後、お茶を飲みながらのほほんとしていた。朝は、やっぱり慌ただしいのよりものんびりしたほうが好きだな。我が家の男性陣はみんな寝坊助だから、僕が起こさないといつも慌てて出かける準備をするはめになる。……………みんな、ちゃんと起きられてるかな？

「あれ？ 慧くん？」

心配になって、電話の一本でも入れようかなとか思っていたら、控えめな声が聞こえてきた。振り返ってみると、ドアに手をかけた状態で固まっている愛莉くん。

「おはよう愛莉くん。よく眠れた？」

「う、うん。おはよう。慧くん早いね」

「まあいつもこのくらいだからね。……………みんなはもう起きた？」

「あ、うん」

「おつはよーけつち……………つてうお！？ なんだなんだ！？」

「こ、これ……………ケイが用意したの？」

「おー。おはよー」

「うわあ……………いいにおい」

「ああ慧、おはようつて……………なんだこれ？」

愛莉くんの後ろから、みんながやってきた。

視線の先はテーブルの上。実は、夏陽くんが使った食器を片付け

て少し経った頃に、そろそろみんなが起きてくるかなと思って人数分を並べておいたんだ。それを見て、驚いているようだった。

「余計なお世話かもしれないけれど、みんなの朝食を作らせてもらいました。菓子パンやおにぎりだけじゃお腹が空くだろうし、栄養も偏りますからね。大したものがないで申し訳ないですが……」

「余計なお世話なんかじゃないよ。いやあすごく旨そうだ!! ありがとうな、慧」

「いえ。お気になさらず」

昴さんがお礼を言うとともに、頭を撫でてきた。うっん…………前から思っていたけど、昴さんって頭を撫でるのが好きなのかな？ お礼を言う時や、褒めたりする時はほとんど必ずと言っていいほど頭を撫でてくる。別に嫌な気持ちにはなりはしないんだけど……正直ちょっと子ども扱いしすぎじゃないか？ まあ、彼にとっては僕たちなんかは子供なんだろうけど。

「さあ、みんな食べて!! 体力つけて練習がんばろう!!」
『おー!!』

いただきます。と一声かけて、料理に手を出していく。ふふ、やっぱり人数が多いとにぎやかになっていいな。

「うまー!! けっちんの料理最高!!」

「おー。にんじんおいしい」

「そうかい？ お世辞でも嬉しいよ」

「そんなことないよ。本当においしい。羨ましいなあ……私、お料理へたつぴだから」

「悔しいけどホントにおいしいわ。確かケイって毎日家族の食事作ってるんだっけ？」

「うん。家の家族は全員料理できないから」
「そりやおいしくもなるわけだわ……」
「ううこの味噌汁も、漬物も……炒め物もおいしい……」
「まずいわよトモ。これは点数高いよ？」
「ううう……」

みんなの言葉が、食べて笑顔になってくれるのが純粹に嬉しい。でも、なぜか智花くんが落ち込んでいて、紗季くんがニヤニヤしているのが気になるな……。嫌いなものでも入っていたのかな？

ふと、テーブルの端に座っている昴さんに目を向けると、彼は黙々と食べていた。

「どうですか昴さん。お口に合います？」
「ああ。とつても旨いよ！！これ、昨日の残り物、だよな？」
「はい。もつたいなかったので、使わせてもらいました……だ、ダメでしたか？」
「いやいや、そんなことはないぞ！！この味噌汁なんかすごくおいしい。慧はいいお嫁さんになるな」
「お、お嫁さんだなんてそんな……僕なんて誰も貰ってくれませんよ」

また、頭を撫でられてしまった。思わぬ一言を言われてしまい、顔の温度が急激に上がってしまうのがわかる。

それに、

若干みんなの（なぜか）羨ましそうな視線が気になった。

s c e n e 7 慧の朝餉（後書き）

ちよつと、自分を卑下しがちな慧でした。

やっぱり朝食はしっかり摂らなきゃですよね！！

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 8 氷の絶対女王政（前書き）

はいつ。更新です。

楽しんでいただければ幸いです。

scene・8 氷の絶対女王政

ジャー…………カチャ、カチャ……………キユツキユツ。

みんなでワイワイと朝食を食べ終え、何度断っても引き下がらずになぜか粘り続ける智花さんと一緒に食器を片付けていた。

「ありがとう。手伝ってくれて」

「ううん。せめて私もこのくらいはやっておきたいから……………」

僕が洗った食器を、智花くんが拭いて棚へと戻していく。上のほうにある食器も使ったので、僕よりも上背が低い智花くんがそこへ食器を戻すのは少々危ないのではないかと思ったけど、近くに踏み台もあったので大丈夫だった。

「やっぱりこつという細かなところでも手際が違うね……………家事とか全部自分でやってるの?」

食器を洗っている僕の手を見ながら、智花くんがそう尋ねてきた。

「うん。みんな忙しいからね」

「えっとその……………慧くんのお母さんって……………?」

「え?」

ぎくり、と。心臓が驚掴みされた気分だった。

「あ、じ、じめんなさい!…!」

僕の動きが止まったのを見て、触れてはいけない話題に触れてしまったのだと思ったのだろつ。智花くんは申し訳なさそうな顔をして謝った。

「うっん。気にしないで」

そういつて笑ってみたものの、鏡を見なくてもわかる。上手く表情が作れていない、ぎこちない笑顔に違いなかった。

あの人の話題は……して欲しくなかったから。

「今のお前にバスケで勝つても、当たり前すぎて決着にならねーんだよ。そんなの俺が納得できない。だから、バスケでケンカ売らんなら、もっと上手くなってからにしろ」

智花くんと共に、遅れて体育館にやってくると、足元からボールを拾い上げ、真帆くんに強く投げ渡した夏陽くんがそう言っていた。反射的にボールを受け取り、そんな思いもよらない言葉を掛けられた真帆くんはしばし呆然とする。

「ただ、」

「な、なめんなっ！ あたしだって……ちょ、やめろっ！！ 離せっ！！」

すぐさま違和感を払拭するように声を荒げて臨戦態勢に入ろうとする真帆くん。それを察していた僕たちは彼女を押さえつけて、更衣室へと引つ張っていく。

「落ち着け。今は練習の時間だろ。みんなでバスケ、する時間だ」
「そうそう。みんなで……ね」

今日これからは慧心学園バスケットボール女子部ではなく、6年組としてだ。

紗季くんと僕の言葉を受けた真帆くんは暴れるのを止め、

「くそ、ナツヒめっ！ あとで覚えてろっ。あたしの実力、絶対に思い知らせてやる……」

くるりと向き直って自分の足で、更衣室に入ってしまった。それに、僕たちもついていった。

後ろでは昴さんが、ニヤニヤしながらもどこか満足げに夏陽くんをからかっていたが、なかなか良いコンビだと思って何もしないでおいた。

それから着替え終わると、8人で練習を開始した。

女子の練習メニューであるため夏陽くんには少々退屈だろうとは思ったけど、文句の1つも言わずに淡々と足並みをそろえてやってくれた。

真帆くんも、以前までのようなトゲトゲしい態度がいくらか軟化した彼の存在を居心地悪そうに意識しながらも、輪からはじき出す

ようなことはしないでいた。

「……ねーすばるん、ズルしなかった？」

「……しただろ、絶対」

「ズルなんてするわけないだろ。平等にくじで決めた結果。文句はいいっこなしだ」

モップがけ等をして体育館をきれいにした後、昼食の準備をすることになった。今回のメニューはお好み焼き。お好み焼きは僕も作ったことないし、食べたこともないので作るのがすごく楽しみだ。ちなみに、今回のメニュー提案も昴さんだそう。

そして今、くじで班決めをしたところだ。真帆さんと夏陽くんはそろって2人仲良く生地づくり担当となった。ちなみに僕は、紗季くんと一緒に食材を切る担当になった。まな板と包丁を用意して、愛莉くんたちが洗ってくれたキャベツやイカ等を小さく切っていく。

「……はあ、ホント慧の手際いいわね。羨ましいわ」

「そんなことないよ。紗季くんの手際だっていいじゃないか」

キャベツの千切りをしていたら、紗季くんから羨望の眼差しを向けられ、しみじみとつぶやかれた。そういう紗季くんだって、かな

りのスピードと正確さでイカを次々にさばいているのに……。

「私も料理にはそこそこ自身があっただけだね……………やっぱり主婦にはかなわないか」

「いや、僕は普通に独身なんだけど……………」

ところどころ、視点がズレているような気がしてならなかったが、特に気にしないことにした。

「うん。これだけあればもう十分ね。ご苦労様、慧」

「ううん。紗季くんこそ」

「じゃあ私はこれを向こうのテーブルに置いてくるから、悪いけど包丁とか片付けてもらってもいい？」

「わかった。よろしくね」

そう言っつて、切った食材を持った紗季くんが台所から離れた。少し離れた場所にあるテーブルにそれを置いてくるついでに、夏陽くんと真帆くんの方を見に行くつもりなのだろう。

何があつたかはわからないが、前からあつた夏陽くんの真帆くんに対する尖った感情が朝から影を潜めていた。いや、完全になくなつていたといつても構わないだろう。時々見せる、昴さんの満足そうな笑みを見るに彼が何かやつたのか、それともこの合宿を期に夏陽くんの心情に何か大きな影響を与えたのか……………。

いずれにせよ、もう2人は大丈夫だろう。以前紗季くんが教えてくれた、仲の良い2人にその内戻るはずだ。

また1つ、これで問題解決した気になつた僕は（別に僕がなにかやつたわけじゃないけど）頬を緩めながらまな板や包丁を洗い始めようと、スポンジに手を近づけたところで……………

「誰っ!? この山芋下ろしたのは!」

今まで聞いたことのないような、怒声が部屋中に響いてきた。

「あ、あたし、だけど……?」

続いて恐る恐るといった声色の、真帆くんの声が聞こえてきた。

「あんたねえ! こんな目の粗いおろし金ですってどーすんのよ!
! これ全然滑らかさが足りない。何のために生地に山芋混ぜると思ってるの? ダメ。もつときめ細やかにしないと全然ダメ。これもう一度すり鉢で……あーやっぱいいわ。真帆じゃどうせ上手く出来ないでしょ。私がやるから大人しく見てて。 って夏陽っ
!! あんたは何しでかそうとしてるわけっ!？」

まるでマシンガンのような凄まじい勢いでダメ出しをする声は紗季くん。急いで洗い途中だったまな板を立てかけて急いで向かう。すると、夏陽くんがボウルを抱えたままたじろいでいた。

「粉と、だし汁を……」

彼の返事を聞き、信じられないとばかりに目を見開いた後すぐにキツと細めると再び紗季くんは一喝。

「余計なことはしなくていいっ!! そのだし汁、今冷ましてるところなんだから!! そのまま入れたら熱で台無しになるでしょう!? ……だいたいあんた、今分量で入れようとしてなかった? 百年早いっ!! その配分比が記事の一番の決め手になるのに!」

……いい。もういいわ、2人とも。ううん、トモも愛莉もひ

なもケイもご苦労様、あとはみんな席について待つてなさい。他の下ごしらえは終わったし、残りは全部私が
「ちよちよちよちよとまった!！」

先程にこやかに僕のとなりで一緒に食材を切っていた彼女はどこ行つた!？」

いきなりみんなに戦力外通告をした紗季くんに待つたをかける。ゆらりと上半身をねじらせてこちらを向く紗季くんは形容しがたい形相をしていて、正直声をかけたのを一瞬後悔した。

「何……………?」

その地の底から這いずり出してきたような声は、異論は認めないと暗に言っているようで、さらに僕の勇気を削いでいく。心なしか、みんな（昴さんを除く）が同情の眼差しを送っているような気がした。

「いや、その……………りよ、料理はみんなで楽しくやるものだと思うし。……………その、そんなに目くじらを、立てなくてもいいんじゃないかな……………とか、みんなで作ればいいのでは……………とか思ったりしちゃったり……………」

うう。昔日本のヤクザ映画で見た「なめてんのかわれ」字がわからないようです：覚】「的な鋭い視線に耐えられない。思わずだんだんと声は小さくなるし、視線もそらしてしまう。それに、何故だか胃が痛くなってきたような気もする。

ふ、と紗季くんが不適に笑うと腰に手を当てて氷のような視線で見上げてくる。

「……………ケイ。あなたは好み焼き……………作ったことある?」

「きよ、今日初めて見ます」

「だったら素人は黙って見ていなさい！！ お好み焼きをナメんじやないわよ！！ お好み焼きはね、千切り3年・混ぜ8年・焼きは一生！！ 少し料理をかじったくらいじゃおいしく出来ない職人業なの。わかった!？」

「Yes, sir!!」

「おお、ネイティブな英語」

「すごすごと退散し、みんなと一緒にちやぶ台に乗せられたホットプレートの前へお行儀よく正座。座ってからも体の震えと冷や汗が収まらず、たまらず自分の体を抱く。

「だ、大丈夫？ 慧くん」

「恐る恐る、愛莉くんが心配そうに話しかけてきた。自分が怒られたわけでもないのに、怯えていたようで声は震えている。それほどすごい迫力だった。

「一瞬……死を覚悟したよ。さ、紗季くんは一体……どうしたんだい?」

「紗季ちゃんのおうちってね、お好み焼き屋さんなの。慧くんは知らないかな？ すずらん通りアーケード街にある『なが塚』っていうお店なんだけど」

「うーん……ごめん。わからないや」

「基本的に僕の家では外食はしないので、僕はスーパーやスポーツ用品店くらいしかお店は把握していない。愛莉くんの口ぶりではなかなか有名なお店みたいだ。」

「そっか。すごくおいしいから一度行ってみるといいよ? ……そ

れで紗季ちゃんはね、昔からよくお店のお手伝いをしてたみたいなの。前に、みんなで焼きそばパーティをしたことがあるんだけど……その時も紗季ちゃんが全部焼いてくれて、私たちはお野菜切ったらもう休んでいいよって言うてもらって……す、凄く楽だったよ」

父さんから聞いたことがある。日本には、鍋にかなりのこだわりを持ち、あまりにも愛しすぎるが故に一から十まですべてを仕切らないと気がすまない人種がいると。確かにその人に任せれば凄くおいしく食べることが出来るけど、もの凄い緊張感の下で食べる破目になると。その人種の名は 鍋奉行!!!

とりわけ紗季くんは、その派生形で鉄板奉行とでも言えばいいのだろうか？

「こ、これが……日本の Japanese 独裁者 dictator………か」
「え？ それってどういう意味？」
「出来れば気にしないで欲しい。聞き流して」
「う、うん」

それから慣れない正座で、頭を捻りながら紗季くんが生地を運んでくるのを待つ。

お好み焼きは大変おいしかったです。

初めて食べたから一般的な味がどの程度なのかわからないけど、みんなの顔を見る限りはかなるの腕前みたい。

でも何故か僕を含めてみんな あの夏陽くんや真帆くんまでもがびしつと背筋を伸ばして自主的に正座をして無言で黙々と食べ進んでいた。

.....父さん。あなたの言いたいことが身にしみてよくわかりました。奉行という人種の恐ろしさが。

食べ終わった後、みんなと一緒に後片付けをすることが僕は出来なかった。理由は、足がしびれてそれどころではなかったためである。

scene・8 氷の絶対女王政（後書き）

慧の母については、その内オリジナルの章で触れます。

まださわりしか出来ていないので、更新しつつ内容をねりねりしたいと思います。

s c e n e . 9 素直になるじよ (前書き)

はいっ。更新です。

今回も昨日と同じくらい量の量です。

それではお楽しみください。

scene・9 素直になるじよ

- 交換日記 (SNS) 05 - Log Date 5/21

まほまほ

『みつけたっ！ これならいける！ こんどこそいけるっ！！ ア
イリーンたちはどうだった？』

あいら

『う、うん。一応、言われたものは全部買ったけど』

ひなた

『チヨコモ、買ったけど』

ケイ

『ついでにジュースも』

まほまほ

『よっしゃでかした！ チヨコモジュースもでかした！ そいじゃ
ごぶんごにしゅーごー！』

紗季

『コンビ二組が5分で戻れるかバカ。ったく、1人で張り切っちゃ
つてもー』

湊 智花

『こっちの掃除も終わったよ！ うふふ、もう小石1つ落ちてない
から安心して！』

紗季

『あー。ずいぶん黙々とやってるなって思ったらそばにもう1人いたか、やる気満々……。』

ふふ、しょーがないな、もう』

午後からの練習は、男バスがコートを使うということなのでお休みになった。なので真帆くんが昴さんから許可を貰い、みんなで外へ遊びに出かける。でも、最初からみんなわかっていて。遊びと言っても、何をするかくらい……。』

「アイリーン、もうちょい右っ!」

「こ、こっち?」

「行きすぎっ!」

愛莉くんに肩車された真帆くんが大まじめに指示を出している。

今、僕たちは学校から少し歩いたところにある広い公園の中。そこで、底に穴の開いたポリバケツをロープを使って大きな木の幹に縛り付けて即席のバスケットゴールを作ることにしたのだ。発案は、なんと真帆くん。

今は自由時間だと昴さんから伝えられている。だから本来、遊んでいても何も言われないはずなのだ。それでも、真帆くんの意見に興奮気味に笑う智花くん。呆れ気味に苦笑する紗季くん。控えめに笑う愛莉くん。いつも通りの笑顔のひなたくんは驚きはしたもののすぐに賛同した。もちろん僕もだ。

近づいたら危ないとのこと、少し距離を置いて真帆くと愛莉くんの作業をみんなとみているが、悪戦苦闘する2人がすごく微笑ましくてつい頬が緩んでしまう。ふと、紗季くと目が合ってお互いに苦笑。2人の危なっかしい作業を見ながらも、真帆くんからあらかじめ手伝いは不要だと言われているので手は出せないから。

四苦八苦している2人を眺めていたら、僕のすぐ横をずんずんと2つの人影が通り過ぎていった。

「無理だよ、そんなんじゃ」

そして大樹の前でぶつきらばうな声を出す。

「……………夏陽？」

「おー。おにーちゃんと、竹中だ」

みんなの注目をいっぺんに集めたのは夏陽くと、彼に腕をつかまれた昴さんだった。

「……………っ！ 何しに来たんだよっ！？ 今、忙しいんだから邪魔すんなー！！」

だけでも真帆くんだけは一瞥しただけですぐに向き直り、再びポリバケツをくくりつける作業に没頭したかのように見せる。

「おい」

そんなささいな強がりを見目に、夏陽くんは後ろ指で木のほうを指差して昴さんをあげて促す。

「…………ふ、あいよ」

苦笑いを浮かべながら、愛莉くんの傍まで身を寄せた昴さん。

そして腰を屈め、夏陽くんを肩に乗せて、真帆くんの隣へと並び立てた。

「な、何のつもりさっ！！」

驚きつつ、真帆くんが声を荒げて夏陽くんに抗議する。

「真帆、お前はバケツ押さえてろ。…………ロープ、俺が結ぶから」

「…………竹中、君」

隣の愛莉くんが嬉しそうな声を上げる。僕たちに背を向けているから表情は見えない夏陽くんだけど、もう彼の声に棘はなかった。紗季くんと再び顔を見合わせ、また苦笑。…………いや、微笑みあった。

「…………よ、よけーなお世話っ！！ だいたい今さら何だよっ！

！ そんなことしたって、ゆるしてやらないもんっ！！ ……あ、謝れっ！ 手伝いたいんなら、まず謝ってからにしろっ！！」

「悪かった」

「謝っちゃうのかよ！？」

「シカトして……………悪かった。ちょっと、勘違いしてた、お前のこと」

……深く、頭を下げた。

「~~~~っ！ ……お、おいやめるよっ。なんかカユイだろ。わ、わかりやーいいんだわかりやーっ！ ……だ、だからナツヒっ、とっくと頭上げる！ ……らしくねーからっ！」

真帆くんはたちまち顔を真っ赤に染めて、正視できずにあわてて頭を振る。

でも、それ以上は拒絶しない。

「……ロープ、貸せよ」

言われるままに頭を上げ、しっかりと真帆くんに向き合った夏陽くんが、ぎこちなく促す。言葉に窮した真帆くんは口を閉ざし、視線をそらしたままロープを乱暴に押し付けた。

「ふっふ」

掛け声と共に夏陽くんが昴さんの肩から飛び降り、

「……出来たぞ。じゃーな」

大樹にがつちりとくくりつけられたポリバケツに背を向けたまま、まっすぐ公園を後にしようとする。

それをみた紗季くんが、肘で真帆くんの肩をつついた。

「（……ほら、真帆）」

「（うえ、やだよっ！ なんであたしばっか！）」

「（いやいや、ここはやっぱ真帆くんじゃなきゃ……）」

「おー。たけなか、行っちゃうよ？ ねーたけな」

「（ひなちゃんっ、だめっ。今は真帆ちゃんじゃないと）」

「（おー。どうして?）」

「（あはは、ひなただと、上手く行き過ぎちゃうから、かなあ……?）」

「（あーほら真帆、早く行きなさいっ！ 夏陽帰っちゃうー!）」

「（ ） ったいな！ 叩くなよ！ あーもうっ！ わかったよ、行きゃいいんだろっ!—!）」

合わせたわけでもないのに、みんなで真帆くんを代表としてはじき出した。

「ナ、ナツヒっ!! 待てよっ!—!」

そして走り出し、2つの結び目をなびかせて、とぼとぼと歩く意地っ張りな少年を留めに向かった。

「……………なんだよ？ まだ、何か用かよ?」

ブランコの前。呼びかけられた夏陽くんはそっけなく振り返ると、後ろ髪を搔きながらぶつきらばうに返事をする。

「い、一緒にやってこーぜっ、バスケー！！ ゴール作るの手伝ってくれたお礼に、交せてやるからさー！！」

「……………別に、そんなつもりで手伝ったんじゃないし」
「んなつ！ なんだよこつちが誘ってやってるのにつー！！」

この期に及んでまだ意地の張り合いをする2人の会話は、たまたまなくもどかしくも……………どこか微笑ましかった。

「よーし、じゃあ今日は俺も、一緒に試合しようかな。さあ、みんなで一緒にこの前みたいに2人組みになって、チーム決めしよう」

進まない状況のなか、僕たちに目配せをした昴さんが大声で宣言した。ほんの少し、気持ちばかりのサポートのつもりだろう。

「は、はいっ！！ じゃ、じゃあ昴さん。ぐーぱーお願いしますっ」

「ああ。いいぞ」

「じゃあ紗季くん。僕と」

「ええ。オツケー」

「じゃあひなちゃんは、わたしと！」

「おー。いいよ」

すぐに昴さんの意図を察して、すんなりと組み決めを開始した。

「……………余ったな、お前」

「う、うるせーっ……！！」

ニヤニヤとした笑みと、歯をむく怒り顔が交差する。お互い言うべき台詞がわかってはいるはずなのに……。なかなか言い出せず、まじまじと目をそらし合う。

「……仕方ねえな。1人、足りないみたいだし。ほら」

そう言って、夏陽くんがぶっきらぼうに拳を突き出した。

「初めから、そうしろっ……。！」

そこに真帆くんも手を伸ばす。何の合図もなしに、同時に2人は組決めじゃんけんを始めた。

「おっしゃー!! まずはおたしの華麗なシュートで……。お？」

手作りゴールと、不恰好なラインの中で開始された4on4。いつもの斜め45度ポジションから、真帆くんがポリバケツに照準を合わせてボールを掲げたところへ、それを阻む形で、さっと目の前に夏陽くんが立ちはだかった。

「相変わらず、そのこのシュートだけか? ……来い、抜いてみるよ

真帆

不適な笑みで挑発を向けられ、一瞬だけ面食らったようなそぶりを見せた真帆くんだけ、すぐに口元を歪め、八重歯を覗かせて吼える。

「ひひっ。よーやく、認める気になりやがったな、あたしの実力をっ……！」

「……別に。教えておいてやるだけだ。真帆がまだまだ全然、バスケットの足元にも及ばないってことをな。ちよつとオトナゲねー気もするけど、お前がこれからもバスケット続けるってんなら仕方ねえ。これでもかかってほど、やっつけてやる。何度も、何度もな。……お前が俺に歯向かうかぎり、何度でも」

「ばーか、いつてろっ……！」

満面の笑みで抜きにかかる真帆くんだったけど……。

「……………あれ？」

「……………うわ。お前、ドリブルは本気でダメダメだな。あー、悪い悪い。やっぱまだ、まともに相手するのは早すぎたわ」

あっけなくボールは奪われて夏陽くんの腕の中へ。

「ち……………ちつくしょー！ ももも、もう1回っ！！ もう1回あたしのドリブルからっ……！」

「こーらっ、わがまま言うなっ。今度は私らの攻撃でしょ」

「こねる真帆くんを紗季くんは叱るが、言葉とは裏腹に穏やかな笑みを浮かべている。

「ふふつ、大丈夫だよ真帆っ、すぐに仇は取ってあげるからっ!!」
「……おいおいあんまナメんなよ湊っ!! 今度こそ負けねえ!
完璧に抜いてやる!!」

「たけなかー。パスー」

「え。……おう」

「ちょ、バカっ! 何やってんの!! ひなは敵でしようが!!」

「あ! し、しまった!!」

「えへへ。竹中君、ひなちゃんと同じチームがよかったよね。ごめんね」

「ばっ……ぜ、ぜんぜんそんなことねーよっ!!」

「さあ、攻守交替。行くよ智花くんっ!!」

「うん!!」

「って、ちよっ!! それ反則じゃねっ!?!」

「はっはっは。いやだなあ。グレーゾーンだよ」

みんなの歓声が、木々で囲まれた公園に響き渡った。

この時になってようやく、合宿開始から初めて僕たち8人全員が心の底から笑いあった瞬間だ。

みんなで大騒ぎして、笑い合って、ルールやチームなんかもそのうちなくなっって、ストリートよりもめちゃくちゃな、でも何よりも楽しい。ただただ本当に楽しいだけのバスケットを、ボールが見えなくなるまで堪能した。

練習とは程遠い、楽しむだけのバスケットだったけど、そんな楽しい時間が僕たちの成長を促しているようで……僕たちは、どんどん強くなれるような気がした。

そして完全にボールが見えなくなっって、へとへとになっって小屋に戻ると、

ちやぶ台の上にケーキと大量のデリバリーピザが乗っかっていた。

s c e n e ・ 9 素直になるじよ (後書き)

やっと仲直りできました。

次回は……もう少し慧と夏陽を絡ませようかな……………。

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 1 0 自主練シューター（前書き）

はいっ。更新です。

タイトルは適当です。決して、決して！！！！　キャラソンなんか
じゃないんだからねっ！！（何

scene・10 自主練シューター

- 交換日記 (SNS) 06 - Log Date 5/21

紗季

『いた？』

あいら

『うっん……。こっちは』

湊 智花

『建物には入れないし、もう中等部側は探すところ無いかも……。もしかしたら学園の外か、初等部の方かな。でも初等部の方に行くには……』

紗季

『初等部の方かな……。あの子、そっち系は全然平気だし』

まほまほ

『い、いっかいぜんいんしゅーごーしよーぜっ！……』

紗季

『そっするか。そっち系でんでだめな真帆がおもらしたら大変だし』

まほまほ

『しねーよするかばっ！……』

紗季

『……わかったわかった。とにかく、うん。一度小屋に戻ろう。長谷川さんも帰ってるかもしれないし』

あいら

『どこいったちゃったんだろっ、ひなちゃん』

紗季

『それと、慧から連絡は？』

湊 智花

『うっん。まだ返事返ってきてない』

まほまほ

『へやにはいったら“れんしゅうしてくる”っておきてがみだけだもんなー』

あいら

『も、もしかしたら、慧くんの近くにいるかもよ？ ひなちゃん』

紗季

『そっね……まあいずれにしても、一旦小屋に戻りましょっ？』

「けーい。なにやってんだ？」

「……！！……ああ、美星先生。驚かさないでくださいよ」

体育館が開いていなかったの、近くで地面が平らな、そしてボールを使っても迷惑にならなそうな場所を探してさまよっていたら、後ろから声をかけられた。驚き振り返ると、そこには腕を組んで微笑みかけてくる僕たちの担任。美星先生がいた。

苦笑して返事を返すと、いつものように真帆くんとかわらないような笑み。

「にやはは。悪い悪い。それで？ 何してんだ、こんな遅くに」

「……昨日は色々あって練習にほとんど参加出来ませんでしたからね。少しでも、自主練しておきたくて。それで、よさそうな場所を探していたところです」

そう返すと、口元を押さえて何かを企むような怪しい笑みを、先生は浮かべた。

でも正直先生の容姿でのその笑みは、いたずらを考える子供みただった。

「にゅっふっふー。じゃん！！ これなーんだ」

「……………鍵、ですか？」

「えー、慧反応うっすー……………」

取り出したのは、一般の家等では使わないような長くてゴツイ鍵。とりあえず先生の質問に答えただけなのに、興奮めしたようにがっくり肩を落とす先生にあわててしまふ。

「え、あつ別にそういつつもりじゃ……ん？　これってまさか……」

とりあえず先生を慰めようと近づいた時、今まで夜の闇で見え辛かったその鍵の細部までよく見えるようになる。鍵についてのストリップや、柄の形に見覚えがある。いや、これはいつも扱っているものだったと思う。

僕の記憶が正しければ……。

「もしかして体育館の鍵ですか!？」

「ピンポンピンポン!!　　ホレ」

「うわっ!!」

鍵の正体に気づき呆けていると、先生が鍵を放り投げてきた。

手に持ったボールを落とさないように片手でそれをキャッチする。意外と重いそれは、手に当たると同時にジーンと鈍い痺れを僕の右掌に与えた。

「つかってもいいんですか？」

「ああ。思う存分体を動かせ。ただし時間外だから内密にな」

「ありがとうございます!!」

お礼を言うと、二の句も告げずに走り出す。

そんな僕の背中を見ながら、苦笑する美星先生を置いて。

「ふう……………広いなあ……………」

電気をつけた夜の体育館に、思わず溜息が出る。こんなに広い場所を独り占め……………思わぬ贅沢に思わず頬が緩む。

堪能するように、1つ、2つとドリブルをついてみると、いつもと同じはずなのにそれ以上に大きく聞こえる破裂音。無人の体育館に反響し、しつこく存在を主張し続ける。

いつまでもドリブルをしているわけにもいかないのです、早速練習を開始する。

ドリブルでゴールまで近づき、適当なところでストップしてそのまま後ろへ飛んでフェイダウェイシュートを放つ。僕の異常に曲がる手首によって実現した、異常な回転のバックスピんがかかったシュートは僕から見てリングの奥、その内側にあたると跳ね返ることなく、ボールの回転にしたがって地面に落ちる。

そこまでの一連の動作は、同年代の人と比べてとても滑らかで早いものだ。自惚れかも知れないけど、僕は思っている。

「よし、快調だ」

そしてそれを拾うときフェイダウェイを撃った場所に戻り、今度はゆっくりとセットからのジャンプシュートを放つ。

先程のフェイダウェイとは違い、1つ1つの動作を意識したセットシュートは堅苦しくてやりにくいものだ。したがって、フォームはバラバラ。さっきのように思うようなスピンもかからず、ボールは軌道を大きくずらして右へとずらしてコートに落ちた。智花くんが得意とするセットからのジャンプシュート。そして、誰もが必ず練習するシュートでもある。

しかし今まで、ストリートで自由気ままにやってきた僕にはもう撃てなくなったシュートである。だから僕は、非常に悩んだ。

ここ最近の練習で、わかったことがある。それは、僕がいままでストリートで築いてきた技の大半が、1対1ならともかく3対3などのチーム対決になると使い勝手の悪い代物だと言うことだ。

智花くんや真帆くん、紗季くんのシュートと違って動作がダイナミックで大振りな分だけ、人数が多い密集した場所では使えないからだ。

そこから導き出した、これからの自主練の課題は2つ。『パスでもシュートでもドリブルでもいいから、チーム戦で有効な技の開発』と『セットシュートの習得』だ。

セットシュートの習得は、これから時間をかけて地道にやっついてくしかないだろうが、実は1つ目の課題はもうすでにいくつか案を出していた。そして、さっき撃ったシュートでそれは使えるということもわかった。

これで骨組みは完成。あとは、それを形にしていだけだった。

とりあえず新しい技の開発はできそうなので、もう1つの課題であるセットシュートの練習に切り替える。

「まずは……ゴール下からかな」

先日インターネットで調べて効果的な練習方法を思い出しながら、練習内容を頭の中に描いていく。

ゴールに近づくと、1.5歩くらい離れたところで立ち止まる。角度は斜め45度。書いてあったアドバイスどおりに肩の余分な力を抜き、1つ息を吐いて落ち着いてから足に力を入れて跳躍し、頂点に達したところでボールから手を離す。思い描くのは、練習の度に見ている理想的なフォームの智花くん。

放たれたボールは強烈なバックスピンのかかりながらバックボードに当たり、キュツと甲高い音を鳴らした後、

「……………」

ボールが進む力がバックスピンの回転に負けて、バックボードを起点にきれいなVの字を描き見当違いな方向へと落ちていった。…

……………ふむ。

「問題はこの手首か……………」

無茶苦茶なシュートでも軌道を安定させるために習得した、異常なほどボールにスピンをかける手首。自分の意思とは無関係に、スピンをかけるのはもう癖になってしまったようだ。でも……………。

「うん。新しい技、思いついた」

やりたいものは上手いかず、余計なものばかり増えていった。いや、本当はこっちも目標の1つだけど、なんと言うか……………片方だけいやに達成スピードが速すぎないかな？

やれやれと溜息をつくと、再び練習を開始しようと腕を上げる。するとそこへ……………。

ガララッ

「あれ？ やっぱ鍵開いてるな。誰かいるのか？」
「おー。ラッキー？」

扉を開ける音が響き、振り返るとボールを片手に持った夏陽くと、手ぶらのひなたくんがそこにいた。

「おー、けい」

「やあ、ひなたくん。夏陽くん。君たちも練習かい？」

「ま、まーな」

いち早く僕に気づいたひなたくんが、いつもの笑顔で手を上げて挨拶してきた。僕も、ボールを片手に左手を上げて軽く挨拶を返す。夏陽くんは、気まずそうに視線をそらしながらも後ろ髪を掻いて返事を返してくれた。

「っていつか慧。ここ、お前が開けたのか？」

「ここ、とは体育館のことだろう。まあ、真相は違っけど……」。

「まあ、そうなるね」

嘘は言ってない。実際開けたの僕だし。

「けい。ここで練習、してもいい？」

「うん。僕も1人で寂しかったところだからね。じゃあ一緒に練習しようか」

「わーい。ひな、がんばる」

無邪気に諸手を上げて喜ぶひなたくん。その姿に思わず頬が緩み、思わず頭を撫でてしまった。

その後ろで、夏陽くんが複雑そうな表情をしているのに、僕は気づいていなかった。

scene・10 自主練シューター（後書き）

夏陽の浮かべた複雑な表情は2人だけの時間じゃ無くなった無念さか、それとも別の何かか……。

感想お待ちしております。

scene・11 頑張る気持ち(前書き)

はいっ。更新です。

すぐ終わるかなーとか思っていたのですが、書いていたら予定よりも長くなってしまいました。

いつもよりもちょっとぴり長めですが、楽しんでいただければと思います。

scene・11 頑張る気持ち

「夏陽くんも、自主練しに来たの？」

ひなたくんの後ろで佇んでいた夏陽くんは声をかける。彼は声をかけられるとは思っていなかったのか、びくつと大きさに反応した。なんだか最近、夏陽くんのこういう反応が多い気がするが気にしないでおう。

「え、あ、いや……俺は……」

「たけなかは、ひなのコーチ」

「ん？ コーチ？」

答えてくれたのは、すぐ近くににいるひなたくん。

「おー。ひな、シュート入れられるようになりたい。だから頼んだ」

「へえ〜。それはいいことだね！ 夏陽くんも結構シュート上手だから、きつと入るようになるよ」

「おー。だからたけなか。よろしくお願いします」

ひなたくんがぺこりとお辞儀する。

「……お、おおー！ 任せろー！ でも、手加減はしないからな！」

頭を下げられたのがわかった夏陽くんは、ワントンポ遅れてどんと胸を張る。そのどこかえらそうな態度に、思わず笑みがこぼれた。

「で、慧は何をやってたんだ？ お前も自主練？」

「まあそんなところ。ついでに新しい技の開発かな」

「……………お前まだ増やせるのかよ」

「あははは……………」

僕が笑ったのに気づいた夏陽くんは、むっと顔をしかめながらも話しかけてきた。別に今の課題を話すことも無いかなと思って（決してセットシュートが出来ないのが恥ずかしいわけではない）あいまいに答える。

「だけど、技の開発について言ったら驚いたような呆れたような顔をされてしまったので、苦笑した。」

「1on1とチームプレイだと勝手が違ってね。だから今は、チームプレイで使えそうな技をパスやドリブルを中心に考案してるんだ」

「へえ……………」

「ほ……………」

続いてそう話すと、感心したような声を上げる2人。

でもその顔が、何か失礼なことを考えていることを物語っている気がしてならない。

「……………」意外とコイツも、考えてやってるんだな。ただただ考えなしに技を開発してるだけじゃないんだな。』とでも言いたげな顔だね?」

「そ、そんなことはないぞ!?!」

「おー。気のせい気のせい」

「本当かなー? ひなたくんはともかく、夏陽くんはものすごく怪しいけど……………」

「まあ疑っていてもしょうがないし、」

「ふーん。まあそういうことしておくよ」

「ほっ……」

「そんなことより、ちょっとお願いっていつか提案があるんだ」

やれることをやることにしよう。

「提案？　なんだ？」

急に話を変えたけど、気にした様子も無く返してくる。

「うん。夏陽くんはひなたくんにシュートを教えるんでしょう？」

僕もそれに協力するから、僕の練習にも2人に協力して欲しいんだ」

「協力？」

「そ、協力。せっかく人数もいるんだし、これを利用しない手はないと思つて。あ、もちろんひなたくんの練習もしっかり協力させてもらおう？」

「おー。でもけい、ふつーのシュートへたくそ」

………　もうちょっとオブラートに包んだ言い方しようよ。

胸がえぐられたように痛むんです。

「確かに、お前練習で見てたけどセットシュートめっちゃくちゃじゃねーか。……フェイダウェイとかはまあまあだったけど」

更に追い討ち。後半はほめてくれたみたいだけど、僕の耳には入ってこなかった。

がっくりと肩を落とし落胆するが、何故だが『ふふふふ……』と自虐的な笑みがこぼれてきた。ひなたくんと夏陽くんは戦慄が走ったような顔をしているみたいだ。

「世の中にはね、2種類の人間がいる」

「は？」

「1つは考えなくても体が勝手に動く人。もう1つは、理論がわかっても体が動かない人」

「……………な、何が言いたいんだ？」

「要するにだね」

混乱したような夏陽くと、聞いているのか聞いていないのかわからないひなたくん。

夏陽くんが急かしてくるが僕はあえてゆっくりとした口調で続ける。

「僕は、後者だということだよ。だから」

バツと顔を上げて、ひなたくと向き合う。

「だから、ひなたくんには口でわかりやすく教えてあげよう」

「おー。よろしくお願いします」

僕が出来る限り最高の笑顔をひなたくんに向けた。ひなたくんも理解してくれたのかどうかはわからないが異論はないようで、僕にも師事を仰ごうとお辞儀をしてきた。

「……………ちょっと待て。それって俺が考えなしのバカって言いたいのか!?!」

「え? ………………ああああ!! ごごご、ごめんよ夏陽くん!!
そういう意味で言ったわけじゃないんだ!!」

夏陽くんの言葉に、失言があったことに気づいた。さっきの言い回しでは夏陽くんを遠まわしに、『上手く説明できない、体が先に

動くバカだ』と言っているようなものだということにだ。

僕自身では、そんな風には一切思っていないかったのだが……。

「ただ、僕の体がセットシュートに対して拒否反応を起こしているようなものだから、どういう風にシュートを打てば入りやすくなるかは理解してるけど、セットシュートになるとそれができなくなるってことを説明したかったわけであって決して君のことを考えなしの人間だと思ってるわけじゃ……」

「わ、わかったわかった！！俺も過剰に反応しすぎただけだから気にしないでいいって！！」

畳み掛けるようにいうはめになってしまったが、僕のあわてた様子にさっきの言い方が故意ではないことをわかってくれたようだった。

「そ、それじゃあ始めるとするか……」

「おー」

「うん。よろしくね」

そうして、まずはひなたくんのシュート練習から始まることになった。

「いや、だから手だけで打ってもひなたの場合届きづらいんだって。もっところ、膝を使ってさ……」

「ぶー。たけなかの話は難しい。なんでシュートで膝なの？ 手でするんじゃないの？」

「……もちろん膝で投げるんじゃないけどさ。なんつーか、イメージで。もっところ、グツと踏ん張って……あーどう言えばいいんだろ」

「膝を使うっていうのはね、高くジャンプするってことだよ。膝を曲げて腰を落として、上に跳びながらシュートを打つ。……そう、ちょうどカエルかカンガルーみたいな感じかな」

「おー。カエルみたいに跳ぶ。……ぐっ。おー、届いた。たけなかのぐつと、けいのカエルでやったらいっぱいなんだ」

「そう、そんな感じだ！！ 今のを忘れずにもう一回」

外から見ればなかなか滑稽な状況だろう。

ただたどしく要領の得ない言葉で何とか自分のイメージを伝えようとすると少年と、彼の言葉どおりにボールを放ち、それがリングに届かずネットにかすっただけでも喜ぶ少女。そして、時々口を挟みながら極力手を出さずに見守っている僕。

最初は色々口出しするつもりでいたが、2人の一生懸命な姿に思わず躊躇ってしまい、それ以来夏陽くんの言葉を補足する程度しか口を挟めなくなってしまった。

ボールをリングに届かせることが出来ないひなたくん。お世辞にも上手とはいえない指導をしている夏陽くん。そんな2人を見ても焦れたりイライラしたりしないのは、その姿から伝わる集中力の度合いと真剣さからだった。

そう思っているのはここにいる僕だけではなく、さっきから姿を隠そうともしないで覗き行為に没頭する昴さんたちも同じだと思う。さっきちらつと携帯電話を見たときにメールが智花くんから入っ

ていた。内容はひなたくんがいなくなってしまったから一緒に探して欲しいというもの。どうやら、探していたらこの場面に遭遇したみたいだ。

全集中力をリングとボールに注いでいる夏陽くとひなたくんは気づかない。そんな2人を邪魔しないように静かに見守るみんな。その優しさに、胸にじんわりと暖かいものが広がった。

「……おー？　なんか、ぷるぷるしてきた」

もう何本目になるかわからないシュートを放った後、ひなたくんが不思議そうに自分の二の腕をさする。まだ筋力が弱いので、ここに来て結構な数のシュートを打っているのでかなりの疲労が蓄積されているのだろう。それでなくても、その前にみんなでボール遊びをした後なのだから。

明日は筋肉痛が相当辛いものになるかもしれない。後でマッサージしてあげよう。

「少し、休もう」

僕が言おうとして口を開きかけたが、夏陽くんが笑いながらその場に座り込み、ひなたくんを促した。

「おー。休憩」

ぼすんと、ひなたくんもあひす座り。

「……なんか汗拭くもの、持ってるか？　そのままだと、風邪ひくぞ？」

至近距離で対峙するひなたくんから何故か顔を赤らめて目を逸ら

しつつ、気遣いを重ねた。……真帆くんと扱いが凄く違うね。

「おー。ハンカチ、持ってきたはず。……あれね？」

「どうした？」

「ハンカチ、無くなった。落としたかも」

「……あーあ。もったいないな」

「おー。もったいない事した」

目当てのものが見つからず、まさぐっていた体育着のポケットから手を出して、ひなたくんは肩をすばめた。

「お気に入りだったのになー。むねん」

ぺたんと内股のまま、体育館の天井を仰ぐ。

「……あ、明日っ。探してやるよ。……一緒にっ」

「おー。ほんと？ わーい」

「僕も一緒に探してあげるよ」

「おー。ありがとう」

「……………」

「ん？ どうかしたかい？」

小屋からここまで来るのに結構距離があつたはず、2人で探すのにはなかなか広いだろっからよかれと思って声をかけたのだが、夏陽くんからなんととも言えない微妙な表情を向けられた。

まあ、それを気にすることなく、僕はコートの端に置いといた荷物のところまでより、目当てのものを拾って2人に近づく。

「はい。タオルと飲み物。ひなたくんは僕の使いかけ飲みかけで悪いけど我慢してね」

「おー。ありがとー」

「……………さ、サンキユ」

にっこり笑顔のひなたくと、顔を赤らめて目を逸らした夏陽くんがそれを受け取る。それを確認すると、ひなたくんをはさんだ夏陽くんとは反対側に座った。

「おー。ぶるぶる直った。よし、もう一回」

ひなたくに渡したスポーツドリンクを2人で飲みながら、1人でも出来るマッサージ方法を教えた後、健気な宣言と共にひなたくんが立ち上がった。

「……………なーひなた。どうしてそんな、頑張るんだ？」

次いで腰を上げながら、夏陽くんは心底不思議そうに彼女のやる気に満ちた顔を覗き込んだ。

すると、疑問を投げかけられたひなたくんは「今までそんなこと考えたこと無かった」とでも言いたげな思案顔で首を捻り、むー………としばらく唸ったあと、

「いっしょがいいから」

ぱつと顔を上げ、自分の気持ちを表現するのにぴったりな言葉が見つかってよかったとばかりに、微笑んで答える。

「いつしょ？」

「おー。ひなだけへたくそだと、みんないつしょに楽しくなれない。だから、頑張らないと」

「ひなたくん……………」

そんなことない。へたくそでも、みんな一緒ならそれだけで楽しいから。……………なんて無粋な言葉は口に出せない。それほどに、ひなたくんの優しい微笑みからは、強い意志のようなものがあふれていた。

「……………そつか。みんないつしょに、か」

「おー。だから、よろしく」

そう言って、再びゴールと対峙する2人。

夏陽くんのアドバイスの下に小さい体を何度も弾ませて放つそのシュートは、リングにやっと届くかどうかという実におぼつかないものであった。

でもそれは、僕がどんなに技を磨いても出せないような美しいものだった。

黙って覗いていた昴さんたちも満足したのか、来た時と同様黙ってその場を後にしていた。

「……………そう言えば、シュートが上手になりたいなら、それこそ
コーチである昴さんにも頼めばよかったんじゃないかい？」

「ふ、ふんっ！！ そりゃあんなロリコン野郎なんかよりも俺がよ
かったからに決まってるだろ！？」

「おにーちゃんには、ないしょ」

「ん？ ないしょ？」

「こっそり上手になって、おにーちゃんに褒めてもらうの。だから、
今日のところはたけなかがまん」

「……………」

「そっか。ひなたくんは本当に昴さんが大好きなんだね」

「おー。おにーちゃんだいすき」

「俺……………ちよっと外行つて涼んでくるわ」

「？ うん。行ってらっしゃい」

その背中が、もの凄い哀愁を漂わせていた。

次の日から夏陽くんが昴さんに強く当たるようになったのだけど、
何故だろうか？

scene・11 頑張る気持ち（後書き）

その後、夏陽は外でさめざめと泣いたという……………。

はいっ。この日の話はもうちょっとだけ続きます。

あと2話くらいかな……………？

慧が、超鈍感&残酷キャラになってしまったのは、予定外です。

scene・12 侵入者は許しません(前書き)

はいっ。更新です。

今回は駆け足みたいになってしまいました。前回のあとがきで、後2話くらい夜の話を続くと書きましたが、とりあえず今回で日付が変わります。

それでは、お楽しみください。

scene・12 侵入者は許しません

「……………よし、じゃあもうおしまいにようか」

ひなたくんの手が上がらなくなってきたので、その声をかける。
ひなたくんはちょっと不満げに、夏陽くんは迷いながらもどこか納得した顔で僕のほうを見る。

「ぶー。もうおわり?」

「そうだね。やりたい気持ちもわかるけど、オーバーワークは禁物だよ」

「だな。怪我したら元も子もねーし……………じゃあ、今度は慧の練習の手伝いか?」

「いや、それはいいよ」

若干疲れた様子を見せながらも、イヤそうな顔を一切見せないで
そう言ってくれるのはありがたいけど、

「2人とももう疲れたでしょ? それに時間も遅くなってきたし……………
片付けとかは僕がやっておくから、2人は先に小屋に帰ってて」
「いや、でも……………」

僕よりも自分たちのほうが長く使っていたことに罪悪感を感じた
のか、ばつの悪そうな顔で引き下がろうとしない夏陽くん。

「大丈夫。開けたのは僕なんだから、閉めるのも僕がやるよ。……………
それより、ひなたくんを送ってあげて」

「……………ああ、わかった。ほら、ひなた。行こうぜ」

「おー。けい、どうもありがとう」

「うづうん。どういたしまして」

長い沈黙の後、諦めたのか溜息をついてひなたくんを促す夏陽くん。ひなたくんも、僕に1つお辞儀をした後、小屋へと帰っていった。

「……………」

体育館が、再び沈黙に支配される。

ひなたくんは、今日一日でずいぶん成長した……とは一概には言えないが、一歩ずつ確実に進歩している。それはひなたくんの、純粹に上手くなりたいと思う気持ちと、夏陽くんの彼女に対する真剣な指導があるからだと思った。

……………選手が成長するのに、わかりやすい解説書や腕のいいコーチは必要ないのかもしれない。純粹に上手くなりたい。楽しみたいという気持ちと、それを支える無条件な人を想う気持ちが、成長を促すのだと、僕は思う。

「ひなたくん。きみはもう……立派な選手だよ」

だからこそ、2人の背中が見えなくなった闇に向かって、ポツリと呟いたんだ。

さて、僕ももう少しやっつけていこうかな。僕にも、彼女たちのような純粹な気持ちがあることを信じて……………。

・成長日記・K(BRT)・

『やっぱりまだやってやがったか』

『！！ 夏陽くん。どうして……』

『手伝うって言ったのに、約束守らないで帰るのは後味悪いからな……。し、仕方なくだ！ 仕方なく!!』

『……………ふふ。ありがとう。それじゃあお言葉に甘えて、手伝ってもらおうかな』

『お、おう!! ！？ 何をすればいいんだ?』

『そうだね……………まずは、ちょっとパスの相手になつてくれないかな?』

『パスの? そんなんでいいのか?』

『うん。ちょっと変わったパスを思いついてね。もう大体形は出来たから、キャッチしにくいとか、そういうところを見て欲しいんだ』

『ああ、わかった』

『……………』

『ど、どうだい？ やっぱりやり辛い……………かな？』

『い、いや……………驚いて言葉が出なかったただけだ！ キャッチもしやすいし、それに何より……………これはカット出来ないだろ』

『そうかい？ よかった……………それじゃあ成功みたいだね』

『ま、まあ……………アイツら、特に真帆が取れるかどうかだけだな！』

『大丈夫。きつとみんななら取ってくれるよ。……………ありがとう。手伝ってくれて』

『べ、別に約束を守っただけだし。そんなお礼言われるようなことじゃねーよ』

『それでも、ありがとう。……………さ、もう帰ろう。僕は鍵を返してくるから、夏陽くんは先に帰ってて』

『また黙って練習してようとか思ってねーだろうな？』

『ふふ、大丈夫だよ。さすがにもう遅いし疲れたし。返したらすぐに帰るから』

『……………はあ、わかった。それじゃあお先』

『うん。それじゃ』

「よっ。お疲れさん」

「あ、お疲れ様です」

電気を消して、扉に鍵をかけたところで図ったかのように美星先生が声をかけてきた。

「こんな遅くまでよーやるな……ほれ、鍵預かるぞ」

「はい。ありがとうございます」

鍵を手渡す。ずっしりとした重さが手の中から消え、少し開放感。だけど、美星先生は受け取った後少し考え込むような顔をして、やがて口を開いた。

「……なあ慧。今のバスケ、みんなとプレイするバスケは面白いかな？」

「？ ……ええ」

どこか引つかかる、裏があるような言葉に少し首を傾げてしまっが、純粹に本心を語ることにする。

「今まで僕は、個人技のバスケしかやってきませんでした。でも慧心学園に来て、みんなと力を合わせる楽しさに気づきました。以前の僕では、チームプレイのための技なんて考えもしなかったのに、今はそれしか考えてない………凄く、楽しいですよ」

迷いなく、そう言えた。

美星先生は期待していた言葉が返ってきたのか、満足そうな笑み

を浮かべると僕の横に回って背中をばしばしと叩いてくる。

「そうか！ よかったよかった！！」

「昴さんや、みんなのおかげですよ。……いい甥っ子さんをお持ちで」

「いやいや、どーしようもないロリコン野郎だよ」

「いやいや、そんなことはないと思いますよ？ 昴さんはみんなのことを、妹みたいに思っているみたいですし。」

「今日はもうゆっくり休んで、明日に備えな」

「はい。ありがとうございます。……それでは失礼します」

「ああ。また明日」

僕が背を向けて歩き出しても、先生は軽く手を振り続けていた。

でも、僕が真っ先に向かったのはみんなが眠る小屋ではなく、台所だった。朝食は大事だからね。仕込みだけ終わらせておいて、すぐに朝食を作れるようにするために。

もうみんな寝た頃かな？ 体育館の後片付けと、明日の朝食の仕込みが思ったよりも長引いてしまったので、凄く遅くなってしまった。

みんなを起こしてしまったら申し訳ないし、静かに足を忍ばせて小屋の裏を通り過ぎようとした時……………それは聞こえた。

「さてと、そろそろか」

この声は、昴さんかな？ 一体どうしたのだろう？
深夜にもかかわらず、何か一大決心したかのような思いつめた声。
そのあと、断続的に聞こえるぺちぺちと何かを叩く音。

「……………んあ？ ……っ……………なんだよ……………くあ」

次いで聞こえるは、眠そうな夏陽くんの声。

「起きたか。よし、じゃあひなたちゃんのパンツ返しに行くぞ」
「……………ああ、パンツな。よし、行くか……………ってなぜそれをつぶがー！」

ん？ なんだって？

今、看過出来ない言葉がいろいろ聞こえてきたような気がした。
……いやいや、さすがに僕も疲れたのかな。練習のしすぎかな？
ははは。

「やれやれ、2人に不名誉を与えてしまうような幻聴が聞こえてしまっ
まうなんて……」

「んーにゃ。幻聴じゃねーよ。安心しろ」

「そうですか。じゃあとりあえず疲れてはいないらしい　　っ
て、何故先生がここに？」

職員室に体育館の鍵を帰しに行ったはずの美星先生が、僕の後ろ
で腕を組んでなにやら神妙な顔をしている。

「ちゃんとみんなねてるかなーと思って来てみたら……思わぬ場
面に遭遇してみたんだ」

「は、はあ……」

確かに、もしあれが本当に彼らの会話だったとしたら、見過ごす
わけには行かない。

今は声を抑えて話しているのか壁越しでは何を話しているのか
はわからない。

「あの……先生」

「うん？ どうした？」

「つかぬことをお聞きしますが、もし2人が不埒な行為に及んだ場
合は　　」

「慧、夏陽は頼むぞ」

「……………了解です」

僕の話が終わる前に、ふすまが開かれる音がかすかに聞こえた。

位置から考えるとそこは………女子の寝室へとつながる場所だ。その瞬間、美星先生の顔に影が宿った。有無を言わせぬ声で夏陽くんの処理を言い渡され、僕は彼に説教をする係りになってしまったようだった。

彼らが女子の寝室に入った後、何かが崩れ落ちるような音がしたり、それによって紗季くんや真帆くんが騒ぐ声がしたり、僕を苦しめた黄な粉弾が炸裂したらしい音（心の底から、寝室にいらなくてよかったと思った）がしたりした。そして、その騒ぎの乗じて逃げ出したであろう2人の侵入者が、小屋の玄関から逃亡するのを確認。

「それじゃあ慧。……後は頼んだぞ」

「……………はい。美星先生」

昴さんの無事を祈りながら、鍵が開いていた和室の窓から中へと侵入した。

「やーお帰り夏陽くん。どうだった？ 女子の寝室に忍び込んだ感想は？」

「なっ！！ けけけっけっけっ慧！？ 何でそれを！？」

安心しきって和室へと入り込んできた夏陽くんは、暗闇の中から声をかけた。まさかバれていたとは思っていなかったであろう彼は、思わぬところから声を掛けられてかなり動揺していた。

「ちょうど明日の朝食の仕込みを終えて小屋に帰ろうと外を歩いていた時にね、聞こえてしまったんだよ。ひなたくんの下着は、無事に返せましたか？」

につこりと笑顔を向けると、彼は壊れた人形のように何度も首を立てに振る。

「そうですか……それじゃあちょっと移動しましょうか。台所辺りまで」

「はい……………」

再び窓から外に出たあと、台所へと向かった。ここはみんなが寝ている寝室とは少し離れているし、少し騒いでもみんなに迷惑はかからないだろう。

「さ、夏陽くん。そこに座りましょう」

「はい……………」

あえて椅子を指さず、畳の床に座るように促した。引きつった顔をしながら、夏陽くんは正座をする。僕も、その正面に正座をした。

「さて、夏陽くん。たっぷりお話ししましょうね？」

「はい……………」

「それではまず、なんであんなことをしたのか位は聞かせていただきますでしょうか？」

僕がそう言うと、恐る恐る夏陽くんは口を開いた。

ひなたくんの下着は、お風呂に入った時偶然見つけてしまったそう。最初はそれが何だかわからず、広げてみたところ初めてひな

たくんのものだとわかり、あせつた時に昴さんに声を掛けられてとつさに自分の懐に隠してしまつたらしい。更に、実はその下着は昴さんがあらかじめ更衣室においていたものだとも言つた。彼もまた、夏陽くんとほぼ同じ理由でそれを拾つてしまつたとか何とか。

「……………ふう。だいたい理由はわかりました」

「ほつ……………」

「でも」

ほつと一息ついたのもつかの間、ビクツと体を震わせて僕を見上げる夏陽くん。……………事は、そんなに簡単なものじゃあないのですよ。

「それが、寝ている女子の部屋に侵入していいという理由ではありませんよね？ それこそ、窓から出て再び脱衣所に行つて下着を置いてくるとか、他にも色々考えれば出来たはずですよ」

「はい……………」

「それに幼馴染だろうとライバルだろうと、いるのは全員寝ている女の子なのですよ？ 寝ている自分の姿は見れません。中にはその姿を見られてシヨックを受けてしまつ子もいるでしょう。そのところをちゃんと理解していましたか？」

「すみません。考えが足りませんでした……………」

「夜はまだまだ長いです。たっぷりお話ができますね」

「け、慧……………さん？」

不安げにこちらを見る夏陽くん。でも、僕の話は続くよ……………。

「きみには、女性に対するマナーやその他諸々をたっぷりお教えしましょう。……………大丈夫。人間5日くらい寝なくても死にませんから……………」

それから夏陽くんに対する、マナー講義が始まった。

終始萎縮しっぱなしだった夏陽くんは素直に全部聞いていたので、思ったよりも早くそれは終わった。

時計を見ると、午前3時を回っていたけど……………。

scene・12 侵入者は許しません（後書き）

ちょっと慧がうるさすぎましたかね？

でも、女性の寝室に勝手に入るのはいけないと思うのです……。

scene・13名案……？（前書き）

はいつ。お久しぶりです！！

しばらく放置していて本当に申し訳ございませんでした。
言い訳はしません。

ですが、リアルが忙しくなってきたのでこれから定期更新は出来な
さそうです。

申し訳ございません……。

なるべく、早く投稿したいと思しますので、今後も応援のほどよろ
しく願います。

scene・13名案……？

side・S

【火曜日】

「うーん……やっぱり慧のポジションは決め辛いな………」
「す、すみません………」

「ああごめん。別に慧を攻めてるわけじゃないんだ。ただこうも長短がはつきりしてるとなると逆に難しいっていうか………」

今日は、智花ではなく慧が家に来ていた。俺に直接相談したいことがあつたらしくて、智花に場所を聞いて来たらしい。朝、練習していた時に智花は何も言っていなかったので、恐らく学校で聞いたのだと思う。

慧の相談内容はやはりというかバスケのことで、『今の自分がみんなと一緒にバスケをプレイできるのか』と言うものだった。途中から入ったと言うのもあるし、みんなと過ごした時間が少ないので不安に思っているのだろう。

確かに慧がみんなと過ごした時間はとても少ない。でも、俺がコーチとしてみんなを見ている限り、信頼を得ていないだとかそんなことは決してなかった。まるで、みんなのお姉さんにでもなったかのようによく気が利く慧は、智花も真帆も、紗季も愛莉もひなたちゃんも信頼して仲間と認めているのははつきりとわかっている。

その辺りを丁寧に伝えたところ、恥ずかしそうに顔を赤らめてう

つむきなながらも、「そう思ってもらえているなら……これ以上嬉しいことはないですね」と嬉しそうに笑っていた。

それともう1つの相談事が、慧のポジションについて。

これに関しては俺も淒く悩んでいたもので、正直今日慧が家に来てくれてよかったと思う。慧の実力を把握するために、1対1の試合をしたのだ。……と言つのは単なる名目で、本当は慧と一回試合を試してみたかったのもある。

結果は俺の勝利だったけど、智花を相手にするよりもかなり得点を奪われた。1対1のオフエンスでは智花よりも上らしい。その分ディフェンスが甘かったり、遊びすぎる点が否めないが……まあそこはどうかなるだろう。

結果から見て、慧のポジションはフォワードがいいのかも知れないが、問題点が2つほどあった。

まず1つ目は慧の体力が少ないこと。今までの練習で見えてわかったことだが、慧の喘息は思っていたほど軽いものではなかった。本来はかなりの体力を持っているかも知れないのに、軽度の発作が頻繁に出るので愛莉やひなたちゃんよりも早く息が切れてしまう。

2つ目が慧のシュート精度にムラがあることだ。慧本人が「モチベーションが上がらないとシュートが入らない」と言っているように、入る時と入らない時の差が本当に激しい。これは、おそらく基礎の練習シュートが出来ていないためだろう。

以上のことから、慧のポジション決めは慎重に行うことにした。最悪、球技大会中に決めようとも思っていた。

「……あの、僕ポイントガードは出来ませんか？」

そう思っていたのだが、慧から予想外な提案が来た。

「ポイントガード？」

「はい。実は少し前から、みんなの役に立てないかとパスの練習もしてたんです。それなら僕でも少しは使い物になるのではないかと
思ってます……」

「そうか……じゃあちょっと見せてもらおうかな。練習の成果」
「はい……」

そう言って、再びボールを持ち出す。ドリブルをしながら慧は、
「実はパスの技も考えたんです」と嬉しそうな顔で語っていた。ふ
っ……なら、その技を見せてもらおうか。

「……ご、これは……」
「ど、どうですか？」

はつきり言って予想外だった。凄い……これは凄いぞ！！

「ああ凄い。前々からボールを自在に操れると思っていただけここ
まで出来るなんて……まるで漫画の世界みたいじゃないか！！」

「それ、喜んでいいのでしょうか？」

「ご、ごめん言い方が悪かったかな？ ……でも、本当に凄い。う
ん。慧」

俺は慧と向き合って、片手で持ったボールを目の前の少女に手渡す。

「俺も見てみたくなかった。球技大会では、みんなのアシスト王になるべくがんばってくれ!!」

「……………はいっ!!」

凜とした表情で、彼女はボールを受け取った。

side・others

その帰り道、慧は少し落ち込みながら歩いていた。

「はぁ…………アシスト“王”か。…………やっぱり僕ってそんなに男の子っぽいかなあ」

女王と言って欲しかったらしい。

ちなみに次の日から夏陽の、昴に対する態度が更に悪くなってしまったのは、無関係では無いかも知れない。

【金曜日】

今日で、一週間の特訓が終わった。実際やってみると短いもので、少し物足りない。

先日昴さんに見せた新しい技は無事採用され、みんなに披露してみることになった。その時のみんなの反応は上々で、キャッチもすんなりやってくれていた。真帆くんはひたすら真似したがっていたが、これも僕の異常に曲がる手首があって出来る技なので諦めても

らった。

特訓の内容はチームを2つに分けて行うと言うもので、【Aチーム】は昴さんがコーチで智花くん、紗季くん、愛莉くん、僕の4人が生徒。【Bチーム】は真帆くんとひなたくんが生徒で、コーチが夏陽くんだった。

日曜日、夏陽くんはみんなの前で球技大会のバスケットボールには出場しないと聞いた。みんなで理由を問い詰めたところ、僕たちに任せてもいいと思っただけの判断なのだそう。ばつが悪そうに、頭をかきながらそう言っていたけど、その言葉が単純に嬉しかった。それから、夏陽くんがコーチとして真帆くんとひなたくんの練習を見ていてくれた。

2人の練習はとにかくシュートを繰り返していたらしい。真帆くんも、ひなたくんもずっといぶん入るようになったと喜んでた。(真帆くんは夏陽くんの自分とひなたくんの扱いの違いに憤慨していたが)

僕たちの方もずいぶん成長したと思う。みんなそれぞれ昴さんに相談したりして、不安を拭い去ったり新しい練習を追加してもらったりしていた。もちろん僕もその中の一人で、パスの粗いところなんかを指導してもらったり、ゲームメイクを教えてもらった。

明日の試合が楽しみだ。みんなとやる、初めての試合。……絶対、勝とう。

まほまほ

『すばるん、きてくれるんだって!?!』

湊 智花

『うんっ! 美星先生が何とかしてくれるって!?!』

あいら

『……よかった。嬉しい』

ひなた

『おー。おにーちゃんに、見てもらえる。いっぱいがんばらないと』

ケイ

『そうだね。教えてくれた昴さんや夏陽くんに格好悪い姿は見せられないからね』

紗季

『……でも、大丈夫なのかな。や、もちろん来て頂けるのは嬉しいんだけれど。見つかったら大変じゃない?』

まほまほ

『みーたんがなんとかするっていつてるんだしだいじょうぶだろ!』

紗季

『……だと、いいんだけど』

ケイ

『確かに、一抹の不安が拭い切れない……』

「ぎゃはは！！ 箱！ 長谷川巣箱！！」

当日、得意そうに腕を組む美星先生を前に僕たち（絶賛大笑い中の真帆くん除く）は呆然としていた。

僕たちC組バスケットボールチームは順調に試合を勝ち進め、次が決勝戦だ。相手は（真帆くん曰く）ライバル関係の因縁のあるD組。この勝敗で、総合優勝がどちらになるかが決まるらしい。ちなみに僕は、まだ一度も試合には出ていない。僕自身の体力が少ない

のと、学校のみんなにはまだ誰にも僕がバスケットをやっているところを見せたことがないので、決勝戦まで温存しようという昴さんの指示だ。その代わりに、決勝戦は僕がスタメンのガードで、自由にやらせてくれるらしい。

そんなわけで、意気揚々とやってきたわけではあったのだが、目の前にある……この、跳び箱。なんとこの中に昴さんが入っているらしい。なんとというか、その………ねえ？ うん。いい案だと思います。

「お前……。わかってんのか？ これからすぐ試合だぞ？」

そんな感じで若干現実逃避していたら、跳び箱を蹴る真帆くんを夏陽くんが諫めていた。

「うるせー負け犬」

「……ぐ」

「真帆くん、一生懸命戦った人にそれは失礼だよ。さあほら、もう蹴るのはやめようね。足を怪我したら大変だよ」

「……確かに。しゃーないな」

夏陽くんはバスケットボールではなくサッカーのほうで試合に出ていた。コーチをしてくれた恩もあると言っただし、みんなで応援しに行ったのだが……結果は決勝戦で惜しくも敗退。

「はっはっは！！ 美星先生、サッカーは我らが6-Dの勝利でしたよ！ 今年も総合優勝はD組がいただきます！ おう！ みんなもがんばれよ！！ 正々堂々、いい試合をしよう！！」

そう、この先生が担当するD組に負けてしまったのだ。

この先生は通称ヤマ先生。真四角な短髪、サテン調の紫色のジャ

ージ、色黒マツチヨな逆三角ボディが特徴の体育教師だ。熱血な凄く熱い先生で、僕は嫌いではない。ただ、喘息で体育を休もうとすると「気合が足りないぞ!!」と一括してくるのはご勘弁いただきたい。……まあ、ちゃんと休ませてくれるから別にいいのだけれど。

「ヤマ先生、暑苦しいよ」

「はっはっは、恐縮です!! ではまた後ほど!!」

美星先生のめんどくさそうな言葉に、ヤマ先生は全く噛み合っていない返事を残して去っていった。

「さて、と。それじゃあ最後の作戦会議だ」

と、昴さんがかきこまっつて言い出したのだが、

「うお。この箱……しゃべるぞ!!」

「つく……!!」

すぐさま美星先生が茶化しに入った。それにつられて僕も含めて何人かが嘔き出してしまった。

「いい加減にしろてめえ……」

「にはは、ごめんごめん。スルーするのが逆に失礼になりそーなくらいマヌケだったから。……ほら、昴が話やすいようにみんなもつと傍によってやんな」

する気のないような謝罪の後、美星先生がそんな風に場を繕った。

「……ったく。あー………こんな状況で申し訳ないけど、最後に一言だけ。……一週間ご苦労様でした。かなりのハードスケジュール

ルだったけど、みんなよく頑張ったよ。あとは、平常心で力を発揮できれば、きつと勝てるから。……見せてやりな。6・Dに、そして竹中に。君たち女バスの力を」

「おうっ!!」 ナツヒ! あたしたちの芸術的な勝ちっぷりをしっかり見とけよ!!」

「へっ、ここまで俺を付き合わせたんだ。むしろ勝ってもらわなきゃ困る」

真帆くと夏陽くんが、お互い不適に笑い合い。拳を突き合わせる。

「いよっ、いくぞみんな!!」

それから美星先生の気合の一発。……続いて跳び箱の上に飛び乗った。

「れっつごー。ほれ竹中、押しなさい」

「……なー美星。これ、超マヌケだぞ、見た目」

手押し車のように、跳び箱と美星先生が乗った台車を運ぶ夏陽くんの図。

彼の言つとおり、正直なかなか間の抜けたものだった。

scene・13名案……？（後書き）

と言うことで、慧のポジションはガードです。

紗季ファンの方々、申し訳ございません。

ですが、紗季のポジションがガードということも変更はしません！
！ 断じて！！

さて、今まで焦らしに焦らした慧の技はどんなものなんでしょう。
次回にご期待ください。

scene・14 試合開始(前書き)

はいっ。更新です。

今回はいつもの半分くらいになってしまいました……。
申し訳ございません。

scene・14 試合開始

(注：球技大会の試合に関して)
原作ではメンバーチェンジは無しでしたが、この作品の中では有りとさせていただきます。

それ以外のルールは同じなので、それだけ覚えていただければと存じます。

【C組 0 - 0 D組】

美星先生と昴さん、そして夏陽くと紗季くんはコート脇に陣取り、僕たちはセンターサークル付近に集合する。

紗季くんがコートから離れ、僕が試合に出てきたことにD組のみんなは困惑しているようだった。紗季くんなら以前戦ったことがあるからどの程度なのかわかるけど、僕は全くの未知数だからだろう。少しみんなのざわつきが落ち着いてきたところで、智花くとD組の1人がセンターサークルの中心に立ち、ジャンプボールの体勢。

試合が、始まる。

……この緊張感、ストリートでは味わったことないかも知れない。未知の感覚に、僕の心はわくわくと躍っていた。

審判役の先生が宙に放ったボールが、最高到達点を下り、智花くんの手によって弾かれた。球は真帆くんの手に収まり、ボール運びを司る（と見せかける）智花くんにノータイムで戻された。みんなから聞いた、以前行ったという対抗戦と同じ皮切り。

「愛莉っ！」

「は、はっ！……！」

智花くんが高くくて緩いパスを繰り出す。それをゴール下で受け取った愛莉くんはおっかなびっくりながらもシュート体勢に入るが、

「ひゃ……ひゃいんっ！……！」

途端、D組の絡みつくようなディフェンスに、バランスを崩してしりもちをついてしまった。

「ピッ！　　白6番、プッシング」

判定は敵のファウル。……だけど、これでもう愛莉くんは中へ入れなくなってしまった。

シュート中のファウルだったのでフリースローを2本貰えたのだが、愛莉くんはそれを外してしまう。

D組がりバウンドを制し、攻守交代。ひなたくんとミスマッチの伸長差を突かれて彼らのシュートはリングに収まる。先制点はD組。

ボール権がこちらに戻り、エンドラインからパスを受けた智花く

んが敵陣へと進む。

そこへ、D組からダブルチーム【マンツーマンで使われるディフェンス。1人のプレイヤー（＝大抵の場合エース）に対して2人でディフェンスをすること】でマークがつく。智花くんの侵攻を押しさえるべく、D組の2人が引き締まった顔で立ちふさがった。

なるほど……いい手だ。いくらチームワークがいいと言っても、智花くん以外はまだ初めて数ヶ月。無策のワンマンチームは、エースを叩けばすぐに崩れる。……無策なら、ね。

「智花っ！」

（昴さんから指示を受けた）美星先生が、智花くんにサインを送る。それは、彼女の個人技の解放。

「くっ！ んっ！」

だが、敵のマークは想像以上に堅く、珍しく焦燥をあらわに、口惜しそうな声を智花くんが上げた。

ボールを奪われるところまでは至らないけど、智花くんはドライブもシュートもできない状態に長くさらされる。少なくとも、彼女1人では包囲網を突破できそうにないのは明らかだった。

やがて、30秒ルール【攻撃側は、コート内でボールを保持した後、30秒以内にボールを攻める方のリングへと触れさせなければならぬ】のホイッスルが鳴る。ルールにより、ボール権はD組へと移るが彼らもシュートを外し、再び僕たちの攻撃に戻った。

【C組 0 - 2 D組】

「……うん、じゃあ始めますか。愛莉くん」

「あ、はいっ」

ボールを手にした愛莉くんから、ボールを受け取った。……お言葉に甘えて、自由にやらせてもらうために。

最初、僕がボール運びをしなかったのは、相手の動きを見るためだ。やはりというかなんというか、昴さんたちの読み通りD組は智花くんを警戒しているようだった。でも、大体の戦力はわかった。

「さあ！！ 始めるよ！！」

僕はドライブで一気にハーフラインまでボールを運び込む。智花くんほどではないが、僕もそれなりにドライブには自身がある。ろくにマークマンもいなかったのだから、ここまでは楽に運べた。

今、それぞれみんなにマークマンは1人ずつ。智花くんのダブルチームは解かれたようだ。

ドリブルをしながら回りを見渡す。D組のみんなのディフェンスはなかなかのもので、パスカットを虎視眈々と狙っているようだ。

……ふむ、ここは

「もらった！！」

「……甘いよ」

余所見をしていた隙を狙ったのか、僕の右手めがけて手を伸ばしてくる。だがそれは手を後ろに引いてかわし、そのまま背中に持つていってそのままゴール下へヒインドパス。ちょうどよく滑り込んでいたひなたくんはパスはわたる。

「おー。たけなな直伝」

ノーマークのまま打たれたシュート。

「Great! ひなたちゃん」

そのシユートは、往生際悪く2回半もリングの上で転がった後、ネットの中へと吸い込まれていった。

scene・14 試合開始（後書き）

まだまだ新技は出してません。

多分次、出せる……………かな？

s c e n e ・ 1 5 新技お披露目（前書き）

はいっ。更新です。

やっと新技が出せました。焦らしに焦らした割には大したものではないかもしれませんが、ちょっぴり期待しててください。

それではごっぞ。

scene・15 新技お披露目

【C組 2-2 D組】

ようやく僕たちC組の、記念すべき初得点はこの合宿で見事に成長を遂げたひなたくんがその力を発揮することで得ることが出来た。予想外の展開にD組のみんなは戸惑っているようで、そんな彼らからボールを奪うのは簡単だった。ハーフコートを過ぎた辺りでボールを奪う。

「真帆くんっ」

「くっ、マーク！」

右サイドから切り込んできた真帆くんに、ドリブルをついていた右手だけでバウンドパス。

真帆くんのシュート精度は前回の対抗戦で披露されているので、やっぱり警戒しているみたいだ。相手のディフェンスが全体的に右サイドに寄る。

「ぬっ、くっそー……アイリーンっ!!」

フェイスガード【相手にべったりと張り付き、執拗にプレッシャーをかけるディフェンス】とまではいかないが、抜かれることを考えないシュートだけを打たせまいとするディフェンスは、今の真帆くんの力では振り切ることが叶わない。山なりのパスをインサイドに投げ、愛利くんはボールを渡す。

「うっひゃう……け、慧くんっ」

相手Cのプレッシャーが強く、シュート可能な距離まで詰めることが出来なかった愛莉くんは、またも山なりなパスを僕に渡す。

「くっ……またか」

トップ、右サイド、中、再びトップとあおられた僕についてくるディフェンス（ビブスの合間からちらりと菊池という名前が見えた）が苦々しくつぶやいた。……まあ、パスワークで敵のディフェンスを煽るのは基本だからね。

次の手を搜してみるけど、なるほど夏陽くんが言っていたようにディフェンスはかなり強化されている様子。みんな自分のマークマスを振り切ろうと必死だ。

「へえ、驚いたよ。ハーフラインからのターンオーバーなのにすぐに自分のマークマンにつく早さ、振り切ろうと走ってもずつついてくるタフネス。……やるね」

「……厭味にしか聞こえねえぞ？ 余裕綽々な顔でそんなこと言われても」

「いや、本心だよ？ 楽しくて仕方がない。やっぱりバスケットはこうじゃなきゃね」

のんきに話をしながらも、実際はボールをめぐる攻守が繰り返されている。

そして、一瞬の隙を見つけた。

「あっ……！」

僕のフェイントに引っかけたり、菊池くんの重心が僕から見えて左にズレたところで、一気に抜き去った。そしてそこからゴールへ向かって直進する。

「くそっ」

愛莉くんについていたディフェンスがすぐさまカバーに入り、僕を止めに行き方向正面へと出てきた。その瞬間に行き方向を斜め左へとずらし、抜きにかかる。つられるように、彼も同じ方向へついてくる。

「待て、ついていくな!!」

味方であるはずの夏陽くんがコートの外から彼に声をかけたが、気付いたときにはもう遅い。彼はすでに、シュートを打つべく飛び上がった僕を妨げるようにジャンプしていた。位置は完璧。確かにこれはシュートは打てない。だけど狙いは、

「愛莉くんっ!」

そのまま持ち手を左に変えて、背中から逆側のインサイドにいる愛莉くんへヒインドパス。完全に虚を突かれた彼はパスを防ぐことも出来ずに簡単にパスを通させてしまう。

「え、ええいつ!!」

見事にキャッチしてくれた愛莉くんは、ノーマークの状態でシュートを打ち、見事にシュートを決めた。

「ナイツシュ、愛莉くん」

「うん。……えへへ」

ディフェンスに戻りながら、嬉しそうに笑う愛莉くとハイタッ

手。

ちゃんと言いつけ通りにボールから目を離さないようにしてくれていたみたいだ。こういうトリッキーなパスは、出す側よりもむしろ受け取る側の方が難しいことがある。それに完全に裏をかくことも多いため、少しでも気を抜いたらキャッチミスをしてしまう。こういうパスは、チームメイト同士の信頼関係がものを言うんだ。

だからキャッチしてくれた時は、僕も信頼されているんだと凄く嬉しい気持ちになった。

その後も、D組のオフェンスはぎこちないものだった。その隙を見逃す手はなく、容赦なくボールを奪う。

「マークっ!!」

再び僕がボールを保持したところで、ディフェンスがつく。……うん。なんだか警戒対象とみなされているみたいで実に心地がいい。それではお礼として、新しい技をお見せしようかな。

「真帆くんっ!!」

そう言って、右サイドにいる真帆くんに右手でバウンドパスを出す……けど、

「なんてね」

「えっ……!!」

そのパスは真帆くんには向かず、直角に曲がってインサイドにいる愛莉くんへと渡った。

これが僕の異常に曲がる手首を利用して生み出した新しい技だ。手首のスナップを最大限に利用し、ボールにかなりの回転を加えて

バウンド後の進行方向を変えるのだ。回転の方向や速度、パススピードを調節することによって自由自在な軌道を描くパスが出せるようになった。

これもあらかじめみんなにお披露目はしてあるので、驚くことなくキャッチしてくれる。

「智花ちゃんっ」

そこにディフェンスを振り切った智花くんがインサイドへ切り込み、手渡しのように至近距離で愛莉くんからボールを受け取ると楽々シュートを決めた。

【C組 6 - 2 D組】

scene・15 新技お披露目（後書き）

技の名前、実は決まっていなくていいんですよ。

と言う事で、この自在に軌道が変わるパスの名前を募集しますっ！！
ご協力お願いいたします！

scene・16 根性論(前書き)

はいっ。更新です。

球技大会編もこの話を含めて後2話です。
長かったなあ……。

scene・16 根性論

立て続けに得点を手に入れることに成功した僕たちだが、相手も気を取り直し始めたらしく先程までのぎこちないオフェンスではなくなってきた。このメンタルの強さは見習うべきだろうね。

「はっはっは！ どうしたみんな！！ 最後まで諦めちゃだめだぞ！！ ファイト！！ D組！！ ファイトお！！」

そして、ヤマ先生の声援。この声援で、D組のみんなの顔に元気が完全に戻ってきた。

体育の授業で、ほぼ毎回受けている僕だからこそわかる。ヤマ先生の声援には、何故だかもう少し頑張ろうという気を起こさせる何かがあることに。それは熱血体育教師故の熱意か、先生の人望か。先生の熱い声に、こちらも熱い気持ちで応えたくなるんだ。

戦略なんて何もないまさに根性論なのだが、その時に常識を逸する論理が、彼らD組を再び元氣付けたのだ。

「これは……気を、引き締めないと……ね」

「慧くん、大丈夫？」

「うん……………大丈夫、だよ」

そして、今日もまたやってきた。喘息の発作だ。わずかではあるけれども、呼吸をするたびにあのイヤな音が混じっている。けどまだこの空気を味わっていたい。紗季くんには悪いけど、もう少しだけ出させてもらおう。

はつきり言つて、D組のみんなの底力は称賛に値する。あれから、気を取り直した彼らは立て続けに2本シュートを決め、点差を縮めた。だがこちらも、やられっぱなしではいられない。こういう場面でこそ一番力を発揮する真帆さんと、エースの智花くんがシュートを決めて点差を戻す。けれども、負けじとD組はさらに点をもぎ取った

【C組 10 - 8 D組】

そして遂に、喘息の発作が強く出てきてしまったため、僕はベンチへと強制送還。紗季くんと交代した。

「凄いじゃない、ケイ。驚いたわ。後は私たちに任せなさい」

交代するときに、紗季くんはそう声をかけてくれた。

「お疲れ、慧」

ベンチに座ると美星先生が声をかけてくれた。

タオルで汗を拭き、ドリンクを飲んでから答える。

「はあ、はあ……お疲れ、様です」

「すげえな。あんなことも出来るんだな。……………楽しかったか？」

「そう、ですね……楽しかったです」

「うむ、その心意気やよし！ 後はみんなに任せて応援でもしてるな？」

「はい」

昴さんが入っている跳び箱の上から、優しく見下ろしてきた。確かに楽しかったけど……………。

「ああ……………悔しいなあ」

「なんだよ。アレだけボコボコにしておいてやり足らねえのか？」

タオルで顔を覆いながら天を仰いでそうつぶやくと、横からちょっと不機嫌そうな夏陽くんの声。タオルを取り外してそっちを見ると、呆れたような顔をして僕を見ていた。

「ボコボコって……………そんなことないでしょ。 2点差だし」

「そういう問題じゃねえ。アレだけ楽しそうにやってたのに何が不満なんだよ」

「不満は別にないけど。……………ただ、1点もゴールを決められなかったことと、僕のディフェンスをした菊池くん、だっけ？ 彼に4点奪われたのが悔しい」

ふいつと視線を夏陽くんから逸らす。きっと、今は少しふてくされてるような顔でコートを見ているんだと思う。これで話は終わりだと思っただけ、つられるようにコートの方を向いた夏陽くんがポツリとつぶやいた。

「……………そんなこと、無いと思う」

「え？」

「慧は凄くよかったと、思うぞ？ 何ていうか輝いていたっていうか……………うん。カッコよかった」

「え、あ、う…………… Thanks」

びっくりして彼の方を見ると、自分が何を言ったのかようやく理解したような顔で、徐々に顔が赤くなっていた。そんな表情をす

るものだから、僕もつられて顔が赤くなっていくのを感じた。

そして、すぐ隣で普段は似ていないのにこういう時だけ似た表情でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている2つの視線も感じた。

メンバーチェンジで紗季くんが出てきたことによって、少々油断したらしいD組。だが、それはかなり甘い。みんなのすばらしいパスワークに翻弄された後、十分に注意していたはずの紗季くんの斜め45度からのシュートを決められてしまい、点差が広がる。

僕が交代した後、ガードをやっているのは何と紗季くんだった。昴さんをお願いして、ドリブルを強化したらしく、スムーズなドリブルで進行し、D組や夏陽くんを大いに驚かせていた。だけど、僕たちはそれがハツタリだと知っている。これは可能性の提示だ。昴さんは、紗季くんにガードの素質を見出していた。普段の学生生活でも見せる統率力。時には残酷とも見える、冷静な判断力。そして、時折みせる頭のよさ。これは、ガードとしても重要な力だ。この試合で僕を先に出したのも、彼女にガードとしての動きを見せるためだったのかもしれない。

そして、その目論見は成功だと思う。紗季くんの思わぬ行動とみんなのパスワークにD組は翻弄され、点数を奪うことが出来たのだから。

【C組 12-8 D組】

「決めた、ハラをくくろう。今更迷ったって仕方ない。マークは香椎だ。ひなたは内に切り込んでこない限りは無視。それで

点入れられたら諦めよう」

「ただD組もいつまでも驚いてはいない。先程持ち上がった気持ちは簡単には下がらずしつかりと対策を持って試合を続行する。」

「跳び箱の合間から昴さんが頷いているのが見え、それが正解だと理解する。」

「さーで、時間からして……一発必中って感じたな」

「まだ4点差があるけれども、油断できないこの状況。昴さんがぼそりと呟いた。それについて、僕も夏陽くんも何も言わない。特に根拠はないが……いや、そんなことはないか。みんなのチームワークなら、大丈夫だと信頼していたから。」

「ミホ姉、最終作戦だ」

「……あいよ」

「美星先生が指示を出すと、智花くんが右サイドからドリブルを仕掛け、残る4人全員が左サイドに布陣を敷いた。」

「この陣形は、アイソレーション【敵のディフェンスを片側に集中させて、個人技の強い選手が一对一を仕掛けやすくする陣形】。智花くんの高い突破力を生かし、引き上げるための陣形と言ってもいいだろう。」

「しかしここでもD組は、智花くんのダブルチームを崩そうとはしなかった。すなわち、ディフェンスは智花くんに2人、そして左サイドにどっちつかずで3人という状況になった。」

「そしてこれは、今度こそ智花くんだけは何としても押さえ込むという覚悟が見て取れる、実に正しい選択だった。」

「だから、問題はその後。」

「時間帯からして、これは残り少ない、もしかしたら最後の攻撃チ

ヤンス。智花くんがダブルチームの上からあえて来るかもしれない。パスであるなら有効位置で受けられる紗季くんが第一候補。しかし、真帆くんがいつ右サイドに飛び出してくるかもわからないし、愛莉くんやひなたくんも、フリーであれば十分にシュートを納められるだけの素質がある。

一歩先の読み合いが、試合を大きく左右する場面。じり、じりと、智花くんは様子を伺う。

……やがて、

「パスだぞっ！」

高い軌道で放られたスナップパス【ドリブルのモーションからボールを頭上に掲げて、手首の振り抜きで出すパス】はゴール下付近の左ローポスト、愛莉くんが掲げた手の中へ。

「潰す！」

しかし、マークマンは近い。身長差故に、パス自体は難なく通ったけれど、進路はボールが到達する前に不穏な台詞とともに塞がれてしまった。そして、怖気づいてしまった愛莉くんは、

「お、お願いっ！」

真後ろに、パスを出した。角度のまったくない、リングの真横へ。そこでボールを受けたのは

「やれるっ！ 真帆くんっ！！」

ひなたくんと共に、夏陽くんの手によって第2の武器を宿された少女。

叫びを真つ向に受けて、0角度から、ボードが使えず距離感も図りづらいもつとも難しい位置から、真帆くんはシュートフォームに移る。

正直なところ、真帆くんのこの位置からのシュートは決定率で言えばまだあまり高くは無い。

確率論なら、時間がまだ少しある今なら他の方法で攻撃したほうが確実だろう。

けれども、真帆くんには裏づけがある。ここ1番の勝負強さと、持ち前の成長力。

そして、夏陽くんと共に歩んできた、毎日朝夕200本ずつのシュート練習という、裏づけが。

だから、真帆くんの手から放たれたボールは、音もなくリングに吸い込まれていった。

s c e n e ・ 1 6 根性論（後書き）

慧の技名、まだまだ募集中です。

はいつ。遂に球技大会編が終了ですっ！！

それではどうぞっ！！

慧の技名まだまだ募集中っ。

今後も、新しいのが出る度に募集するかもです。

「ありがとうございますっ！」

試合終了後の整列を終え、勝利を手にした女バス5人がこちらへ駆け寄ってくる。

「みたかナツヒっ！ やっぱあたし天才じゃねー？」

「ふん、言ってる。まだドリブルもターンも全然出来ねえくせに。」

……まあ、あのシュートはそこそこ……だったけどな」

「ねーたけなか。ひなのシュートは？ ひなも、シュート決めたよ？」

「……お、おう、パーフェクト、だった」

「うがー！ やっぱり差別だー！！」

「ふふ。ま、よくやったわよ、真帆。……本当は最後、私だって決めようと思えば決められたんだけどね。今日のところは譲ってあげたわ、お手柄を」

「……えへへ、紗季ちゃんも内緒で練習してたんだよね。ドリブルだけじゃなくて、横からのシュートも」

「ちょ、ちょっと愛莉っ！ 言っちゃダメって約束したじゃない！！」

「と言うより、言っちゃったら内緒で練習した意味ないよ……」

「……紗季、頑張りすぎだよ。……ふふっ。すごいね、みんな」

「なーにトモ、変な顔して。そういえば、愛莉も毎日ちゃんと走ってるんでしょ？」

「……えへへ。それくらいしか、わたしはまだできないから」

「いやいや、それも大事だよ。僕みたいに途中で退場するようない弱な体力じゃ使い物にならないからね」

「何言ってるのよ、ケイ。あなたがあれだけ活躍してくれたから私

も安心して出ることが出来たんだから」

「そうかい？ そんな実感はないけど、そう言ってもらえると嬉しいよ」

美星先生と夏陽くんを中心に、歓喜の輪が広がっていく。次第にその輪は広がっていき、気が付けば周りにはC組のみんなまでいっぱいだった。

「ね、みくたん！ 優勝したし、約束通りジュースおごってよ！」

どこからともなくそんな声が上がリ、それが呼び水となって『ジュース！』コールが広がっていく。

すっかり忘れていたけど、たしかそんな約束があった気がする。

学校にある自動販売機で好きな飲み物をおごってくれると言う。…

…僕は 鷹がいいな。

でも、1つ重大な問題があるはずだ。

「えー、今？」

美星先生が少しだけ戸惑ったように返事をする。

それはそうだ。今美星先生が乗っている跳び箱の中には昴さんがいる。それを放っておくわけには行かないだろう。……諸手を上げている真帆くんやひなたくんは忘れているみたいだけど。

「ま、いーか。よっしゃ、じゃーみんな付いてこいやー！」

先生は跳び箱から降り、『わーい！』という歓声と大在の足音を引き連れて体育館の出口へ…… ってえ！？

「……え、えっ!? 美星先生、あのっ!!!」
「すばっ……この跳び箱はどうするんですか!？」

取り残された智花くんと僕が跳び箱を見ながら戸惑った声を上げる。

『なんとかしてくれ』とでも言いたげな熱視線が、そこから感じられた。

「行こう。トモ、ケイ。しょうがないよ。今、ここに残ったら逆に怪しいし。大丈夫、みーたんの事だからもう逃げ道は確保してあるのよ。……ですよね」

「そ、そうだね。遊んでいるようでしたっけしってるし、大丈夫だろうね」

笑顔で紗季くんが目配せする。そう言われると、そうだろうね。美星せんせい、結構抜け目ないし。少し近づいて隙間から昴さんを見かけると、ウィンク……っばいもので合図を送ってきた。

「え……大丈夫……なんですわね! わかりました! では昴さん、私たちもジューズご馳走になりに行ってくださいね。あとで、ゆっくりとお話させてください。ふふっ」
「そいじゃまたあとでなっ、すばるんっ!!!」

美星先生に遅れないように、僕たちは走って追いかけた。

紗季

『ねえ、みんなは何にする？』

まほまほ

『んー。やっぱりあたしはファ タだな！ グレープで』

ひなた

『おー。ひなはね、にゅーさんいんりょー』

あいら

『乳酸飲料だとマ ーとかかな？ ひなちゃん』

ひなた

『おー。それ。だいすき』

あいら

『おいしいよね。私はどうしようかな……オレンジジュース、かな』

紗季

『2人は？ もう決まった？』

湊 智花

『私はスポーツドリンクかな。慧くんは？』

ケイ

『ちよつと待って…… 鷹か伊 門かで迷ってる……』

紗季

『……どっちも同じでしょ』

「あーもう汗だくだ！ ジュース飲みに行ってる場合じゃなかったぜ！..」

真帆くんを先頭に、引き戸を開いて体育館倉庫の中へと入る。ジュースを貰ってすぐ、僕たちはここにやってきたのだ。もちろん着替えるために。

「あはは。でもなんだかすっきり、ここの常連さんになっちゃったね、私たち。ちょっとかび臭いけど、何より6人でくつろげるし」
「そうだね。でも結構倉庫とかの臭い、僕は結構好きだな。それに静かなのもいい」

智花くんの言葉に同意し、跳び箱やマット、モップなど色々おいてある倉庫を見回す。体育館の中にあり、誰もいないこの倉庫は僕たち女バスの更衣室兼談話室みたいな感じになっていた。

「.....はう、なんだかごめんね、みんな。わたし、やっぱり全然役立たずで.....もっと上手になりたいなあ、バスケ」

溜息混じりに、弱々しく愛莉くんがそう呟いた。

今日の試合を振り返り、眉尻を下げて申し訳なさそうな顔をしている。

「.....違うよ。愛莉がパス出してくれたから、真帆のシュートにた

どり着けたんだよ。……勝てたのは愛莉のおかげだし、みんなのおかげ」

「そうだよ。試合の序盤で、僕のノーサインのビハインドパスを愛莉くんがキャッチして、さらにシュートを決めてくれたから僕はその後にも自由にプレイできたんだ。あそこでとってもらえなかったら、躊躇して伸び伸びとプレイできなかったよ。それも、愛莉くんのお陰さ」

智花くんと共に、僕も思っていたことを素直に、そしてなるべく優しい声で言う。

それを聞き、愛利くんの顔にも笑顔が戻ってきた。

「……えへへ、ありがとう。智花ちゃん、慧くん」

「あー。でも、球技大会も終わっちゃったかー。もう、目標なくなっちゃったなー」

「……おいおい真帆。あんたまさか、また飽きたの？」

「飽きた？ 何が？」

「バスケ。もしかして、辞める気じゃないでしょうね？」

「は？ なんてこんな楽しいこと、辞めなきゃいけないーんだ。……じゃなくて、なんかまた、『コイツに向けて頑張るぜ！』みたいなのが、欲しいかなーって」

……確かに。そういう目標は、人を成長させるのに大いに役立つし、重要だ。

「……なんだ、驚かさないですよ。ふふ、そういうことなら私も賛成かな」

「だろ！？ でちやおつか、あたしたちもっ！」

「……えっ。……う、うんっ！ そうだね。……そのうち、出たいね」

「……………」

どうしたのだろうか？ 智花くんの表情が、一瞬だけ曇った。なに
か都合の悪いことでもあるのだろうか？

でも特に思いつくこともなかったので、放っておくことにした。
試合か……………なら。

「あるよ。大会」

「ええ！？ ほんとかけっちゃん！！」

「とある大手スポーツ店主催のストリートバスケの大会がね。確か
……………近々やる予定だった気がするんだ。こんど調べておくよ」

「本当！？ ありがとう慧くん」

「いえいえ。どういたしまして」

うん。きつと気のせいだ。ストリートバスケだけど、試合が出来る
とわかり智花くんも興奮気味に聞いていた。何の杞憂もないだろ
う。

「あはは、楽しみだなー。もっかんとけっちゃんいるし、きつといき
なり優勝だなっ！」

「ばーか。そこまで甘くはないだろ。……………でも、良い線はいけるか
もね、私たちなら」

「……………はー、それにしてももうすぐ6月だけあって今日は暑いわ。
スパッツもべつとり」

そういって、紗季くんがスパッツを脱ぎだす。それを合図に、み

んなも着替えだした。

「確かに。日本の夏は蒸し暑くてたまらないからね」

「……………」

「同意。ハワイとかのほうが気持ちいい暑さだよな」

「うん、そうだね。気候だけで言えばあっちの方が過ごしやすいね」

「……………」

あれ？　なんだか真帆くん以外のみんなが遠い目で僕たちを見て
いるけど……………どうしたんだろう？

「そ、そういえばひなちゃん。そのパンツ初めて見た。かわいい、
とかげさんだね」

「おー、なんか合宿で一枚無くしたから、買ってもらった」

「……………！！」

「……………無くしたの？　まさか、盗まれたとか無いわよね」

実はそうなんだ。とはとても言えない。

今ここで真実を知っているのは僕だけなのだろうけど……………2人を
貶めるようなことは言いたくないし。

「え、すばるんに？」

「……………ッ！」

「す、昴さんがそんなことするわけ無いじゃない!!」

「……………夏陽でしょ、可能性があるとしたら」

「……………そ、それも無いと思うな。ほら、夜は僕やひなたくん
と練習しててそんな暇なかつたし？」

危ない!!　あらぬ容疑（事実だけど）が夏陽くんにかけられる
ところだった。

幼馴染だからだと言って、何でもかんでも疑ったらいけないと思うよ?! うん!!

「あれ、わたしの普通のブラがない……。どこだろう」

「……もっかん、出してやれ」

「私じゃないもん!」

「じゃあけっちゃん」

「僕でもないからね!? っていうか、無くなるイコール盗まれたと勝手に思うのはいけないと思うな!？」

「あ、あそこ。あのとび箱の置くに何か白いものが見えたような…

…」

紗季くんが差す方向には1つの跳び箱。その後ろに白いものが見えた。

「ええ? どうしてあんなところに入っちゃったんだろう……」

指し示された方へ、愛莉くんが近づいていく。

「……………えっと、紗季ちゃん。この後ろ?」

「うん、それ」

倉庫の中央に位置し、なかなかの存在感を出す跳び箱の後ろからそれを取り出す。

「あ、あった。これこれ」

「きつと風かなんかで飛んじやったんじゃない? 次からはちゃんとかばんの中にしまっとくのよ?」

「はい。ごめんなさい」

跳び箱から離れ、戻ってきた愛莉くんが注意する。着替えた後はそのままみんなで少し雑談した後、帰りのHRに遅れそうになったので急いで教室へと戻った。

だけどみんなとの雑談が終わった後も、僕はあの真ん中にある跳び箱に違和感を感じ続けていた。

……あれって、あの跳び箱って確か昴さんが入ってたやつだよ、ね？

いやいや、さすがにもう入ってないはずだよ。うん。きっと、昴さんが帰る前にここに置いていったに違いない。

そう自分に言い聞かせながらも、みんなと倉庫を後にするまでその跳び箱から視線を外すことは出来なかった。

エピソードが前話、前々話よりも長くなってしまいました……。

これで球技大会は終了です。

次回からは、慧がちらつと言っていたストリートの大会です。

あ、でもその前に小話とかも入れようかな………？

考えておきますー！。

閑話

フリースロー大会その1（前書き）

はいっ。更新です。

今回はお友達（と私が一方的に思っている）であるBeierさんのお話をお借りいたしました！！

ほんのちょこっただけ第3章にもかかわってくるので閑話ですがお付き合いください。

それではどつぞー！

閑話

フリースロー大会その1

「なあ慧。これ見てみるよ」

朝、みんなで朝食を摂っていたところで父さんが一冊の冊子を渡してきた。それは、僕が住んでいる市が発行しているイベント案内みたいなものだ。月に2回発行されるそれには、市の図書館の新着案内や学校行事の紹介。今月市内の病院で生まれた赤ちゃんの紹介なども掲載されている。その中には商店街のイベントなども載っている。父さんが見せてきたのは、その商店街イベントのページの端そこには、

「へえ……“フリースロー大会”か」

ターミナル駅前のアミューズメント施設『オールグリーン』。そこで、地方テレビが主催で色々な施設を利用したイベントが多数行われているらしい。その中で、父さんが見つけたのがフリースロー大会だ。なんでも、一昔前のスポーツ番組を真似て普通のゴールとは違う特別なゴールを使ってやるらしいのだ。大人・中学、高校生・小学生の3つの部があり、それぞれ優勝者に豪華賞品をプレゼントだそうだ。

「事前申し込みは不要、当日に登録で開催日は……ああ、今日なんだね」

「ああ。どうだい？ バスケ部のみんなを誘って行ってみたら」

「うん……うん。そうだね。部活も休みだしみんなを誘ってみるよ」

ケイ

『みんな、いるかい?』

湊 智花

『おはよう。どうしたの?』

紗季

『珍しいわね。ケイからなんて』

ひなた

『おー。おはよー』

あいり

『おはようみんな』

まほまほ

『まだねむいけどきてやったぞ。どした?』

ケイ

『今日、面白いものを見つけてね。バスケの自由参加型のイベントが“オールグリーン”で開催されるらしいけど……もちろん?』

湊 智花

『行くっ!!--!』

あいり

『うんっ』

ひなた

『おー。たのしみー』

まほまほ

『まじまじ!?! そりゃいくっきゃないっしょ!?!...』

紗季

『あら、まだ眠いんじゃないの? 寝ててもいいのよ』

まほまほ

『なんだとてめー』

ケイ

『まあまあ落ち着いて。……じゃあみんな参加でいいね? 詳しいことは直接話すからそうだね……13時にターミナル駅前集合で』

まほまほ

『りょーかい!! いまからあさめしたべてそっこーいく』

紗季

『わかったわ。たのしみにしてる』

ひなた

『おー。またあとでー』

あいり

『えへへ……楽しみだなあ』

ケイ

『あ、そうだ智花くん』

湊 智花

『どうしたの？』

ケイ

『連絡がついたらでいいから昴さんも誘っておいて。高校生も参加できるイベントだから』

湊 智花

『う、うんっ！！ わかった！！ ……えへへ』

ケイ

『それじゃあみんな、また後でね』

そして、約束の13時。僕が集合場所に到着するともうすでに全員集まっていた。

「おはよう。みんな」

「うん。おはよう」

「遅いぞけつちん」

「珍しいわね。時間ギリギリ」

「おー。けいちこくー」

「ひなちゃん、遅れてないから遅刻じゃないよ……」

「おはよう、慧」

昴さんも、すでに到着していたみたいだ。

「おはようございます。すみません遅くなって」

「いいよ。それよりありがとうな、俺も誘ってくれて」

「誘ったのは智花くんですけどね」

「でも、このイベント見つけたのは慧なんだろう？」

「そうだけっちん！ イベントってどんなことやるんだ!？」

キラキラとしたいいい笑顔で、真帆くんが尋ねてきた。本当に、楽しみでしようがないと言う顔だ。

「詳しくは載ってなかったんだけどね、なんでも特別なゴールを使つてのフリースロー大会が開かれるみたいだよ。大人・中学、高校生・小学生の部があつて、優勝者には豪華賞品プレゼントだつて」

「へえ〜……ちなみにどんなの？ 賞品つて」

「詳しくは書いてないね。行ってからの楽しみだつて」

「そうか……それじゃあ行こうか」

『はいっ！』

わくわくと胸を躍らせながら、僕たちは『オールグリーン』を指して歩き始めた。

話には聞いていたけど、『オールグリーン』は結構広いところだった。初めて訪れたのできよきよしっぱなしで、昴さんや智花くんたちからちよつとだけ笑われてしまった。目的地は屋上にあるバスケットコートなので他の場所には寄らなかったけど、今度兄さんたちでも誘って来てみようかな……。

1階からエレベーターに乗り、あっという間に屋上へ。

扉が開いて強い日の光に照らされると同時に、そこには金網に囲まれたバスケットコート。そして、たくさんの観客。

「うわっ。結構いるもんなんだなあ……」

昴さんがそんな感想を漏らすか、ある1点を見つけてこの人だけが参加する人だけじゃないとわかる。

「いや、ほとんどは多分野次馬だと思いますよ」

「え？ 何で？」

「ほら、あそこ……」

僕が指差したのは、総合窓口。そこには少数ながらも列が出来ていた。全員が全員動きやすい格好をしている上、窓口の上に参加申し込み受付と書いてあるので、丸わかりだ。

「じゃあ、早速申し込みするか」

特に何をすると言っわけでもないの、さっさと列に並ぶ。

受付は、驚くほどあっさりと終わった。住所と氏名、年齢を言うだけで終わりだったのだ。吃驚したのは昴さんが受付の人と知り合っていたこと。よくここを利用していらっしゃるしく、いつの間にか顔見知りとなっただけらしい。

参加者の総数は14名。予想以上に集まらなかったらしく、予定を急遽変更して一般の部と少年の部の2つに変更となった。学生が特にいなかったみたい。しかも内7名が僕たち小学生で、ほぼ小学生だけのイベントのような空気になってしまった。

ちなみにあと1人というのが……。

「な、ナツヒっ!?!」

「お、お前らなんで!?!」

「何でって……参加するからに決まってるじゃない」

夏陽くんだった。

男バスもちょうど部活が休みだったらしく、暇つぶしに来たらしい。

だからといってそれで終わるはずもなく。

「なんだお前。賞品目当てに来たのか? いやしいヤツめ。ま、どうせ優勝なんかできないだろうけどな」

「賞品目当てはお前だろ? つーかお前の方が優勝なんかできるか」

「なにいつ!?!」

「なんだよ!?!」

「はいはい。仲がいいのはわかったから静かに。他の人に迷惑よ」

ヒートアップしそうになった所へ、紗季くんが仲裁に入る。

『仲良くなんかないっ!?!』

……………うん。息ピッタリだね。

「さあみなさん、おまつたせいたしました！！ これより今日のメインイベント。フリースロー大会を開催いたしましたっす！！」

僕たちのエントリーが終わり、もう参加者が集まりそうになかったので早めに開会式（のようなもの）が始まった。司会らしいジャージ姿の背の低い女性が人懐っこそうな笑みを浮かべて、マイクを持ってコート中央に立っている。

「司会は私、覚醒未遂でお送りします！！ 参加者のみんなは、親しみをこめて覚醒ちゃんと呼んでねっ！！」

生中継らしい、テレビ局の本格的なカメラに向かってやたらと手を振ったりピースをしている。……本当にタレントさんなのだろうか？

まあでもそのフランクな行動のお陰で、僕たちの緊張が少しほぐれているのも確かだ。

「で、は。さっそく選手の入場ア〜ンド紹介をしましょう！！ まず是一般の部からです」

A Dと思われる人から、選手名簿を渡され、一瞥する。

「では、エントリーナンバー1番……から6番まではぶっちゃけサクラなので以下省略っ」
『ふうおいつ!!』

予定と違うのか、省略されたサクラの人たちに加えてほとんどのスタッフさんがツツコミを入れていた。
って僕たち以外全員サクラ!?

「一般の部ラストはこの方! 現役高校生の長谷川昴さんです!」
「ラストなはずなのに、なんか釈然としないな……」

自分の前の人たちの紹介が全員飛ばされてしまったので、どこか複雑そうな納得がいかなそうな顔をしてコートに入っていく。

「こんにちは初めましてっ。覚醒未遂ですー」
「……ど、どうも」
「昴さんは高校生と言うことで、部活はやってますか?」
「……一応、バスケ同好会を。非公式ですけど」
「もうそんなに堅くならないですまいるすまゝいるっ!!」
「うわっ! ちょっ、やめてくださいっ!!」

少し緊張気味の昴さんの回答はぎこちない、というか少しそっけない。それを見かけた覚醒さん(ちゃん付けしたくない)が昴さんの両頬を掴んで左右へと開いて無理やり笑顔を作らせていた。意外と力が強いのかそれとも昴さんがフェミニストなのかその手を引き離せないでいた。

それはそれとして……。

「もっかん、元気だせよ」

「え？ ど、どうして？」

「あの人も仕事でやってるんだからね……嫉妬して意地悪なことしちゃだめよ？」

「そ、そんなことしないようー!!」

ちよっぴり智花くんがふてくされたような顔をしていたのが気になった。

閑話

フリースロー大会その1（後書き）

まだ続きます!!

あ、言い忘れていましたが慧の技の名前が決定いたしました!!
ご協力して下さった皆様、ありがとうございます。

その内オリキャラ紹介と共に発表しますので、それまでお待ちください。

閑話

フリースロー大会その2（前書き）

はいっ。更新です。

今回は、ちょっとグダッてしまった上にあまり進んでいません。申し訳ないです……。

閑話

フリースロー大会その2

「はいつ。というわけで以上で一般の部参加者の皆さんでしたー」

ようやく開放された昴さんは赤くなった頬をさすり続けていた。やはり結構な力で掴まれていたみたいで少し痛そうだ。

「それでは次は少年の部です！ エントリーナンバー8番！！ 三沢真帆ちゃん」

「はいはい！！」

元気よく片手を上げてコート中央へと駆け寄っていく。

「おおっ！！ 元気いっぱいだねっ！！ いえーいつ！ たあのしんでるかーい！？」

「いえーい！！ 楽しんでるぜー！！」

「……あの2人、似たもの同士ね」
「そうだね」

きつと、凄く気が合うんだろうね。異様にテンションの高い覚醒さんに感化されて真帆くんのテンションもおかしいことになっているみたいで、ノリが一緒だった。

「真帆ちゃんはー、バスケはクラブとかに入ってるの？」

「おう！！ あそこにいる……あのアホ面した男子以外あたしと一緒にバスケット部なんだ」

「……………」

「お、抑えて夏陽くん」

「そうよ、テレビがあるんだからケンカはよくないわ……………」

顔中に暗い陰を落とした夏陽くんが今にも飛び掛りそうになるのを、僕と紗季くんが止めるのが精一杯で、そのあとあの2人の間にどんな会話が繰り広げられていたのかはわからなかった。

「はいっ。いやーいい子でしたね真帆ちゃん。すっすっすっごく私と気が合いそうです!!」

真帆くんを今僕たちがいる場所とコートをはさんだ反対側にある選手控えのベンチに送り、最後にそう締めた。

「続いては、エントリーナンバー9番。永塚紗季ちゃんです!!」
「こんにちは」

さすがはクラス委員長。礼儀正しくお辞儀をしながらの登場。

「情報によると、あの超人気お好み焼き店『なが塚』の看板娘だそうです!!」

「えっ、ちょっとなんで知ってるんですか?」

「芸能人の情報量をナメちゃだめなのですヨッ」

そんな情報必要ないでしょ……。

「では、せっかくなのでテレビに向かって宣伝でもどぞっ!!」
「ま、まあせっかくなので……こ、こほん。テレビをご覧のみなさん。お腹が空いた時、おいしいものが食べたい時は、ぜひ本格お好み焼き屋『なが塚』へご来店ください」

最後にペこりとお辞儀をすると、観客の何人かが頷いているのが見えた。かなりの人気店だと聞いていたけど、本当に有名みたいだね。こんど家族みんなで行ってみよう。

「ま、私はもんじゃ焼き推しなんですけどねっ！」

「ふふ」

「……………にゅふふ」

につこり笑顔で微笑みあう二人だけど、気のせいではなければ何か禍々しいオーラのようなものが2人の間で渦巻き、ところどころ火花を散らしているように見えたような気がした。

「はいつ。紗季ちゃんはとっても礼儀正しいよい子でしたねー」

心がこもってない。

「続いてはエントリーナンバー10番。袴田ひなたちゃんですっ！」

「おー。はい」

「きゃー！ かわいいー！！」

とてとてとひなたくんが走っていくと、手を叩いて迎え入れる。
まだ無垢なる魔性は発動してないはずだけど、もうすっかりメロメロみたいだ。

「おー。よろしくお願いします。覚醒おねーちゃん」

「かーわーいい〜！〜！ ディレクターお持ち帰りしていでしょ！？」

『ダメに決まってる!!』

「でもこんなにかいいんだよっ!! お持ち帰りしたくなるのが人情ってもんでしょー!?!」

「そんな人情捨ててしまえ!!」

もはや参加者の紹介などそっちのけでディレクターと呼ばれた人と覚醒さんの論争が始まった。よくよくカメラのほうを見てみるとADさんがスケッチブックをカメラの目の前に掲げ、そこには『しばらくお待ちください』と書かれていた。スタッフのみなさんも慣れているのかこれ幸いと体をほぐしたり水分補給したりしている。話の中心人物のはずのひなたくんは、ディレクターさんと覚醒さんの顔を行ったり来たり眺めている。

「うう……心苦しいけど仕方が無い。アタイは仕事を選ぶよ……」

……しばしのお別れ。お姉ちゃんを許してね。ひなちゃん」

「おー。よくわからないけどばいばい」

そしてディレクターさんの説得が終わったのか、泣く泣くひなたくんをベンチの方へと押し出す。眼の端に光るものがあつたのは見なかったことにしよう。ただ、ディレクターさんの顔がやり遂げた1人の漢の顔になっていた。

「はいっ。とっっっっっっつてもかいいひなたちゃんでした!」

流石はプロと言うべきか、立ち直りは早かったみたい。マイクを持ち直して本来の仕事へと戻る。

「続いてはエントリーナンバー11番。香椎愛莉ちゃんです!」

「い、こんにちは」

いつもの愛莉くんだったら緊張でガツチガチになり挨拶すらまともにも出来なかったと思う。でも、さっきまでの覚醒さんの行動が功を成していたのかさほど緊張してはいないようだ。

「……………くう、なんてけしからん胸を。私なんか、私なんか……………」

「え、えっと……………あの……………」

「……………」

「……………」

「……………」

自分の胸見、愛莉くんの胸を見た途端にしゃがみこんで落ち込む覚醒さん。愛莉くんも、もの凄く戸惑っているようだ。……………そして、そんな覚醒さんに同情と憐憫、そして同じ人種であることによる喜び等色々詰まった視線を送る3組の眼。誰のだから、無粋なことは聞かないで欲しい。

「おつとごめんねっ！ お姉さんちよつち我を忘れてたよ。愛莉ちゃんも、バスケやってるんだよね。それではこの大会の意気込みをどうぞっ……………」

「えっと、優勝は出来ないと思うけど……………精一杯がんばりますっ」「はいっ。ありがとうございますー！！ それでは控えベンチへどうぞっ」

早口で、若干声が震えていたのは気にしないでおこう。それが優しさというものだ。

「はいっ。ちよっぴり謙虚な愛莉ちゃんでしたー!!」

早口ではないけど、声の震え（やその他色々）は諦めたような感じで、更に紹介は進む。

「続いてはエントリーナンバー12番。湊智花ちゃんですー!!」

「よ、よろしくお願いします」

ちよっぴり緊張気味の智花くんの登場。

「……頑張ろうね智花ちゃんっ！ このご時世むしろ小さい胸のほうが必要が多いらしいからねっ!!」

「えっ？ えっ？ ええっ？」

落ち着けて。智花くん混乱してる。

実はまだ立ち直っていなかったのか、そう言ってまくし立てるように智花くんの手を握って訴える覚醒さん。もちろん智花くんは混乱し、向こう側のベンチでは昴さんを中心にみんながなやら騒動を起こしているけど……放っておこう。

「それでは、この大会での目標をどうぞっ!!」

「えっと……ふ、普段お世話になっている方が見ているので、わかりさせないよう、一生懸命がんばりますっ」

「はいっ。ありがとうございますー!! それではベンチの方へどうぞー」

去っていく智花くんの背中へ、小さくサムズアップしていたのを見たのは恐らく僕だけだろう。

「はいつ。なんとなく私と気が合いそうな湊智花ちゃんでした」

それはきつと気のせいだと思う。

飽きてきたのか、だんだん司会が雑になってきてないかな？

「続いてはエントリーナンバー13番。掛樋〓〓慧……くん？」

「くんでいいです」

「慧くんですー!!」

まあ……予想はしていたけどね。くに慣れすぎたせいで、正直ちゃんで呼ばれるのはものすごく気恥ずかしい。だから、最初にくんで呼んでくれて本当によかった。

「慧くんは、ハーフさんかなっ？」

「ええ。父がアメリカ人です」

「綺麗な金髪ですなー。……女の子、だよね？」

「ええ。一応」

「うんうん。私にはもう希望はないけど、君たちにはまだ未来があるー!! がんばりたまえー!!」

お昼の番組なのにこんなこと言っていていいのだろうか？

ただ、まあ……その声援だけにはありがたく受け取るけど。

「はい。覚醒さんも、がんばってください」

「ありがとう慧くん。それでは、ベンチの方へどうぞー」

そのまま促されてベンチへを歩いていく。

周りからの視線。特に、サクラの中にいる女性の同情めいた視線が凄く、もの凄く気になったけど気にしないことにした。

「はいつ。ボーイッシュな慧くんでしたー!! それではこれより、
フリースロー大会を
」
『ちよつと待ったあー!!』

そこで、静止の音が複数上がる。その中にはスタッフの皆さんだけではなくて、僕や昴さんたちの声も混じっている。なぜなら……。

「俺まだ紹介されてないんだけど!？」

夏陽くんの存在が忘れ去られていたからだ。

「いや〜なんと言っか……もうお腹いっぱいって言うか、ね？」
「なんだよそれ!! そんなこといわれるんだったら嘘でもうっか
り忘れてたっって言われたほうがまだだよ!! っていうかさっきか
らおねーさん司会雑だな!!」
「うるへー!! こっちだって気分が乗らない時くらいあるんじゃない
ーい!!」
「仕事しろよ社会人っ!!」

その意見には大いに賛同する。

さっきからのちよいちよい投げやりな司会はどうかと思ったのだ
が……、

「はいつ。というわけで突っ込みのキレがいい夏陽くんでしたー!
」

こんな風に序盤に見せていた笑顔で再びテンションを上げられる

と、これまでのグダグダ感がこのシーンのための伏線だったのでは
と、思ってしまうのが不思議だ。

閑話

フリースロー大会その2（後書き）

ちなみに私は、もんじゃ焼きよりお好み焼きが好きです。

閑話

フリースロー大会その3（前書き）

はいっ。更新です。

ごめんなさい今回かなり短くなってしまいました……。
今日もう一度更新できたらやりたいと思います。

閑話

フリースロー大会その3

「はいっ、それではっ。今回のフリースロー大会の説明にはいりま
すっ。……それではみなさん。あちらをこらんくだったさい!!」

夏陽くんの紹介も終わり、やっと全員が控えのベンチに座るとす
っかりテンションが回復した覚醒さんが説明に入る。

「……………ここまでの道のり、長かったな。」

覚醒さんが指差す方に目をやると、そこにはバスケットゴールと
思わしきものが上からすっぽりと布をかぶせられていた。ただ、気
になるのは前側のリングに当たる部分が怪しいところだ。ふつうの
リングなら少し前に出るだけで終わりなのだが、今回の出っ張りは
軽く3倍はありそんな雰囲気。

「はいっ。それではあ〜……………ジャンッ!! オオ〜ップリンッ
〜!!」

「うおっ! なんじゃありゃ〜!!」

バツと布が剥がされる。地面から伸びる赤いポール、黒と白の2
色で形成されたボードはいたって普通のもの。だが、布が被さって
いた時点からおかしいと思われていたリングの登場。それで、会場
はどよめきに包まれる。

何より、リングの数がおかしい。普通一個のはずが綺麗に縦3横
3の9個並び、手前……………のリングになることにポール一個分くらい
下がり、見事3段のゴールが出来上がっていた。それが、コート
の両側にたっているのだからなおさら吃驚だ。

心なしか、覚醒さんの顔が恍惚に染まっていたような気がした。

「はいっ。これが今回使用するゴール。そして今まで黙秘されていたイベント名のはっぴよ〜うっ！」

普通にフリースロー大会がイベント名だと思っていた。

他の人たちも、え？ 名前あったの？ とでも言いたそうな顔だ。覚醒さんの合図と共に、スタッフが2名コート中央に現れ、お互いに何か……巻物みたいなものを持っている。そして頷き合つと両端を持つてそれぞれコートエンドラインへと走る。そして巻物が開かれていき、なかなか達筆な文字が現れた。

「名づけてっ！！」 『狙って狙ってナイッシュー！！ スロー D

E ビンゴおっ！！』

そう高々と宣言する。

「ルールはいたって簡単。それぞれ持ち球5個用意されます。ルールは普通のフリースローと全く同じですが、得点の計算はぜんっぜん違うので注意してくださいねー！ その気になる得点の計算は、次のようになってます。1番手前の3つはそれぞれ1点。2段目はそれぞれ2点。そして3段目は3点となっております。え？ それのどこがビンゴかって？ むふー慌てない慌てない。それがこのゲームのキーポイントなのですっ！！」

誰も慌ててはいないが、どこかの変な通信販売のような喋りを節々に入れて説明は続く。

「縦・横・斜めのどれかで列を作ると、ななーんとポイントが倍っ！ 例えば、1段目の3つすべてにボールを入れると通常1+1+

1で3点。ですが、ビンゴボーナスでそれが倍！！ 6点になると言うことです！！ 理解できましたかな？ はい、質問はないですかー！？」

キヨロキヨロと辺りを見回すも、手を上げるような人はいない。

……うん。よく出来たルールだと思う。シンプルだけどそれなりに逆転措置もとられているし、これなら結構楽しめそうだ。

「はいっ。それでは、早速始めましょうーう！！ しゅっっビンゴオー！！」

そして不可解な掛け声でゲームスタート。ちなみに、その掛け声に乗った人間はいなかった。

「覚醒ちゃんの、ちょっと手抜きバスケット講座ー！！」

「はいっ。ここでは作中に登場する覚醒ちゃんがちょっと手抜きのバスケット解説をしまっすー！！ 全くバスケを知らない人用といつても過言ではないレベルなので、『ハッ。テメエの説明なんて聞かなくてもわかるんだよ。ペッ』って人は飛ばしても ってなんだと態度が悪いぞきさまあー！！」

（中略）

「それ以外にも、私のちょっとした考察や明日から使える小技・小ネタなんかも乗せることもあるので、暇な人は見てってね〜!!」

「はいっ。それでは今回の講座はフリースローについて、簡単な説明をしたいと思います。フリースローとは……まあこの辺はいいかようするにファウルを受けた攻撃側が誰にも邪魔されずにシュート打てることです。ゴールの前にある円、「フリースローサークル」を2つに分けるようにある【フリースローライン】の後ろからシュートを打ちます。ここで勘違いされがちですが、後ろ半分のフリースローサークルとフリースローラインに囲まれている範囲内なら“どこからでも”打っていいのです。別に必ずラインのすぐ後ろ中央に立ってシュートを打たなければならないと言うルールはどこにもありません。ただ、そこからのシュートが1番狙いやすいからという理由だけなんですな〜」

「でも、今回のゲームのゴールは普通じゃありません!! さあ、慧くんはこのルールを上手く利用して優勝狙えるのでしょうか!？」

「かみんぐすーん!!」

閑話

フリースロー大会その3（後書き）

このコーナーは、反応がよければ今後ちよくちよく入れようかと。

試験期間中ではございます……。

閑話

フリースロー大会その4（終）（前書き）

はいっ。更新です。

燃え尽きました……真っ白に（いろんな意味で）。

長い割りに内容が薄いかも知れませんが、楽しんでいただければと思います。

「よっしゃ！　じゃーあたしからだな。今までのあたしと、今日のあたしは違う！　きひひ、いきなり高得点だしてやるっ！！」

そう意気込みながら真帆くんがずんずんとコートの中を歩いていく。少年の部では1番早い番号だから、真帆くんからなのだ。そうなる順番は真帆くん、紗季くん、ひなたくん、愛莉くん、智花くん、僕、夏陽くんとなる。

途中で覚醒さんからボールを受け取り、ドリブルをついてフリースローサークルに足を踏み入れる。

おお……なんだか本当に雰囲気が違う！！　集中しているようで、真帆くんの目つきや表情までいつもとは比べ物にならないほどいいものになっているこれは本当に……

「あ、その前にちょっと質問があるんですけど」

「だー！！　なんだよサキ！！　意気込んでるところに声出すなよ！　力抜けるじゃんかー！！」

かと思いきや、紗季くんが覚醒さんに話しかけたので集中力が切れてしまった。

「しょ、しょうがないでしょ！！　質問があつたんだから……あんたにも関係あることかも知れないでしょ！？」

「どつたの紗季ちゃん」

「あのゴールネット……おかしくないですか？」

そういわれて改めてじっくりとゴールを見る。

よくよく見てみると普通のネットよりも短いし、何より狭い。…

…いや、と言つよりもむしろ、

「縫い合わせてある?」

「その通り!! あのネットは通過せずに、そのままそこに残る仕組みになつて居るのです!!」

「なんでそんなわざわざ手の込んだことを……」

「ポイント集計の時に楽だからサ!!」

呆れて力の抜けた声を覚醒さんにかけて、爽やかな笑顔 + 綺麗なサムズアップでなんともこの人らしいことを言つてのけた。

「じゃあ、問題もすっきりしたところで真帆くんやってみよー!!」
「……たく、どうでもいいことで集中力きらしまつたじゃんか」

ぶつくさ紗季くんに文句を言いながら、フリースローサークルの中へ入った。

ラインのすぐ後ろに立つと、2、3回両手でボールを付き頭の上で構える。狙いを絞つてシュートを打つとボールは綺麗な弧を描きゴールへ吸い込まれる。

「入りましたっ!! 真ん中もど真ん中!! まずは2点獲得です
!!!」

「やっぱりビンゴと言つたらまず真ん中だろー!!」

「すごい真帆ちゃんっ!!」

「おー。真帆、ナイスシュート」

狙い通りにシュートが入ったのか、とても嬉しそうにガッツポーズをキメる真帆くん。

「いきなりアレを決めるか……やっぱり真帆くんの勝負強さには脱

帽だね」

「えっ、どうして？ 真ん中なんて1番楽なんじゃない？ いつもと同じ場所だし」

僕の呟きが聞こえたのか、紗季くんが話しかけてきた。

「いや、確かに高さは同じなんだけどね。距離が違うんだ。……ほら、3段目があるせいで少し前に出てるんだよ」

そう言っつてリングを指差す。他のみんなも僕の考察に耳を傾けていた。

「真ん中で考えると、3段目は距離は同じだけど高い。2段目は高さは同じだけど近い。1段目は高さは低いし近いから慣れてる人……智花くんや昴さん、そして僕なんかにはもっとも難しいと言えるね。意外と難しそうだ、このゲームは」

「ふーん……じゃあどこを狙っていけばいいと考えてるわけ？」

「そうだね。僕の考えでは」

「コラけっちゃん！！ みんなにはっかりヒント出してんじゃねー！！」

おっと。真帆くんから怒られてしまった。

ゲームが始まる前、このゲームはみんなとの対決だと言う話になった。自分の力だけで、どこまでやれることが出来るか。それを知るために紗季くんと真帆くんが提案し、それにみんなも乗ったのだ。ちなみに夏陽くんは強制参加。

だから、ここにいるみんなにだけヒントをあげるのはルール違反だったかな？

「……そういうわけみたいだから、これ以上は自分でどうぞ？」

「くっ……もう少して聞き出せそうだったのに」

最初から、僕たちの考えを聞くつもりだったみたいだね。心なしか、智花くんも少し肩を落としているように見えたが……きつと気のせいだろう。

「よーし。このまま全部決めるぜっ!!」

そう言っって意気込んでみたものの、やはり経験不足が足を引っ張っているようで真帆くんの勝負強さは十分には発揮されなかった。2投目ははずれ、続く3投目は狙った3段目真ん中のリングに弾かれ偶然2段目右へ。4投目も偶然1段目の右へと収まった。そして、これが最後のチャンス。ビンゴが出せる状態なので、緊張が走る。放たれたボールは……。

「あー残念っ!!外れてしまいましたっ!!」

「だー!!くっそー!!」

「真帆ちゃんの得点は、合計2+2+1で5点ですっ!!最初にしてはなかなかの高得点だったのではないのでしょうか。はいっ。真帆ちゃん。ご苦労さまでしたー!!」

悔しそうな表情ながらも、真帆くんの健闘に観客や覚醒さんから拍手が起こる。

「残念だったわね。ま、仇くらいはとってあげるわ」

「紗季が邪魔するから悪いんだろっ!!」

「何言ってんのよ。あれだけで途切れるなんて集中力が足りない証拠よ。……じゃあ行っってくるわね」

「くっそー!!」

真帆くんの恨みにも似た声を背に受け、威風堂々と紗季くんがコートへ歩みだす。

「はいっ!! 次は紗季ちゃんですねっ。それでは……どうぞっ」
「……ふう」

覚醒さんからボールを受け取り、真帆くんと同じように両手で何度かボールを付き、頭の上で構える。真帆くと違う点はその構えが両手打ちだと言うことだ。

「……ぶっ……ぶっぶっぶっ……」
「……な、何してるんだい？」
「……呪い。この前漫画で見た」

どこかの宇宙最強異星人のように、両手を合わせた状態から外へと開き、その両掌を紗季くんに向けてぶつぶつと呟いている。耳を澄ませて聞いていると、「はずせ……はずせ……」とひたすら呟いている。お疲れ様です。

「……ああ!」

その想いが届いたのか、十分にリラックスしてから打ったはずの紗季くんのシュートは、両手からすっぽ抜けて1段目にも届かないエアボール【リングに届かないシュートのこと。非常に格好悪い】。

「ぎゃはははははは!! あたしの呪いが効いた!! へっへーんだ。なんだよサ・キ。お前のほうが集中力ないんじゃないのか？」
「くっ……このバカ真帆……」

続く2投目以降も、最初のエアールが精神的に効いたのかぱつとしない結果に終わり得点は2点のみ。

「屈辱だわ……この私が……」

「まあその……がんばったと思うよ」

ベンチに戻ってくるなり落ち込む紗季くんを慰めるのに精一杯だったけど。

続いてひなたくん、愛莉くんと続いたのだが2人ともあの距離のシュート練習はしていなかったのでもいい結果とは言えなかった。それでも、2人とも1本ずつシュートを決めていたのでご満悦だった。

「はいっ。つづいては智花ちゃんの番です。どぞっ！」

「よ、よろしくお願いしますっ」

「がんばれもつかん！！ あたしらの仇をビンゴで討ってくれ！！」

「頼むわよトモ！！」

「おー。がんばれともかー」

「と、智花ちゃんしっかり！！」

みんなの声援も自然と大きくなる。

僕も声をかけようとしたが、ふと隣にいる夏陽くんが気になって声をかけてみた。

「どうかしたかい？　なんだか盛り上がり欠けているみたいだけど」

「いや……なんかこういうの慣れねーなって思っ」

「はは。確かに夏陽くんはこういうバスケットでのお祭り行事みた

いな の得意じゃなさそうだね」

「逆にお前は生き生きしてんのな」

「まあね。ストリート出身だしね」

そこで会話を打ち切り、視線は智花くんへ。

すでにボールを両手に持ち、頭へと掲げてシュート体勢。膝を曲げ、一気に飛んでからスナップの利かせた右手からボールが放たれる。相変わらずの綺麗なシュートフォームで、観客を魅了していた。

「おおっ！！ 智花ちゃんの放ったシュート。3段目ど真ん中へ入りました！！」

ペースを崩さないように、実況しながらもすぐに覚醒さんが智花くん にボールを渡す。

再び静かにボールについて集中し、シュートを放つ。綺麗な軌道を描いて、それは2段目真ん中へすっぽりと入る。3投目は2段目のゴールリングに当たったかと思うと弾かれて更に一段下のこれまたど真ん中のリングへと納められた。

「おおっ。これでビンゴ確定です！！ この状態だけでも1+2+3で6。その倍で12点！！」

「なるほど。考えたね」

「ん？」

「どういうこと？」

今後は紗季くんだけではなく夏陽くんも反応していた。

「1番最初に真ん中の奥を狙っていけば、徐々に力を弱めるだけですむ。力が少しくらい強くなってもその奥のリングに弾かれて上手い具合に入るっていう寸法だね」

「はあ……流石トモね。やっぱり考えてやってるのね」

とは言っても、その“徐々に力を弱めるだけ”が難しいんだけどね。

3本連続で入れても尚、余裕を見せずにいい緊張感を保ったまま4投目に入る。まっすぐ3段目右へ放たれたシュートだが、そのシュートはリングに嫌われてしまい得点には至らず。これでダブルビシゴの道は絶たれてしまった。5投目も諦めずにシュートを打つがリングに弾かれて入った場所は1段目左。それでも合計得点は13点だ!!

「何と智花ちゃん!! 今までトップだった真帆ちゃんと大きく差をつけて13点獲得!! 今ちょうど終わった一般の部優勝者長谷川さんの24点に続く大記録です!!」

「すばるん24点!?!」

「さすが長谷川さんねっ!」

「おー。おにーちゃんすごい」

「わ、私の12倍……」

凄いな昴さん。一般の部は反対側のコートでやっていたのだが、もう終わったみたいだね。24点ってことは、やっぱり一本も外さなかったってことだろうね。流石は僕たちのコートだ。

「……………」

ふふ。どうやらそれを聞いて夏陽くんにも火がついたようだ。キツと昴さんを睨んでかなり意識しているようす。

「夏陽くん。どうだい? 僕は後でもいいから先にやってもいいよ

「？」

「えっ？ ……いいのか？」

「うん。どうぞ。今のモチベーションでやったほうが夏陽くん、いい記録残せそうだしね」

そういうと、重くベンチから腰を上げてコートの中に入っていく。覚醒さんも順番変更には特に問題はなかったみたいで、夏陽くんと2、3言話したただけですぐに終わった。

その気になる結果は……

「うん、まあ……そういうこともあると思うよ？」

「うるせえ下手な慰めすんな……」

力が入りすぎたのと、リングに嫌われたのとで一本もシュートを決めることが出来なかった。

「……………さて、最後は僕の番だね」

「ケイ。あんだだけ色々考察してるんだから作戦はあるんでしょ？」

「うん。まあね」

「どんなの！？ 教えて教えて！！」

「まあ……見てのお楽しみ、かな」

そう言って覚醒さんへと近づいていく。

「やっほ、慧くん。調子はどうかかな？」

「すごくぶる順調ですね」

「もう君が最後だけかどうか？ みんなの視線が慧くんに集まるけど緊張のほどは？」

そうか……一般の部が終わったから、今まで分散されていた視線が一気に集まるんだ。もしかしたら、さっきの夏陽くんの失敗もこのせいかも知れないね。

でもまあ、僕には関係ないけど。

「むしろ集まったほうがやる気出ますね。僕のバスケットはパフォーマンスなんです」

「おおっ！？ それは楽しみだねっ。それではどうぞっ！！」

ボールを渡され、ドリブルをつきながらフリースローサークルに一步足を踏み入れた瞬間。ドリブルしていたボールが僕の右手に触れると同時に手の平を返してそのまま腕の力だけで下手投げ。ボールは激しく回転しながら飛んで行き、軌道はブレることなく3段目真ん中に吸い込まれた。しゅるっつと摩擦音が鳴り、ボールの回転が止まる。

『うおおおおおおおおおおおおおお！！』

「凄い凄い凄い！！ まさかの慧くん、アンダースローですっ！！」

私、こんなシュート初めて見ました！！」

「出た！！ けっちゃん十八番のアンダーハンドシュート！！ ……
だっけ？」

「うん。そうだね」

割れるような観客の歓声の後、興奮した覚醒さんのコメントが入る。あだ名をつけるのが好きだという真帆くんに依頼して付けて貰ったこのシュートの名前は“アンダーハンドシュート”……ではなく、もっと長いものだった。あまりに長すぎたのでカットし、現在に至ったのは懐かしい思い出だ。

観客の大きい歓声によってテンションが大きく上がった僕は2投目はビハインドシュート。3投目はドリブルしてから溜めを作らず、ノータイムでアーチの低い、これまた腕の力だけで打つ“トリックショット”で決めて真ん中の縦に列を作った。

「おおつと!! これで慧くんも、すでに12点獲得!! 2点以上をとれば少年の部優勝です!! さて、これからどうなるのでしょうかっ!!」

歓声こそが、長くパフォーマンスとしてのバスケットをしてきた僕に大きな力を与えてくれる。今日は想像以上に調子もいい。次もこの調子でいければいいけど……。

確かに、13点の智花くんを抜いて優勝するにはあと2点。持ち球は2個なので難しい数字じゃない。だけど、狙うのはそこじゃない。くたやっぱり……

「いけけっちゃん!! すばるん抜いちゃえ!!」

「そうよ! 今のケイならやれるわ!!」

「おー。めざせ完全優勝」

みんなも応援してくれているし、やっぱり目指すなら完全優勝。

そこで、暖めていた案を実行することにする。ボールを持ってフリースローサークルに入ると、フリースローラインの前に立つ。ただし、立つ場所は真ん中じゃなくてラインの右端、サークルの境界のすぐ内側だ。そこからフェイダウェイシュートを打って、それは

3段目右に納められた。

「ええっ！？ それってありなのか！？」

夏陽くんが驚いたように声を上げる。

「それがアリなんですよねー！！」

だが、応えたのは僕ではなく予想外な人だった。

「ルールではフリースローラインとサークルで出来た境界線を踏んだ状態、もしくはその外にいる時にシュートを打ってはいけないだけだから、違反ではありませんっせーん！！」

「覚醒さんの言うとおりだよ。ルールはね、守るんじゃないって破らないようにすればいいだけなんだよ」

「けっこう台詞が悪役くさいぞー」

その意見に関しては無視させていただこう。

さて、話はそれてしまったけど、これで今の得点は15点。昴さんに勝つには3段目にもう1つのこった3ポイントを獲得し、2回目のビンゴゴースを貰うことが最低条件であり、最大条件だ。覚醒さんにボールを貰い、今度はさっきを逆側に立つ。

周りは緊張の一瞬に、さっきまでの熱にうなされた歓声が嘘のように静まり返り僕だけを見ている。周りと同じように、熱が引いて冷静になった頭で放たれたシュートは……………。

くガールズトークく

まほまほ

『いやーほんとおもしろかったな、けっちゃん』

紗季

『こら、そんなこと言わないの。そりゃ確かに……驚きはしたけど』

湊 智花

『でも本当にびっくりしたよね。今まであんなに楽しそうに笑ってたのに、急に赤くなって逃げ出すんだもん』

ケイ

『うっ……そんなに意地悪しないでくれないかい。思い出しただけでも恥ずかしい……』

ひなた

『おー？ けい、まだほっぺまっかつか』

あいり

『えへへ。慧くんも、恥ずかしがりやなんだね』

ケイ

『いつつもテンションが上がると妙に気が大きくなっちゃって。テレビの前であんな……うわあああ！！』

紗季

『こんあ取り乱すところも初めて見たわ……』

まほまほ

『まあでも、惜しかったな。すばるんの悔しがる顔見てみたかったけどな……！』

湊 智花

『でも……！ やっぱり昴さんは凄いやねっ……！ 覚醒ちゃんも、予想以上の点数に大満足だって言ってたし……！』

紗季

『ほほーっ。なんだか嬉しそうねえ……』

湊 智花

『そ、そんなことないよ！？』

まほまほ

『そんなことはおいといて、早くフードコート行こうよー！ー！』

ケイ

『そ、そうだねー！ 過ぎたことを悔やんでも仕方ない。こうなったら満足いくまで食べてやるー！』

紗季

『ふふ、あんまりはしゃぎすぎないようにね』

ひなた

『おー。ひなはね、アイスいっぱい食べる』

あいり

『私は何にしようかな』

湊 智花

『でも優勝賞品も太っ腹だね』

ケイ

『そうだね。今日いっぱい使えるフードコートの食べ放題券。さっそく使わせてもらおう』

閑話

フリースロー大会その4（終）（後書き）

実は最初考えいた時は、この後に覚醒さんと昴との対決を予定していたのですが、思ったよりも長くなってしまい無理やりこれで押さえた感じです。

つけたしするかどうかは今の所未定です。

はいっ。更新です。

今更ながら、この作品のPVが5万を超えました！！

さらにもう少しで6万に届きそうな勢いでございます。

うれしいですねえ……………。

拙く醜い文章ですが、これからも応援のほどよろしくお願いいたします。

始まりは、唐突だった。

いつも通り朝起きて、いつも通り朝食を作り、いつも通り父さんたちを起こし、いつも通り登校してきたんだ。いつも通りではなかったのは……そう。登校途中で智花さんと合流した辺りからだった。

僕の家は、学校からわりと近い。バスや電車なんかは使わない距離だ。だけど、大きな通りから少し離れたところにある。学校に行く時はまるで川の支流が本流に合流するかのように、わき道から急に人通りの多い、言ってしまうえば慧心学園に通う生徒の大半が通る道へと合流する。今日は珍しいことに、その通りに出たところではつたりと智花さんと出くわした。

「おはよう。智花くん」

「おはよう。慧くん」

互いに挨拶を交わしたところで出るのはやはり昨日の球技大会の話。互いの称賛と、そして反省。1人ではできなかったことを、歩きながら。あれはいい、これはダメと真剣に話し合う。

「あ、そういえば昨日言ってたストリートの大会なんだけど」

「えっ？ もうわかったの？」

そのうち話題は変わり、昨日帰ってから調べたストリートバスケット大会の話へ。

「うん。調べてみたんだけどね……………」

「ただとそこで、少し違和感があった。いや、違和感と言っにははつきりしすぎる。かなり熱い、視線を感じたんだ。不審に思って勢いよく後ろを振り返っってみると、

『 ツー! 』

「……………なにか、用かい？」

3つの、驚いたような顔が並んでいた。

「ぎゃはははは!! けっちんモッテモテだなあ!!」

「こら真帆! 笑いすぎだろ!!」

「でも、わかる気がするなあ。昨日の慧くん、かつこよかったもん」

「おー。このかほうものっ」

「で、でも大丈夫？」

「正直、凄く複雑な気分だよ……………」

教室で朝の一件を話すと、案の定真帆くんには大笑いされ、紗季くんには同情され、愛莉くんには同意され、ひなたくんにはからかわれ(?)た。

たった少しの時間をとられただけなのに、燃料切れを起こしたよ

うに教室の自分の席にたどりついたとたんについた僕。どうしたのだと集まる真帆くんたちに、智花くんが理由を説明した。

『私たちの、お姉さまになってください!!』

制服のリボンの色から、3人の少女は5年生だ。彼女たちの第一声は、そんな突拍子も無いものだった。

「……………は？」

だから、反応が遅れたとしても攻められることは無いだろう。突然の申し出に混乱していると、何故か顔を赤らめた3人が口を開いた。

「私たち、昨日の球技大会を拝見させていただきました!!」

「昨日の慧お姉さまのすばらしいボール捌きっ!! 的確な判断力

!!」

「今でも目を閉じれば甦ります……………あの見事なパスの連発……………」

「え、ええつと？」

頬に手を当て、もしくは胸の前で両手を握り、恥じらいながらも語る。「将来の夢は、お嫁さんですっ」とでも言いそうなピュアで恥ずかしげな表情でなんて事を言っただこの子たちはっ!!

「それで私たちは思ったのです」

「私たちの思い描いている理想のお姉さま……………」

「凛々しく強い……そして優しい女性」

『それは、慧さんしかいないっていうことを！！』

その瞬間、僕は力の限りを尽くして逃げ出したのだ。

そして、現在に至る。

「お姉さまって何……？ 確かにL・Aでも何度か女子に告白されたこともあったけどこんなことは初めてだよ………」

「それはそれで凄い体験してきてるのね。あなた」

もちろんすべて丁重にお断りしたけど。でも、あんなにまっすぐキラキラした眼を向けられるとむず痒くなってくると言うか。そもそも、僕はそんなキャラじゃない。

「でも確かに。慧くんは“お姉さま”って感じじゃないよね」

「……ほんっとにそう思ってるかい？」

「ほ、本当だよ………」

「そうね。何人もの女子を侍らせる感じじゃないわね。どっちかって言うと、お世話してる？」

「お姉さまじゃなくて、お姉さん、だね」

「それについては反論できないかも………」

お世話をしていると言う点では、同意せざるをえない。家では家政婦の如く家事に勤しんでいるからねえ。自慢じゃないけど、お世話するスキルなら結構高めだと思う。

そんな風なことを思っていると、

『お姉さまあつー!!』

「うわっ!?!」

教室のドアが音を立てて開き、例の3人の女の子が現れた。机の合間を縫い、ずんずんとこちらに歩み寄ってくるのを呆然と眺めるしかなかった。……何たる行動力。

「ひどいでお姉さまっ」

「急に走り出すなんて」

「でも、走る姿も凛々しかったです……」

3人3様で話しかけてきた。助けを求めて周りを見回してみるけど……。

「……………」

面倒だから関わり合いたくないとでもいいたそうにことごとく視線を逸らされた。

くう、みんなは僕の味方じゃなかったのか!!

「ええつとね……………」

『はいっ!?!』

くっ…………こんなに純真な瞳を向けられると言いたいことも言えなくなってしまう。でも、これだけは言っておかないと。

「その、お姉さまっていうのやめてもらいたいんだ」

『えっ……………』

「そもそも僕はそんな柄じゃない。第一、僕たちは今日が初対面だ。お互いに何も知り合わないのにそう言うのは……よくないと思うな」

「理多りたっ!？」

「すみませんお姉さま! 失礼します!!」

理多と呼ばれた右側の女の子が走り去ると、それを追って2人も教室から出ていった。

「ケイ……ちょっと言い過ぎたんじゃない？」

「そうだね。反省してる」

去り際の、悲しそうな表情が忘れられなかった。

その後の授業も、イマイチ集中出来なかった。頭をよぎるのはあの子たち……理多と呼ばれた子の去り際の顔とそして彼女を追っていった子たちの顔。……どうも気になると言うか、どこかで見たことがあると思うんだよなあ……。頭の中にすっきりしないものを抱えてしまい、気持ちよく授業を受けることが出来ない。

少し気になってしまったので、休み時間になるとみんなとの話も断り、5年生の教室へ。理由は今朝の3人について調べるためだ。

1人は水無瀬理沙みなせ りさ。成績は中の上で、クラス委員でみんなのまとめ役だとか。とは言ってもハメを外しすぎることが多く、先生に怒られることも多々あるらしい。栗色の髪をショートカットにし、頭

の左上の部分だけ一房髪止めでまとめているのが特徴。

2人目は安久原理亜。成績は下の下。周りからおバカ認定されているほどの天然な子だが、活発な性格でクラスの中心人物。茶色い髪を頭の右側でツーテールにした動きやすい髪型が特徴。

3人目が、智囊理多。成績は上位だけど無口で会話をする場面があまりない。クラスでは目立たないわけではないが、自分から行動することが少ないとか。黒髪をセミロングに伸ばした、ちょっと不思議雰囲気の特徴。

タイプが全く違う3人だけど、とても仲がいいらしい。幼馴染みなんだそう。放課後や休日は、よく3人のうち誰かの家で遊んで、お泊まりなんかもたまにするらしい……。

「ざっとこんなものかな」

「ケイ……あなた探偵にでもなるつもり？」

「すごいね。たった3回の休み時間でこれだけ調べてくるなんて」

「なんだか、昨日の球技大会でちょっとした有名人になったみたいだね……話しかけただけで喜んで教えてくれたよ」

「……あなたも苦労するわね」

そう思っただったら協力してほしい。

「ただ気になるのが、なぜ“お姉さま”になつて欲しいかなんだよねえ……」

「けっこうに惚れた」

「……だったら、Aの時みたく告白なりしてくればいいのに……。それなら何とかあらしい方も身に付いてるし……」

「そういう意味じゃないでしょ……。大方、あなたに憧れたんでしょ。ほら、ケイ自身言ってたじゃない。“パフォーマンスのためのバスケット”って。ファンがついたとでも思っていればいいのよ」
「そうだったらいんだけど……」

やっぱり何か、ひっかかるんだよなあ。

正直僕がこんなに後に引いているなんて驚いている。転校が多かったせいか、人間関係に結構ドライなところがあつたはずの僕が初対面の女の子のことが頭から離れないなんて。

……ふふ、智花くんや真帆くん。紗季くん、愛莉くんとひなたくんのおかげなのかもしれない。こんなに他の人と接し続けることになかなかつたからね。落ち着きはしないけど、なんだか悪い気はしなかった。

「ま、悩んでいても仕方ないか」

そうやって立ち上がりかけたところで、

『お姉さまっ！！』

盛大にすっ転んだ。

「……ま、また来たん……。だね」

「もちろんですっ！ お姉さま！！」

「私たちは挫けません！！」

「先ほどは取り乱してすみませんでした……」

「でもっ、お姉さまのおっしゃる言葉はもっともだと思いました！

「！」

「なので、もしよろしければ放課後……」

せーの、と声を合わせ。

『私たちと、デートしてください……！』

泣いてもいいでしょうか……。

オマケ

オリキャラ紹介(前書き)

はいつ。ここではこの章から登場するオリジナルキャラクターを紹介
します。

オマケ

オリキャラ紹介

プロフィール

【名前】 覚醒未遂 かくせいみすい 本名：角田美澄 かくたみすみ

【生年月日】 12 / 29

【血液型】 O

【身長】 166cm

【仕事】 タレント

【学業】 もっとがんばりましょう

【特技】 会話を盛り上げること。バスケツト

【好物】 きつねうどん（インスタントはNG）

【初登場】 閑話 フリースロー大会その2

【趣味】 スポーツゲーム、バスケ

【弱点】 学業、雨の日に右足首が痛くなる

【座右の銘】 そうだ、京都行こう（深い意味は無い）

【人物】

オールグリーンでのイベントで出会った芸能人。テンションが高く親しみやすいキャラがウケているんな番組に出ているらしい。ちなみに言うとなれば作っているわけではなく素だという噂も立っている。元々は全日本バスケの選手であったが、右足に大怪我を負ってしまったため引退。前々から出ていたスポーツバラエティ番組を中心に芸能界へと転進し、それなりに楽しくやっている。本気の試合は出来ないのだが、遊び程度ならバスケをやっても大丈夫なのでたまに彼女がシュートを打っているところがテレビで見ることがある。今までバスケ一直線でやってきたため頭が悪い。クイズ番組でもおバカキャラとして招かれることもあるそうだ。オールグリーンで見たかけた高校生……長谷川昂もバスケバカだと知り、自分の体験上から勉強もすっかりやったほうが良いと忠告したのはまた別の話。イ

ンスタント食品は味が濃すぎるので極度に嫌い、自炊はお手の物。だが基本薄味。「はいっ」が口癖で、ひっそりと流行語大賞を狙っている。実は作者がノリで作っただけのキャラだったが、友人に意外とウケたのでそのまま使い続けている。

プロフィール

- 【名前】水無瀬理沙みなせりさ
- 【生年月日】9 / 3
- 【血液型】A
- 【身長】147cm
- 【クラス】5 - D
- 【所属係】クラス委員長
- 【学業】良
- 【特技】大きな声を出すこと（威圧感的な）。
- 【好物】ナポリタン
- 【初登場】ストリート篇 プロローグ
- 【趣味】B級映画鑑賞、バスケット
- 【弱点】高所恐怖症
- 【座右の銘】激しく跳躍するよりも、地べたを踏みしめるほうがいい
- 【人物】

お姉さま同盟会員No.1（ストリート篇現在非公認）。クラス委員長で責任感が強いと思われがちだが、実は一緒になってみんなと遊ぶタイプ。普段の休み時間等では率先して遊びだすが授業や行事になるとしつかりとしたクラスのリーダーになるので教師からの信頼も厚く、また友人からの評判もいい。ただし、遠足等になるとテンションが上がってハメを外してしまい、みんなと一緒に先生に怒られることもしばしば。幼馴染の2人を「理亜」「理多」と呼び、大の仲良し。バスケは学校外のクラブチームに所属し、それなりに実力もあるらしい。そのリーダー性から次期キャプテン候補として名が挙がっている。個人技よりも理亜や理多との連携プレーが得意で、試合では一緒に出ている。ポジションはF。

プロフィール

【名前】安久原理亜あんくみりあ

【生年月日】9 / 4

【血液型】B

【身長】160cm

【クラス】5 - D

【所属係】掲示係

【学業】努力は認めます

【特技】 いたずら

【好物】 ハンバーグ

【初登場】 ストリート篇 プロローグ

【趣味】 いたずら、近所のアスレチック施設で遊ぶこと、バスケット

【弱点】 学業、じっとしていること

【座右の銘】 思い立ったら即行動！

【人物】

お姉さま同盟会員No.2（ストリート篇現在非公認）。覚醒ちゃんほどではないが、一緒にいて周りが疲れるほどのハイテンション小学生。だが少々おバカで、授業で手を上げた方がいいが答えがわからないといった展開が入学当初から何度もあったため、教師の間ではなるべく彼女を指名しないことにするのが暗黙の了解となっている。ただやる気だけはあるので教師も憎めない。男女隔たりなく接し、休み時間になれば理沙と一緒に率先して遊びに繰り出す。時間を忘れて遊び呆けてしまうことも多く、そんな時は理沙のありがとうい拳骨で渋々教室へと戻っていく。幼馴染の2人を『さっちゃん』『たむたむ』と呼び、大の仲良し。同じく学校外のクラブチームに所属しており、身長も相まって期待の星。個人技もできるのだが、やはり幼馴染の2人との連携が1番。ポジションはC。

【名前】 智囊理多ちじうりた

【生年月日】 9 / 5

【血液型】 A B

【身長】 142cm

【クラス】 5 - D

【所属係】 掲示係

【学業】 超優良

【特技】 速読、UFOキャッチャー

【好物】 どら焼き

【初登場】 ストリート篇 プロローグ

【趣味】 読書、バスケ

【弱点】 好意を寄せたり、尊敬する人に拒絶されること

【座右の銘】 読めばあなたの知層になる

【人物】

お姉さま同盟会員No.3（ストリート篇現在非公認）。教室では本ばかり読んでいる文学少女。かといって人見知りであったり暗い性格なわけでもなく、遊ぶときはみんなと一緒に遊ぶ。基本無口なのだが、好きなものの話題になると途端に饒舌になり、周りを引かせることが過去にあった。学業は常に上位なのだが、教師に対して「授業がつまらない。わかりづらい」「その説明間違ってますよ？ 給料貰ってるんですからしつかりしてください」等毒を吐くことは珍しくなく、プライドをスタスタにされた教師からの人望は低い。無口で無愛想、更に毒舌。一見人間関係に関してドライに見えるが人一倍臆病な性格の裏返しで、好意を寄せる相手に拒絶されるのが怖い。幼馴染の2人を『理沙ちゃん』『理亜ちゃん』と呼び、大の仲良し。同じく学校外のクラブチームに所属している。スナイパーの異名を持ち、（小学生では存在しないが）3Pラインからのシュートも7割の成功率を誇る。でもやはり、1番力を発揮するのは幼馴染2人とのチームプレイ。ポジションはSG。

s c e n e . 1 初デート自宅の場合(前書き)

はいっ。更新です。

前回のプロローグから出した新キャラ3人ですが、正直反応が不安でした。

まあ批判の意見が出ていないのが一安心ですね……。

それでは、お楽しみくださいっ!!

scene・1 初デート自宅の場合

『おじやまします！！』

「遠慮なくどうぞ」

結局断りきれなかった僕は、とりあえず3人を家に招待することにした。3人とも電車通学らしいので僕の家が都合がよかったからだ。もちろんそれぞれ親御さんに寄り道をするとの連絡をさせて、了承を得てからのことだ。……それに、彼女たちたつての希望でもあった。

昨日が球技大会だったこともあり、練習もなかったし断る理由がなかった。……ってというか断れなかった。

「ここがお姉さまのお家ですか……なんだか、珍しいというか……特殊な間取りですね」

「父さんが建築家だからね。自分で設計したんだ。日当たりから日常生活まで全部配慮したらこんな形になったらしいよ」

とりあえず玄関で靴を脱いでもらい、家にかかる。玄関から続く扉は生活スペースではないので無視し、壁に沿って上に続いている階段を上がっていく。僕の家は本当に特殊で、大きな玄関が家の真ん中にドンと配置され、北側にお風呂、南側に台所があり、突き当たりから壁に沿った階段がある。天井まで床はなく、それぞれの階を壁際にぐるっと通路が通っていてそこを移動する。階段を上がって2階にいくとその通路の南、北側にまた扉がある。南が僕の部屋で北が家族全員共有の作業部屋。そんな形で各階に部屋が2つずつあり全部で4階まである。ちょっととしたホテルみたいな感じだ。

3人には僕の部屋に入ってもらい、そこで今日は話をするつもりだ。

「ここがお姉さまの部屋ですかっ」

「……………シンプルながらも生活感がないわけでもなくて、イメージぴったりで……………」

「ははは。無理しなくていいよ。生活感がないでしょ？」

「いえ！！ 決してそんなことはありません！！」

正直自分の部屋に誰かを招くことなんてないと思っていたので、余計なものは一切置いていない。せいぜい勉強用のシステムデスクと本棚がおいてあり、その反対側にベッドとクローゼットが備え付けられているだけだ。本棚やデスクに本や筆記用具、裁縫セットなどが置いてなければモデルルームとして使えるほど綺麗さっぱり何も無い。

そんな部屋でも、3人ともキラキラした目で見回すので気恥ずかしい思いをした。

「それじゃあ僕は飲み物でも持ってくるから、自由にくつろいでいてね。……………って言っても椅子は1つだし座布団すらないんだけど……………床でもいいかな？」

『はいっ！！ 構いません！！』

「それじゃあちよっと待っててね」

そう言っつて部屋を出る。

扉を閉めて背を預けると、ひとりでに溜息が出てしまった。

そういえば……………もしかしたら誰かを部屋に招くなんて、家族を除けば彼女たちが初めてではないかな？

クスッ。と薄い笑みがこぼれる。こんなに簡単に他人を自分の中に入れるなんて……………本当に智花くんたちに影響されすぎてしまった

かな。

「おっといけない。飲み物取ってこないと」

思い耽り、本来の目的を忘れるところだった。

小走りで1階に下り、台所に入って冷蔵庫を開ける。その時、僕の家族は基本的にジュースは飲まないの、彼女たちが喜ぶようなもの入っていないことに気付いた。

「どうするかな……コーヒーはやめといたほうがいいよね」

無難に麦茶を選んだ。

「ごめんね。お待た……せ」

お盆にコップを4つ、麦茶の入ったポットを乗せて部屋に戻ると……3人とも正座をして待っていた。

フローリングだから足が痛がるように……。あと、若干の緊張は見えるものの“待て”の指示を出された子犬のような表情でこちらを見上げてほしい。

「……とりあえず、姿勢崩そうね」

『はいっ。お姉さま』

につこりと笑い、正座の体勢から膝から下を外に出した所謂女子座りの体勢になる。

「僕はちよつと着替えてきたいんだけど……いいかな？」

「はいっ。どうぞお気になさらず」

「うん。ごめんね。ちよつと待っててね」

転校してからもう2週間くらい経っているけど、まだこの制服には慣れることは出来ない。もしかしたらこれから慣れることはないかもしれないくらいだ。3人には申し訳ないけど、僕だけ着替えさせてもらおう。

麦茶を3人の前に置き、クローゼットから服を取り出して部屋を出る。再び1階の今度はお風呂と隣接した脱衣所に向かい、そこで着替えた。脱いだ制服はとりあえずハンガーでそこに吊るしておき、急いで部屋に戻る。部屋に戻ると、いづらか緊張感が解けたのか3人で楽しそうにおしゃべりしていた。

「やあ、お待たせ」

「あつ、お姉さま!!」

「私服姿も素敵ですね!!」

「あはは。ありがとう」

今の服装は、白の長袖シャツに黒のジーンズと極々普通の格好なのだが、お姉さま補正の入った彼女たちにはそう見えてしまうようだった。

いかん!! 自然とそんなことを思ってしまった。……
順応性って怖い。

よいしょ、と彼女たちの前に胡坐で座り自分のコップに麦茶を入れる。

「改めて初めまして、だね。僕は掛樋「C」慧。よろしくね」

「……はっ。あ、わ、私は水無瀬理沙です。よろしくお願ひします。」

「

「安久原理亜ですつ。よろしくお願ひしますつ!!」
「……………智囊理多です。よろしく、お願ひします」

お互いにお互いを知ってはいるが、一応名前を名乗るところから入る。そこから簡単に自己紹介をしていく。驚いたことに、3人もバスケをやっていて現在は学校外のクラブチームに所属しているらしいのだ。それぞれポジションは違い、幼い頃から一緒にプレイしてきたからチームプレイだったら自信があると息を巻いていた。その頃には3人もすっかり緊張が解けたみたいで元気よくいっぱい話をしてくれた。

「こつこついうのも悪くない。そう思った。けど……………やっぱりお姉さまはなあ……………」。

「お姉さまは今年転入していらしたんですね？」

「うん。L・A・から越してきたんだ。久しぶりの日本だったからちょっと不安だったけどね。智花くんたちのお陰でなんとか楽しくやってるよ」

「智花先輩っていうとお……………バスケ部の方ですよねっ」

「そう。今僕が所属しているね」

「……………あの人も、凄く上手ですよね」

「あっ、でもでも!! お姉さまのほうが上手ですよ!!」

「あ、あはは……………」

なんてこと無い普通の会話が続いたが、やがて話題は本題へと移る。

「えつと……………君たちはさ。どうして僕にその……………“お姉さま”になつてほしいと思ってるんだい？」

若干僕が背筋を伸ばしたのを見て、彼女たちも姿勢を正した。

「それは……朝もお伝えしましたが、昨日の試合を見てお姉さまに憧れたからです」

「でも、本当にそれだけ？」

「えっ？」

「あ、いやごめん。僕の思い違いならアレなんだけど……君たち、どっかで見たことがあるような気がするんだ」

自分の記憶を掘り起こそうと、右手でこめかみをトントンと叩く。だけど、一向にほしい情報が出てこない。

「なんていうか……違和感？ 既視感って言えばいいのかな……君たちを見た時からそんな凝りのようなものが頭の中に残っていて……。それで、以前に会ったことがないか聞きたいと思って……」

何気なく彼女たちの方に目を向けてみると……。そこには先ほどまでよりもキラキラがさらに5割増したような目が8つ。おもわず体を後ろに引いてしまった。

『お姉さまっ！！』

「は、はいっ!？」

「覚えていて下さってんですねっ!？」

「おおお覚えて何え!？」

「……あの約束のことですっ!！」

「や、約束っ!？」

「落ち着きなさい理亜、理多!! お姉さまが困ってるわ!!！」

まず真ん中にいた理亜くんが身を乗り出し、次に理多くんが理亜くんを押しつけて更に迫り、最後に理沙くんが2人を元の位置に戻

しながらもキラキラした目をこちらに向け続けていた。

「ごめんなさいお姉さまっ！！」

「申し訳ございません……」

「ええつと、状況が読み込めないんだけど……」

「まあ仕方がないですよ！ 何せ2年も前の話ですから」

「2年……前？」

その頃は確か……あのことがあって、少し荒れていた時期だ。

確かその時、一度日本に帰国した時に……

！！

「ああああああ！ 思い出した！！」

「思い出してくれましたかっ！？」

覚えてる……いや、思い出した。

僕の頭の中にあつた凝りが弾け、一気にあの時の記憶が押し寄せてきた。

scene・2 ケンカⅡ試合(前書き)

はいつ。更新です。

今回は過去篇。2年前のお話となっております。
小学4年時の慧はどんなだったのでしょうか……。
それではお楽しみください。

11/24

【vol・3 オマケ キャラ紹介】にて
8割を切る成功率を誇る。 7割の成功率を誇る。
へ変更。

3Pは練習段階で6割入れれば試合で使えるレベルなので、8割はちよつと高いかなーと。

scene・2 ケンカⅡ試合

side・others

「ひ、卑怯じゃない！ 情けないと思わないの！？ 男子のくせに
！！」

「そつだそつだっ！！ こんな勝てるわけないじゃんっ！！」
「……………無効試合を主張する」

太陽が頂点に達し、ほんの少し傾き始めた頃。とある公園にて女の子が3人……………当時小学3年生だった理沙・理亜・理多の3人が、同年代と思わしき少年5人と対峙していた。

「うるせえなッ！！ お前らもそれでいいつつたから3対3でや
つたんだろ！？ 負けたんだからさっさとどっか行けよ！！」

リーダー格らしき気の強そうな、他の少年と比べても一際発育のいい少年が顔を不機嫌でいっぱいにして吼える。生まれつき体が大きく発育もいい理亜は、そこら辺の小学生なら身長では負け知らずなのだが、そんな彼女でも萎縮してしまう迫力があるそれには他の2人もうっとうしく詰まってしまう。

「で、でも……………そっちの2人のジャッジだっておかしいじゃない！
！ 明らかに鼻負してた！！」

それでも負けじと、理沙がニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべて後ろに控えている男子2人を指差して叫ぶ。その2人は人数調整のために審判となったのだが理沙たちのファウルは過剰に取り、逆に少年たちのファウルやヴァイオレーションには触れもなかった。

「鼻屑なんてしてませーん！ そっちがそう思い込んでるだけだろー！」

だがそんなささやかな反抗すらも、彼らの嘲笑の種にされてしまった。

悔しさに歯を食いしばる3人。あまりにも悔しすぎて言葉が出ないようだった。

「ほらさっさと出てけよ！ これからここは俺たちのナワバリだ！

！」

「ちょい、痛い！！ 離さない！！！」

「あー！！ コラさっちゃんを離せっ！！！」

「……暴力反対！！！」

バアンツ！！

「ギヤアギヤアギヤアギヤアうるせエなア！！！」

シン……

あと一歩で乱闘沙汰となる。突如現れたバスケットボールが木製のバックボードに打ちつけられて破裂音にも似た大きな音を立て、さらに現れた少女の怒鳴り声が辺りを包む。突然の第三者の介入に驚き、とっさに声を出すことが出来る猛者はこの場にいなかった。

腕を組んで佇むその少女は頭にバンダナを巻き、バスケットユニフォームの下に緩い半そでシャツを着たカーゴパンツ姿で、緑地に黒いラインの入ったバンダナからは染物ではない綺麗な金髪が溢れていた。顔立ちも日本人離れた彫りの深い左右対称。一見少年に

も見えるが、先ほどの声の高さや緩い袖から伸びた細長い腕。よお
くくくくく観察するとわかる程度の、本当に申し訳程度にあるわ
ずかな胸のふくらみから、性別が女性だとわかる。何を隠そう、2
年前……当時小学4年の慧本人だ。

「な、なんだよお前は!!」

「こっちはどーいの上で正々堂々試合してこのコートを勝ち取った
んだぞ!!」

「何が“正々堂々”よ!! この不正審判!!」

「五月蠅い」

シン……

太陽を背にしているの顔に陰がかかり、さらに俯いているので
表情は見えない。だが、その声色からイライラしているのがつき
りとわかる。そのドスのある声は、まだ幼い少年たちを黙らせるに
は十分だった。

「……チッ」

ようやく顔を上げ、8人の少年少女を見回すとこの場にいる全員
に聞こえるくらい大きな舌打ちをする。

「アンタらさあ……」

そして口を開いて声をかけた先は、理沙・理亜・理多の3人。

「話し合って勝負形式を決めた上で負けて……敗者のくせにい
つまでも喚いて情けなくないわけ？」

「なッ!!」

まさか自分たちが責められると思ってなかった少女たちは、思わず絶句してしまう。名も知らぬ外人の後ろからニヤニヤと指をさされ、屈辱に顔を赤く染めた。

「……………で、次はアンタらだ」

くるりと180°。体を回転させると、少年たちの方へ向き合った。

「アンタらもさあ、女の子相手に正々堂々勝負する気ないわけ？ あんな一方的なジャッジ、賄賂を貰った不正審判ですらないね」

「んだとツ!？」

容赦ない、トゲのある言葉に激昂し、今にも掴みかかろうとばかりに詰め寄る。慧は動じないどころか、眉間の皺を深くしてますます不機嫌そうにする。

「こっちはイライラしてるってのに無様な試合見せつけやがって…
…これならまだ素人同士のバスケのほうがマシだ」

「ケンカ売ってんのかッ!？」

先ほどのリーダー格の少年が、怒りに体を震わせて更に一步。

「いいよ」

『……………は?』

無表情な瞳が一転、見下すように細められ口は嘲笑にゆがむ。

「^{ケンカ}試合……………売ろうじゃないか」

足元に転がっていたボールを掴み、リーダー少年に投げ渡す。

「ただし、見物料は高いよ」

その瞳が移すのは、ゆるぎない自信だった。

s c e n e ・ 2 ケンカⅡ試合（後書き）

この時慧が何故イライラしていたかは、他の章で触れます。

s c e n e . 3 ローカルルール（前書き）

はいっ。更新です。

昨日は更新できなくてすみませんでした……。今後、こういこと
がないよう気をつけます。

これからも応援していただければ嬉しいです。

scene . 3 ローカルルール

「もちろん。バスケットでだけどね」

「なんだよ……1 on 1でもやるうつてか？」

「それじゃあつまらないでしょ？ そうだね……3対1でいいよ」

少年たちを指差し、その後自分を指差す。

自信満々で見下すような笑みからは、「3人束になっても勝てない」と暗に言っているような気がしてしまう。そんな慧の態度に、少年たちは更に苛立つ。

「はあ！？ ナメンのもいい加減にしろよ！！」

「そ、そうですよ。いくらなんでも3対1だなんて……」

今まで言葉を発せずにはいた理沙たちだが、慧の無謀な宣戦布告におずおずと声をかけた。

「別に嘗めてなんかないさ。自分の実力とさつき見た君たちのプレイを見てそう判断しただけだよ」

なんでもないような顔で言う。それに対して少年たちの眉間の皺が更に深くなるが、慧の口ぶりはそれをわざと楽しんでいるかのようだった。

「それとも何かい？ 3人がかりでも僕には勝てる自信がない？」

「じゃあやってやるよ！！」

同じような年齢の、しかも女子からの挑発。女子に対して強い態度を取りたがる年頃の少年たちがそれに耐えられるわけが無い。ト

ドメの一言に怒りが爆発し、リーダー格の少年が声を荒げて怒鳴った。それに対して理亜や理多がビクツとおびえてしまつが、慧は真正面から受け止めてもケロツとしている。

「……………OK・Come on」

ニヤリと口を歪め、短いながらも流暢な英語応えた。

「…………と、その前に。悪いけどルールはこっちに決めさせてもらつよ」

「は？ ルール？」

「そう。特別なルールでやらせてもらう」

「……………なんだよ？ 特別なルールって」

「まあそう難しく考えなくてもいい。決闘用のローカルルール…………」

“スラム・ストリート・バスケット”だ」

「スラム…………ストリート？」

聞いたことの無い名前に、全員がいつせいに首をかしげる。慧も気にするそぶりなく説明を続けた。

「大体は普通のバスケットと同じだけど……………そうだね。一言で言えば荒っぽい。トラベリングやダブルドリブル等の基本的なヴァイオレーションは取るけど、それ以外のファウルなんかは一切取らないルールのことさ。相手を押そうが手を引っ叩こうがファウルは取られない。まさに決闘用のルールさ」

それを聞くと、少年たちの顔にニヤニヤと怪しい笑みが戻る。頭

の中で、今まで散々自分たちをコケにしてきた慧をどうやって甚振ろうか構想を練っているのだろう。

「……ま、インテンショナルやアンスポーツマンファウル【凄く悪質なファウル。一発で退場】なんかは取るからそこは注意しなきゃいけないけどね」

加えつけた慧の言葉に、彼らは少し肩を落とした。

……それなら、わざとらしくなく慧に暴力を与えればいい。そう考えて再び怪しく笑う。

「審判は……公平にするために彼女たちにやってもらおう。時間は無制限。1ゴール1点の3点先取で勝利。それでいいね？」

「ああ。構わねえよ」

こうして、慧と少年たちの戦いが始まった。

「それでは、始めます」

ハーフコートなので、ジャンプボールではなくじゃんけんで先攻後攻を決める。先攻は慧だ。

相手の3人は、しっかり作戦会議をしてのベストメンバー。先ほどのリーダー格の少年（仮に少年A）と、背はあまり高くないが足に自信がある少年（仮に少年B）に、少年たちの中で2番目に背の高い少年（仮に少年C）の3人だ。しっかりと慧に仕返しもあるつもりなのか、3人ともギリギリした目をボールではなく慧に向けている。

そして慧が持っているボールを少年Bに渡し、それを返す。所謂ワンタッチをして試合開始。

「へへっ。抜けるものなら抜いてみるよ」

「いや、必要ないし」

ひゅっとボールが放られ、バックボードに当たりネットを揺らした。溜めが一切無しの一発でシュートを打ち、楽々先制点。

あまりにもあっさりと入れられてしまい、あぐりと口を大きくあけてボールを見つめる少年たち。コート横から見ていた理亜たちはきやあきやあと声を上げていた。

「す、す……いー!!」

「……男子わら」

「ほら、攻守交替だよ」

いつまでたつても彼らが動かないので、痺れを切らした慧がわざわざゴール下まで行きボールを拾った。それを少年Aに渡しもとの位置へと戻っていく。ボールを受け取ってようやく意識を戻した少年たちも、オフエンスをするべく位置取りをする。

背の低い少年Bをトップにローポストに2人。ワンタッチが終わったらすぐにどちらかへパスをするハラなのだろう。

「……ふうん」

そんな3人を見て、どこか納得したような顔の慧。

「ほらよ」

少年Bからボールを受け取り。

「はい」

それを相手の胸投げ返す。

「へへっ。それじゃ早速 うわっ!?!」

「ボールキープが甘い」

オーバーヘッドで投げるために頭の上へとボールを上げようとした瞬間。一気に距離を詰めてきた慧に奪われてしまった。その行動を読んでいたかのような見事な手際で、一切の抵抗も出来ずに攻守

交替。

「……へへ。さっきのはマグレだ」

慧の攻撃。ワンタッチの後、今度はシュートを打たれないようにと距離を詰めてディフェンスをする。後ろの2人もいつでもカバーに行けるよう前衛姿勢。

「ま、そうなるだろうね」

シュートを打つ気が無いかのように、ボールを腰の右横にキープする。フェイクもフェイントもなく、ただにらみ合う2人。

やがて我慢できなくなった少年Bがボールめがけてステイルを仕掛ける。その瞬間に慧はボールハンドリングの要領で背中を通して逆側の左手へと渡し、綺麗に抜き去る。

「こつちに2人いるの忘れんな!!」

そしてすぐに2枚の壁が立ちはだかる。一瞬だけ動きを止める慧だが、すぐに左から抜くべく少年Aの側へ抜きにかかる。だが彼も抜かせまいと食らいつくが慧の方が早い。

ここで決められたらもう後がなくなってしまう。焦る少年がとつた行動は……。

「つっ!!」

「よっしやとつた!!」

ファウルだった。慧の腕ごとボールを叩き弾いたのだ。

「ああ!!」

「ひ、ひどいつー!」

「……下衆!」

コート端から少女たちのヤジが飛ぶ。だけど、このファウルは合法だ。

慧自信がそう設定したのだから仕方が無い。

「へへっ。いい気味だぜ」

たらりと汗を流し、少しぎこちない笑みを浮かべながらそう吐き捨てる。

一方慧は、叩かれて少し赤くなった自分の手を見ていた。

「……ふうん」

発した言葉は、ただそれだけだった。いや、むしろそれしか発する必要が無いとも言いたそうな表情だった。

そしてまた、攻守交替。

「ほらよ」

少年Bからボールを受け取り、

「ん」

そのボールを投げ返す……と思いきや、それを転がして返していた。

少年Bはこんなのアリなのかと思いつつも、膝と腰を少し曲げてボールを広い上げる。その瞬間、

「……っ!!」

「えっ？」

「痛っ!!」

ボールを地面から少し上げたところを狙いすまして、慧が握りこぶしをハンマーのようにしてボールめがけて振り下ろした。開いた状態で叩く高い音ではなく、本当に鈍器で殴ったかのような低い音がなったそれは、地面へぶつかっても勢いは消えず、所持していた人間に講義するかのように顎へクリーンヒットした。

そして跳ね返ったボールは、真正面にいる慧の手の中へすんなりと入っていった。

「はい、攻守交替」

さっきの仕返しなのかどうかはわからないが、少年たちは慧のその笑みにぞくりとした寒気を感じた。

s c e n e 3 ローカルルール（後書き）

「スラム・ストリート・バスケット」ルールは、私が考えたものなので
実際にあるかどうかはわかりません。

scene・4 ラフプレイ(前書き)

はいっ。更新です。

お気に入り登録件数が70件になりました!!

こんなにもたくさんの方々に応援していただき、感無量ですっ。
つまらない作品ですが、これからもお付き合いいただければと思います!!

scene・4 ラフプレイ

「くっ……さ、さっきからキタネエぞ！！ 不意打ちばかりしやがって！！」

たまらず少年Aが叫んだ。2度の不意打ちで自分たちが碌にオフエンスが出来ていないのでそうとう頭にキているようだ。だが、それも所詮逆ギレというものだ。先ほど彼もルールで取られていないとはいえ、わざとファウルをして慧を止めたのだから。

「ふっ……だつたら真似をすればいいじゃないか」

だから、慧は嘲笑するように鼻で笑って見せた。

【慧1・男子0】

そして慧のオフエンス。慧に挑発され、だつたらやってやるうじやないかと少年Bはワンタッチを転がして返し、慧の隙をうかがう。

パンッ！！

「うわっ！！」

だが、最初からやってくるとわかっている相手に対して奇襲が成功するわけも無い。ボールを拾う寸前で慧は少年Bの目の前で手を

叩く 所謂猫だましで相手を驚かせた。ボールにばかり集中していた彼は驚き、大きな隙が生まれる。それを慧が見逃すわけも無く……………結局今回も抜かれてしまった。

「何やってんだよバカ!!」

そしてそのまま進むと、先ほどのように前に2つの壁が立ちはだかる。2人の少年は情けなくも抜かれてしまった仲間が悪態をつきながらも、目の前にいる慧に集中する。

今回もどうせ抜いてくるだろうと考え、両手を広げてコースをなくすように自分の体を大きく見せる。

何としても止めてみせる

その瞳はそう語っているようにも見えた。

慧は2人の前に立つと、また一瞬だけ立ち止まった。

フイツ

「あっ!!」

瞬間、慧の顔がシュートを狙うようにゴールの方へと向けられた。シュートを打つのだと思い飛びつくようにジャンプをするが、むなしい声が響いただけだった。

顔と目線だけのフェイクで相手2人をジャンプさせ、自分はあっさりと右から2人を抜いてレイアップ。ノーマークでそれを外すわけも無く、これで慧はリーチとなった。

【慧2 - 男子0】

もう後がない男子。しかも自分たちの得点はいまだに0だ。しかもろくにドリブルすらついていない。

再び慧が何かをやってくるだろうと思い、ワンタッチから気を抜くことは出来ない。案の定、今回は前回とは真逆の上に放ったふんわりとした返しだった。だが、少年Bもこれまでただ黙ってやられていたわけでもない。彼なりに対策は考えていた。

パスを貰った瞬間叩き落されるなら、叩き落とされる前に抜き去ればいい。

ボールが手に触れた瞬間、トップスピードで慧を右から抜きにかかると。

「……はあ、わかりやすいね」

だが、慧という少女はさらにその上を行っていた。少年Bが慧からボールを受け取る時、視線が自分の左側にそれているのが見えていた。そこから、すぐに抜いてくると読んでいたのだ。

予想は的中。気付いたのが直前だったので少し後れを取ったがしつかりと少年に付いている。しかも慧のほうがスピードが速い。

そして慧の左手がボールめがけて伸ばされたとき……顔に衝撃が走った。

「い たっ」

「へへ、ワリ」

少年Cのスクリーンアウトだった。それは必要以上に肘を張った状態で、非常に危険だった。しかも、入るのが遅すぎるので明らかにファウル。だが、これも慧が定めたルールの影響でファウルにはならない。

先ほどの慧の真似をするように、レイアップで楽々と、だがようやく1点を取ることに成功した。

「ナイススクリーン」

「当然」

そこでようやく、慧に視線をやる。

……………慧の左頬がひどく腫れていた。ほとんどトップスプリードで突っ込んだので、その怪我は大きいものだった。頬の内側も切っ
てしまったのか、ペツと地面に向かって血を吐き出していた。

「最低！！ 女の子の顔に傷つけるなんて！！」

「男の風上にも置けないよっ！！」

「……………この暴漢！！」

理沙たちが思い思いのヤジをぶつける。

「うるせえな！！ 事故だよ事故！！」

「外野は黙ってるバーカ！！」

「な、なんですってええ！？」

まあ少年たちもそれに対して黙っているわけもなく、ヤジにはヤジで返す。

あまりの言い草に理沙が飛び出しそうになるが、慧に無言で視線だけで制された。勝負の邪魔をするなど。

ボールを持ったままエンドラインに立つ慧。やはり頬が痛むのか少し顔をしかめている。それでも、普通にワンタッチを始める。

先ほどのような余計なことはせず、普通に放って返すだけのワンタッチ。

「……………何やってんだ？」

そして、次の行動に疑問の声が出てきた。慧が急にボールハンドリングを始めたからだ。本来、それは試合中にやるようなものではない。

やるようなものではないが、そんなことはこの際どうでもいい。

隙だらけなのだから、ボールを狙うチャンスだ。

少年Bはそう思い、慧の胴周りをくるくると回っているボールめがけて手をのばす。背中を通して右側から前へと出てくるところ、ボールを片手で持っている瞬間を狙ったので楽々ボールを奪える……そう考えたが、それが間違いだった。

慧は相手が動くと同時に右手を返し、逆回転に変えた。そしてバツクチェンジのように左側へと抜き去り、その勢いで目の前にいた少年Cも抜こうとする。

一瞬反応が遅れてしまった彼だが、抜かせまいと何とか足を動かす。

一歩早く、慧のコースをふさげたと思った少年Cだったが、それも慧の仕掛けた罠。そこに至るまでの慧のスピードは、最速のそれではなかったのだ。すぐさま体を反転させてバックロータールターン。少年Cが大きく右に出ていたために、少年AとCの間には大きな隙間があった。その間からまんまと2人を抜き去りこれで最後だと右足に力を込めた瞬間

慧の体が、コートの外へと突き飛ばされていた。

scene・4 ラフプレイ(後書き)

中途半端なところで終わってしまい申し訳ございません……。

意外と荒っぽいストリートって書くの難しかった……。しかもなんか若干少年たちが小学生っぽくないというこの真実！
うう……はやくうまく書けるようになりたい……！

s c e n e . 5 約束（前書き）

はいっ。更新です。

やっと……過去話がこれで終わりです。

正直バスケの描写いらなかったんじゃないかな？と思いはじめてしまいました。

どうせこのあとストリート大会があるし……。

第3章は、バスケ描写が主成分となります。……………今更ですが（笑）

scene . 5 約束

一瞬なにが起きたかわからなかった。

恐らく、抜かれそうになった瞬間にどちらかが慧を突き飛ばしたのだろう。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「……ああ、気にしないで」

「大丈夫じゃないですよ!! すぐ手当てしないと!!」

「……………酷い怪我です。無理はしないほうがいいです」

一応審判としてコートの端に控えていた理沙たちが駆け寄り、体を起こしてやる。突然の衝撃だったために上手く受身を取ることが出来ず顔面から思いつきり地面に突っ込んでしまったようで、右頬と右腕がひどく擦り剥けていた。

その様子を愉快そうに見ながら少年たちが近づいてくる。

「あーあかわいそうに。そんな怪我じゃもうむりだなー」

「つてことは俺たちの勝ちってことじゃね?」

少々芝居がかったように、大げさな仕草でそう言ってきた。

理沙たちも反論しようとは思ったが、確かにこの状態で慧が続けられるとは思えない。諦めて出て行こうと立ち上がりかけた時……………。

「待ちなよ」

立ち上がった慧が制止の声をかけた。

「まだ試合は終わってない」

「でも、その傷じゃ……」

「1回だ」

「は？」

頭に巻いていたバンダナを外し、左手と口を使って右腕のすりむいたところに巻きつける。

ぎゅっと締め付けると、睨みつけるように少年たちを見回し人差し指を天に向けて前に出した。

「後1回で終わる。ちょうど今のはインテンショナルファウルだ。次のプレイですべて終わらせて見せる」

ぼかんと全員がだらしなく口を大きく開けていた。こんな怪我でそんなことができるかと。

だが、慧は毅然とした態度で、反応を示さない少年たちを挑発する。

「別にやらなくてもいいよ？ だけど、その場合はそっちの試合放棄だけだね」

「……………いいぜ。やってやるよ」

やはり応えたのはリーダー格の少年Aだった。

エンドラインへと行き、今回は普通にワンタッチ。ボールを保持したままの応酬はせずに、受け取ったとたんにドリブルをつき始め

た。チェンジオペースを狙っているのかその目は油断無く細められている。怪我をしているはずなのに、その右手でのドリブルは一切のゆがみも見えない。

「貫ったっ！」

我慢しきれなくなった少年がボールめがけて右手を伸ばす。

その瞬間慧は左サイドへと反転。その際開いた左手で伸びてきた少年の右腕を掴んで後方へと導き更にすれ違い様に足を引っ掛けて転倒させた。それは合気道の動きに似ていた。

そのままスピードを上げて残る2人の正面……ではなく向かって右側の少年Aへと向かう。

「止めてやるっ！！」

彼の腕が伸びてくる。それを見た瞬間右足に力を込めて左へとスライドしてその両手をかわす。その際にボールはビハインドシュートでゴールへと放る。今度はボールの行方に気を取られて無防備になっている少年Cのほうへと走り、跳躍。

「ぐわっ！！」

えぐられるような痛み悲鳴が上がる。

ジャンプした慧はディフェンスのために中腰になっていた彼の足の付け根めがけて左足を突き出し、彼を踏み台にしたのだ。

「ぎゃっ！！」

そして右側にとんだ慧はちょうど振り返ったところの少年Aの体を踏み台にして一気に跳躍。

バックボードに当たったボールが跳ね返り慧の手の内に戻ってくと……そのまま叩き込んだ。

“カタパルトダック”。ストリートの代表的な技の1つだ。他の誰かを踏み台にして、身長が低い選手でもダックシュートを決められる大技。本来は誰か味方が両腕を組んでそれを踏み台に使わせてもらうものだ。だが慧はそれをあっさりと、相手の選手を使ってやってのけてしまった。

そんなシュートが存在するかどうかも知らない少年少女たちだが、これだけはわかった。

この少女は只者ではないということ。

「いたたた、痛いって……」

「……………じっとしててください。少しでもバイ菌を落とさない
と」

「覚えてるよー!!」とありがちな捨て台詞とともに去っていった少年たちを見送った後、理多が自分のハンカチを濡らして慧の顔、腕についた汚れをふき取っていた。

「あの……本当にありがとうございました!!」

「いや、いいよ。僕もちょうど憂さ晴らしたかったところだったからね」

そうやってにつこり笑ってやる。少年たちを完膚なきまでに叩きのめしたので、イライラしていた気持ちが随分晴れたようだ。王子様のような爽やかな笑みを浮かべ、理沙たちはいけない世界に入り込みそうになる。

「そ、そうですか……あ、あの。あなたくらいの実力があればあんな特別ルールでやらなくても普通にかたたんじゃありませんか?」

手当てを理沙に任せているので、手持ち無沙汰に慧に質問をする。

「ん? 気になる?」

「はい!!」

「ん……まあ実は結構前からこのコートは覗いてたんだよね。君たちが練習している時から」

次は腕の汚れを取り始めたので、理沙や理亜の方にも目を向ける。

「それまでちょっとイライラしてたんだけどね。楽しそうに練習しているのを見てなんだか暖かい気持ちになってね。もうちょっと見ていこうかと思ったたら彼らが現れて……まあ無様な試合を見せられたわけだ」

その瞬間、3人が一斉にうつむいてしまった。慧も失言だとあわててフォローする。

「ああ、君たちの事を言ったわけじゃないからね！？ そんなに上手くないくせに不正で勝って喜んでる彼らを見て更にイライラが増したんだ。それで、ね」

「えっと……それと関係が？」

「うん。1回ね、ああやってファウルの誘惑に囚われるとなかなか抜け出せなくなるんだ。彼らは多分、これからしばらくはとっさの瞬間に手がちゃって凄いことになるだろうね」

クスクスと愉快そうに笑う慧。

怒らせたら恐いタイプだ。少女3人は瞬時に察した。

「ま、その結果代償がこれさ」

そう言って再びバンダナを巻いた右腕を上げる。

「これはこれで無様なものだよ。さ、このコートは君たちのものだ。いっぱい練習するんだよ」

そう言い残して立ち上がる。だけど、少女3人はそれを許さない。視線を合わせたただけでお互いに言わんとすることを理解する。生まれた時から一緒にいる彼女たちだから成せる技だ。

「」「あ、あのー！」「」

「うん？ なんだい？」

背を向けて去ろうとする慧を呼び止める。声に反応して立ち止ま

り、振り返った慧に3人が一斉に頭を下げた。

「お願いです!!!」

「私たちにっ!!!」

「……バスケットを教えてください!!!」

一瞬何を言われたのかわからなかったのか、口をあけて呆けていたがすぐに困ったように苦笑を浮かべ、こめかみの辺りを掻いた。

「えっと……できれば怪我を治療したいんだけど……」

「あ、えっと今すぐというわけじゃなくてですね!!! ご都合がよろしい時だけでも教えてもらえたらなっと思って思いました……」

勘違いされ、焦ったように早口にしゃべる理沙。その必死な様子について笑ってしまう慧。

「ふふふ、大丈夫。わかってるよ。……でもごめんね。すぐに引越しちゃうんだ。またここに戻ってくることもあるかも知れないけど、いつになるかはわからない」

「そ、それでも構いませんっ!!!」

「……私たち、待ちます!!!」

「ううん……」

腕を組んでうなる慧。自分にバスケットを教えられるほどの実力があるとは思っていないし、そもそも慧は教えられるようなバスケットプレイヤーじゃない。

「技を教えるとは言いません!!! ただ、あなたのバスケットを教えて欲しいだけなんです!!!」

「お願いしますっ!!!」

「……………お願いします!!」
「う、うう……わ、わかった」

あまりの気迫に、思わずうなずいてしまった。しまったと思った時にはもうすでに遅く、3人ともきゃあきゃああと手を握りあつて喜んでた。これはもう撤回はできないなと、もう諦めてしまった。

「じゃあ条件だ。僕もそれなりに今まで努力して力をつけてきた。君たちの練習風景を見た限り、まだまだ弱い。……次にあった時、僕が認められる力をつけていたら色々教えてあげるよ」

「本当ですか!?!」
「うん。約束だ」

s c e n e . 5 約束（後書き）

うう、上手く迫力のある描写が書けない……。

ちなみに言いますと、作者覚醒未遂はノーマルです。いけない世界には入り込んでませんからねっ!？

s c e n e ・ 6 家族紹介（前書き）

はいっ。更新です。

今回ついに慧と理沙たちが対決……ではありません。

それはまだもうちょっと先です。

scene・6 家族紹介

「……………覚えてますか!? あの日の約束を!」
「したねえ、そんな約束……………」
「なんですかその煮え切らない感じは……………」

約束に関しては一字一句間違いなく思い出した。

下手だったけど凄く楽しそうに、それでいて凄く真剣に練習している姿が、もつと小さい頃の僕と重なって見入ってたんだっけ。だからなのか、普段なら絶対に教えることはしないはずの僕の技を、バスケットを条件付とは言え教える約束をついしてしまったのだ。

……………はあ、仕方ない。約束は約束だしね。破るわけにもいかない。いやむしろ、こんな期待と興奮に潤ませた3対の眼を無視することは僕にはできない!!

「……………約束はちゃんと守らないといけないよね」
「じゃ、じゃあ!」
「うん。君たちの力が僕の認められるものだったらちゃんと教えてあげるよ」
「や、やったあつ!」
「それじゃあ早速」
「いや、ちよつと待って」

恐らく今すぐバスケットをしようとしたのだろう、すぐに立ち上がった3人を手で制す。手を振って座るように促すと、きちんと座りなおしてくれた。

「別に今すぐ見せて欲しいわけじゃないんだ。ああ、君たちのバスケを見たくないわけじゃないから安心して。……今度の日曜日にね、ストリートバスケの大会があるんだ。その大会で君たちのバスケを見せてもらいたいと思ったんだけど………」

大会の話になると、ますます目の輝きが増しているように見えた。もう、まぶしいくらいだ。

「ど、どうかな？」

「本当ですか!？」

「ぜ、ぜひ出たいですっ!!！」

「……………断る理由がありません!!！」

どうやら賛成のようだ。うん、よかった。

「ん、わかった。一応僕も部活のみんなと出るから、楽しみにしてるよ」

「お、お姉さまも出る大会……………」

「もしかしたら戦うことになるかもねっ……………」

「……………それならそれで、全力で戦っただけだよ」

うん。とお互いにうなずきあう3人。

ふふ、なんだか可愛いな。妹が出来たみたいだ。

「詳しい話は明日でもいいかな？ 部活のみんなにはまだ話してないから、面倒だしってぺんに話しておきたいんだよ」

「はい。構いません」

「ありがと。うん、そろそろ時間もいい頃だし夕食の支度をしなくちゃ。……………どうだい？ うちで食べていく？ 夕食」

「えっ?」

「い、いいんですかっ!？」

「……是非に」

「そんなに食いつかれると思わなかったけど……僕はむしろ人数が多いほうが楽しいし、兄さんたちや父さんも喜ぶと思う。……あ、お家の人に許可が下りたらただけだね」

そういうと一斉に3人も自分の携帯電話を取り出し、自宅に電話する。ほぼ3人同時に電話を切り、その顔には、返事を聞かなくてもわかるくらいな満面の笑みが浮かんでいた。

「それじゃあ今から作るから適当に寛いでいいよ」

「いえ、そんなわけにはいきません」

冷蔵庫の中は飲み物を取りに言った時に確認済み。3人増えても大丈夫なくらいは、食材があつたので買い物に行く必要は無い。早速作るうと立ち上がり、みんなはお客さんなんだしどこで適当に寛いでてもらおうと思ったのだが、理沙くんにあっさり拒否されてしまった。

「……私たち、よくお互いの家にお泊りするんです」

「そういえばそうらしいね」

「お泊りする時は、みんなと一緒に料理するんですっ!」

「ですので、私たちもお手伝いさせてください!」

「そっか……特に、断る理由もないし……うん。それじゃあ一緒に作るうか」

『はいっ!』

1階の台所へとみんなを案内する。普段から片付けはしているの
で、ここも殺風景だけどもあ散らかっているよりはましだろう。

壁際に並んでいる棚から4つエプロンを取り出し、それをそれぞれ

れに手渡す。

「兄さんたちと父さんので悪いけど、これで勘弁してね」

理沙くんは黒地にバスケットボールの刺繍がついたエプロン。理亜くんは水色と緑のチェック柄。理多くんが灰色の生地でポケットがたくさんついているエプロンだ。それぞれ僕が作ったもので、使用する回数が少ないが兄さんや父さんが料理をする時に使うものだ。僕のは赤と黄色のチェック柄。少し前から使っているので所々汚れたり解れたりしているけど愛着のある代物だ。

「それじゃあ作ろうか。えっと、今日のメニューは肉じゃが、いんげんの黒ゴマ和え、切干大根、豚汁と付け合せに漬物だね。それじゃあとりかかろうか」

自分たちで言っていたこともあり、3人の手際は慣れたものだった。3人もいいお嫁さんになるだろうな。礼儀正しいし可愛いしね。

和気藹々と料理を作っていると、玄関が開く音が聞こえてきた。この時間だと学校終わりの励兄さんだろう。

「たっただいまー……つとあれ!? なにこの子たち?」

「お帰り、励れいにいさん。この子たちはお友達……かな。みんな、僕の二番目の兄さんだよ」

「励だ。今は七芝高校つてとこに通つてる高校1年生。よろしくな」

「理沙です。おね………慧さんにはお世話になってます」

「理亜ですっ。お邪魔してますっ」

「………理多です。突然お邪魔して申し訳ございません」

「気にしなくていいって。にぎやかなほうが楽しいしな。……んじや慧。俺部屋にいるから出来たらよんでな」

「うん。わかった」

そう言っただけで扉を閉め、自分の部屋へと戻っていった。確かテスト期間中だから勉強しに……いや、違うな。たぶんインターネットだろう。最近いろんな国の人とちゃつとでゲーム開発するとか言ってたから、早速それをやっているんだと思う。

「高校生にしては随分お早いお帰りなんですね。部活はしていらっしやらないんですか？」

「うん。もともとバスケット部に入りたかったんだけど、部が今活動停止中らしいから入ってないんだって。……まあどっちにしろテスト期間中だから帰ってくるのは早いんだけどね」

「部活停止中だなんて……それは残念ですね」

まあ本人はそれなりに楽しくやってるみたいだけどね。励兄さんはコミュニケーション能力が高いからすぐ友達も作れるし。

「今帰ったよ……あれ？ 慧？ この子たちはどうしたの？」

「あ、お帰り。英兄さん」

次に帰ってきたのは1番上の英兄さんだった。

「この子たちは新しい学校の友達。みんな、僕の一番上の兄さんだよ」

「英だよ。職業は教師で、今は七芝高校に勤めてるんだ。よろしくね」

「理紗です。よろしくお願いします」

「……………理多です。お邪魔します」

「理亜ですつ。確か……励さんも七芝高校に通ってらっしゃるんですよねっ?」

「ああ。そうなんだよ。ま、俺の場合は身内だからこそ厳しくしてるけどね。……じゃあ俺は作業部屋に行っているよ。何かあったら呼ぶんだぞ、慧」

「うん。ありがとう」

励兄さんとは違って静かに扉を閉めて2階の作業部屋に行った。たぶん執筆途中の小説を書きに行ったのだろう。学校の教師として働く傍ら、ネット小説の小説家としても活動している英兄さん。物語りも佳境に入りだし、完結ももうすぐだと以前楽しそうに言っていた。

そして料理が作り終わり、台所にあるテーブルに並べていると家族最後の1人が帰ってきた音がした。

「ただいま。my angel...」

「ちょ! 友達の前でやめてよ父さん!」

台所に入ってくるなり背中から抱きついてきたのが我が家の大黒柱。後ろから抱きしめてくるのは愛情表現らしいが正直恥ずかしい。なによりみんなの前だというのに……少しは自重して欲しいものだ。

「おおっ!! 慧が友達を連れてくるなんて久しぶりじゃないか!
! こんにちは少女たち。俺は慧の父親の掛樋クロード「C」ジエインだ」

「……………り、理多……………です」

「り、理亜ですっ……………」

「理沙、です。……………えっと、その……………」

「ほら父さん。みんなが驚いてるからそろそろどいてよ……………キスをするんじゃないここは日本です!!」

「現在45歳なのだが、容姿が20年ほど前からほとんど変わっていないという誰もが驚くほど若々しい父さん。見た目20代後半なのに妙に大人の色気が出ているこの人はみんなには刺激が強すぎたかな……………。せめて挨拶代わりにキスをするはそろそろやめてほしい。」

「なにコレ……………禁断の親子愛!?!」

「美男と美少女だよっ!!」

「……………このカップリング、私的にSS+!!」

「なんだかひそひそ話してるのがきになるな……………。おっと、復活したみたいだ。」

「よろしくお願ひしますっ」

「……………その……………がんばってください!!」

「は?」

「いえこちらの話です」

「なんだっただろう?」

それからの食事は、楽しいものだった。

なかなか大きめのテーブルのはずなんだけど、流石に3人も増えると狭くなってしまふ。だけど、こうやって大人数で食事をするのは学校の給食以外では初めてのことなので、新鮮で、でも凄く楽しいと思った。世の中にはお客さんを招いて食事をするのが好きな人がいると聞いたことがあるけど、僕にもその気持ちがよくわかった。また……………この3人を誘ってみようかな？ もしくは、部活のみんなも招待してみたい。

少し遅くなってしまったので、帰りは父さんが車に乗せてみんなを家まで送ってくれた。その帰り道。

「いやぁみんないい子だったなあ」

「うん。そうだね」

「まあ慧には劣るがな」

はいはい。ありがとうございます。

あ、運転中に目を逸らすから……………。

「信号……………今赤だったよ」

「ええ!？」

「ああほら、パトカー追ってきた」

scene・6 家族紹介(後書き)

警「これほんとに貴方の免許書ですか？ 45歳？」

J「Oh... Japanese police. トテモ
verene。ワタシ、ケホドノイツワリナイネ」

警「...まあ写真で本人確認は出来てるし。若作りなんでしょ
うね。今度から信号はきちんと守ってくださいよ。息子さんも、しっ
かりお父さんを注意してね」

K「..... Yes, sir」

..... なんでしょ。最近自分の作品の行方がわかりませ
ん。感想等お待ちしております。

s c e n e . 7 技というもの(前書き)

はいっ。更新です。

前は一日遅くなってしまい申し訳ございません。

5日の2時に登録したと思ったのですが、間違えて1日ずれてしまったようです。

今後、こづいづことが無いように気をつけます。

今回は、慧の台詞ばかりですねー。しかも短い。申し訳ないです……。

scene 7 技というもの

「へえ、慧とあの子たちは知り合いだったのね」

「それにそんな約束までしてたなんてね」

「ずっと待ってたんだね。3人とも。健気だねー……」

「おー。八子公みたい」

翌日、学校に行くときみんなからすぐ質問攻めにあつた。もちろん昨日のあの3人とのデート(?)についてだ。

別に隠すようなものも無かったので、バスケの試合をしたことは言っただけ3対1だということは隠し、それ以外は約束を含め全部話した。みんな理沙くんたちを見直したような反応をしていたが、真帆くんだけが何故か不満げだった。

「でもずりーじゃんかっ」

「えっと……何が？」

「あたしがけっちゃんの技を教えて欲しいって言った時には教えられないって言ったくせにさー！」

ああ……そこに怒ってたんだね。

不満げに頬を膨らませてぷいっつとそっぽを向く真帆くん。恐らく、同じチームメイトには教えられなくてなんで初対面の3人には教えるんだと拗ねているんだろう。……まあ断りきれなかったっていうのもあるんだけど、それなりに理由もあつたりするんだよね。

「ごめんね。でも、あの時はああ言っしかなかったんだよ」

「え？ どういうこと？」

「あの子たちの前で結構いろんな技使っちゃったからね、教えないって言ったら自分たちの独断で技の練習をすと思っただ。まだ

未熟な実力でストリートの技を練習したら、彼女たちの成長に悪影響が出てしまう。……だから、彼女たちにまずは強くなるように言ったんだよ。あの頃からクラブチームに所属しているみたいだし、強くなりたいんだっいたらまず一番近くにいる指導者の人にアドバイスを求めるでしょ？ そうすれば、厳しく言わなくてもストリートの技は練習しなくなるだろうなってね」

近くにいる指導者の人にアドバイスを求めるのは、みんなもわかると思う。昴さんがいい例だね。球技大会の時、みんなそれぞれ昴さんにアドバイスを求めていたみたいだし。

僕の言いたいことを理解してくれたみたいで、みんなもしきりにうんうんと頷いてくれた。

しかし、疑問に思ったことがあるみたいで、紗季くんが首を捻りながら聞いてきた。

「でも、そうすると慧はあの子たちに技を教える気は無いつてこと？ 2年間も待っていてくれたのにそれは酷くない？」

「ははは、流石に僕も約束を破るような人間じゃないよ」

確かにアレだけ聞くとそう思っちゃうよね。実際あの時は破ってもいいやって軽い気持ちだったけど、今は微塵もそんな気はしない。

「ストリートの技もね、全部が全部スポーツのバスケに悪影響を与えるわけじゃないんだ」

「え？ そうなの？」

「うん。みんな……特に智花くんや昴さんなんかは見てて思ったかも知れないけど、ストリートをやってる人って総じてハンドリングスキルが高いんだ」

「ハンドリング？」

聞きなれない単語に、真帆くんが首を捻った。

「そう、ハンドリング。ストリートバスケットの本質は手品のように人を驚かせるシュートでもなく、人をからかうようなパスでもない。まるで自分の体の一部のようにボールを自由自在に操るハンドリングスキルだ。ストリーートの技は総じて、ボールを扱うという点にかなり特化してるからね。そういうところを、あの子たちには教えないと思ってるんだよ」

「だったらあたしらにも教えてくれたっていいじゃん!」

「そうよそうよ」

「ぶー。教えるー」

おっと、風向きが怪しくなってきたな。真帆くんだけだったのに、いつの間にか紗季くんやひなたくんまで加わってきた。若干智花くんも不満げだ。

「君たちのコーチは昴さんでしょ？ 僕のスキルのような余計なものはいれないで、昴さんの指導の下でしっかりと地盤を固めて欲しいんだよ。忘れてもらっては困るけど、君たちはまだ初めて間もないよね？ この時期に何を、どう練習するかって言うのはすごく重要なんだ。まずは基礎をしっかりと固めて、自分個人のバスケットというものをしっかりと確立して、それがゆるぎないものだという自信ができた時。その時が、ストリートなり競技バスケットなりのテクニクをつける選択肢を増やせる時、増やすべき時なんだよ」

これが、僕の考えるバスケットというものだ。選択する時期が少しでも早かったら、今まで出来ていたものも出来なくなってしまう。そういうことを起こさないためにも、僕たちストリーートの人間は教えるということについてよく考えなければならぬんだ。

安易に教えてしまうせいで、まだまだ成長途中の子たちが技の泥

沼に蔽らないようにするため。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2130w/>

ロウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

2011年12月8日03時10分発行